

日本の家と母

367.3
SA47



* 0038293000 *

0038293-000

367.3-Sa47ウ

日本の家と母

桜井祐男・著

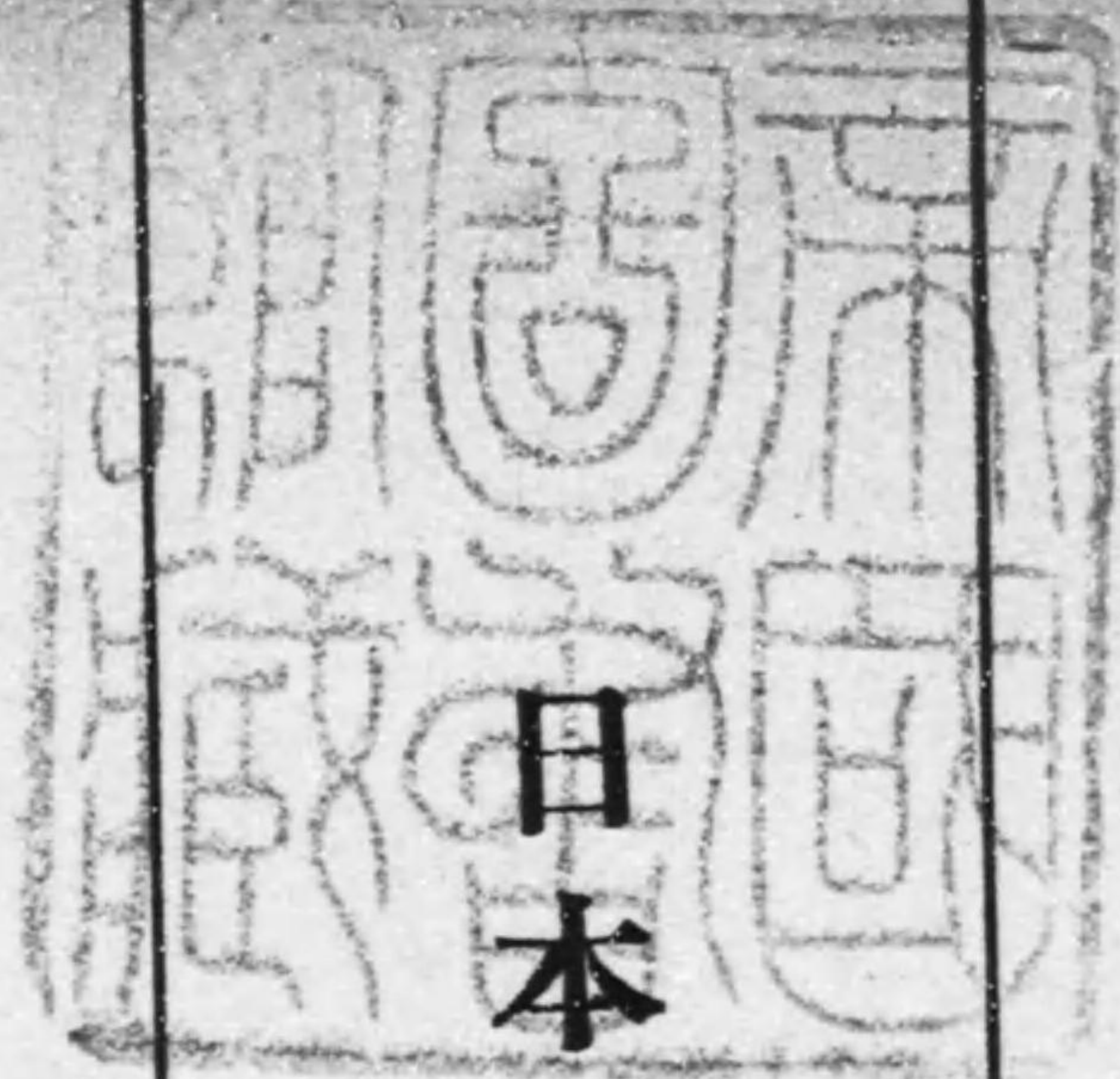
第百書房

昭和18

AGG

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月2
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

2



367.3
SA47

日本
の家と
母

櫻井祐男著



序

私はこの書を、私の亡き母に捧げたいと思つて筆をとりました。

「亡き母」といつたところで、私の母は、私の三つの春、満で數へて一年五ヶ月になるかならずの極幼少なころですから、亡き母を偲ぶよすがとなる十分な何物も持たないのです。相とう永い病床だつたといひますから、恐らく私の産後のひだちが悪くて、そのまゝ亡くなられたのでないかと思ひます。

たゞ、母の病床の炬燵の上に、登りおりして叱られたことや、母の瘠せ細つた白い手で、密柑が頂けるのを、この上ない嬉しいものに思ひ、何度かねだりに行つたことやを覚えてゐるだけで、母の顔かたちや聲の色あひなど、ちつとも覚えてゐません。お乳を頂いたことさへ覚えてゐません。

お葬式の日には誰かの背中におんぶされて、お菓子か何かを手にしつかり握つて

喜んでゐたことを、うろ覚えに覚えてゐます。それもその日がお葬式の日だったことを、よほど大きくなつてから、さうと氣づいたのでないかと思ひます。或は祖母か姉の知慧づけかも知れません。それほど、母に關しての記憶が頼りないのです。

むろん、祖母や姉や親類のものが、「あゝだつたらう。』かうだつたらう。」と慰め的に思ひさせ智慧づけてくれましたけれど、そんなものが母への印象を形づくるものではありません。後々までも残るものではありませんでした。だから、私は亡き母の面影を偲ぶ何物も持たないのです。

この淋しさは、私の年とるにつれて大きくなり、深くなり、高くなつたかは知れませんが、決して消えさるわけのものではありませんでした。恐らく私の生涯にわたつて心奥深く集くふものだらうと思ひます。

むろん、私には慈愛深い祖母があり、優しい姉が二人もあつて、母亡きが故に一さう愛し慈しんでくれたと思ひます。祖母など私が高等小學を卒業する十四五

の頃までも、温かく抱いて寝てくれたことを覚えてゐますから、それ等の愛の不足に事缺いたとは、つゆ思つてゐません。むしろ幸福だつたと思ひます。

わけて父は母が亡くなつた四十二の若さから後妻を娶らず、ずつと死ぬ七十九の高齡まで、孤閨を淋しく守り通して來たのも、一に私への可愛さからだつたと聞いては、何の不足がいへませう。

だが、祖母の愛はどこまでも祖母の愛であり、姉の愛はどこまでも姉の愛で、母の愛とは相とう距離の遠い隔りがあるのぢやないかと思ひます。母の眞の愛を知らないでゐて、祖母や姉の愛をかれこれいふ資格がないと思ひますけれど、母の愛を知らなければ知らないほど、一さう母の愛が尊く、異つたものゝやうに思ふのです。

だから、祖母が慈しんでくれ、ばくれるほど、姉がいたはつてくれ、ばくれるほど、逆さに、一さう母のゐないことを淋しく思ひ、母の愛を尊くなつかしいものに思ふのでした。

食べ物が拙ければ「母がゐたら。」と思ひ、着物が他所の子より見劣りすれば、やはり「母がゐたら。」となつかふのでした。隣の子が遊びから家にかへるとき、玄關の先きから「お母さん。」と聲大きく呼ぶのに、私は「お祖母さん。」と呼ばなければならぬ淋しさを、幾度泣きの涙で噛みしめたか知れませんでした。わけて祖母が留守でゐないときなど、その淋しさが泉のやうにたぎつて、瀧のやうに涙をおとさせるのでした。

この淋しさは、私の生涯を規定し支配しないわけはありません。何かにつけて物足りない淋しさの空虚を感じ、その淋しさの空虚から逃がれようために、物事を追ひつめ追ひつめして、或時は哲學に走り、或時は宗教にもたより、或時は科學にも入りして來たわけですが、もと／＼母がゐないでの淋しさですから、それ等の皮相なもので慰められやう筈がありません。

國を離れて奈良に十年、阪神沿線の芦屋に十五年、東京に來て三年の行路を歩いているのですけれど、何れも母を戀うてのさすらひの旅、今日もなほ母を呼び呼

びして止まないわけです。

この書も、母への淋しさを忘れようために、母を描いたものなのです。何れは自慰的な淡いものでせうが、私五十年にわたる人生をかけての母への戀ひ。まあ読んで見ていたゞきます。母を知らない子の描ける母の姿を――

昭和十七年十一月四日

――私の生れた日――

著

者

目次

第一章 わが家族制度「家」……………一

一 眞の「親」……………一

二 佛現一體の「親」……………七

三 眞の「子」……………三

四 「子」に準ずるもの……………七

五 第一次の「家」……………二四

六 第二次の「家」……………二六

七 第三次……の「家」——「國家への發展」……………三三

第二章 「家」の道……………四六

- 一 神ながらの道 四
- 二 父と母の道 六
- 三 兄弟姉妹の道 七
- 四 親と子の道 八
- 五 舅姑と嫁婿の道 一四
- 六 婢僕の道 一四
- 七 家長と家族の道 一四
- 八 祖先への道 一五
- 九 「家」と「家」の道 一六
- 一〇 「國家」への道 一七

第三章 「家」に於ける母の地位と責務 一八

- 一 「家」の基盤 一八
- 二 父と子の銜 一九
- 三 女味 二〇
- 四 「家長」への裏づけ 二六
- 五 教育 三〇

第四章 「國家」における母性的地位と責務 二二

- 一 「國家」の身體的發展——「家」 二二
- 二 職能と「家」 二六
- 三 「家」「國家」と社會 二九
- 四 母性者——道義の渴求 二九
- 五 郷土神 三〇

日本の『家』と母

櫻井祐男著

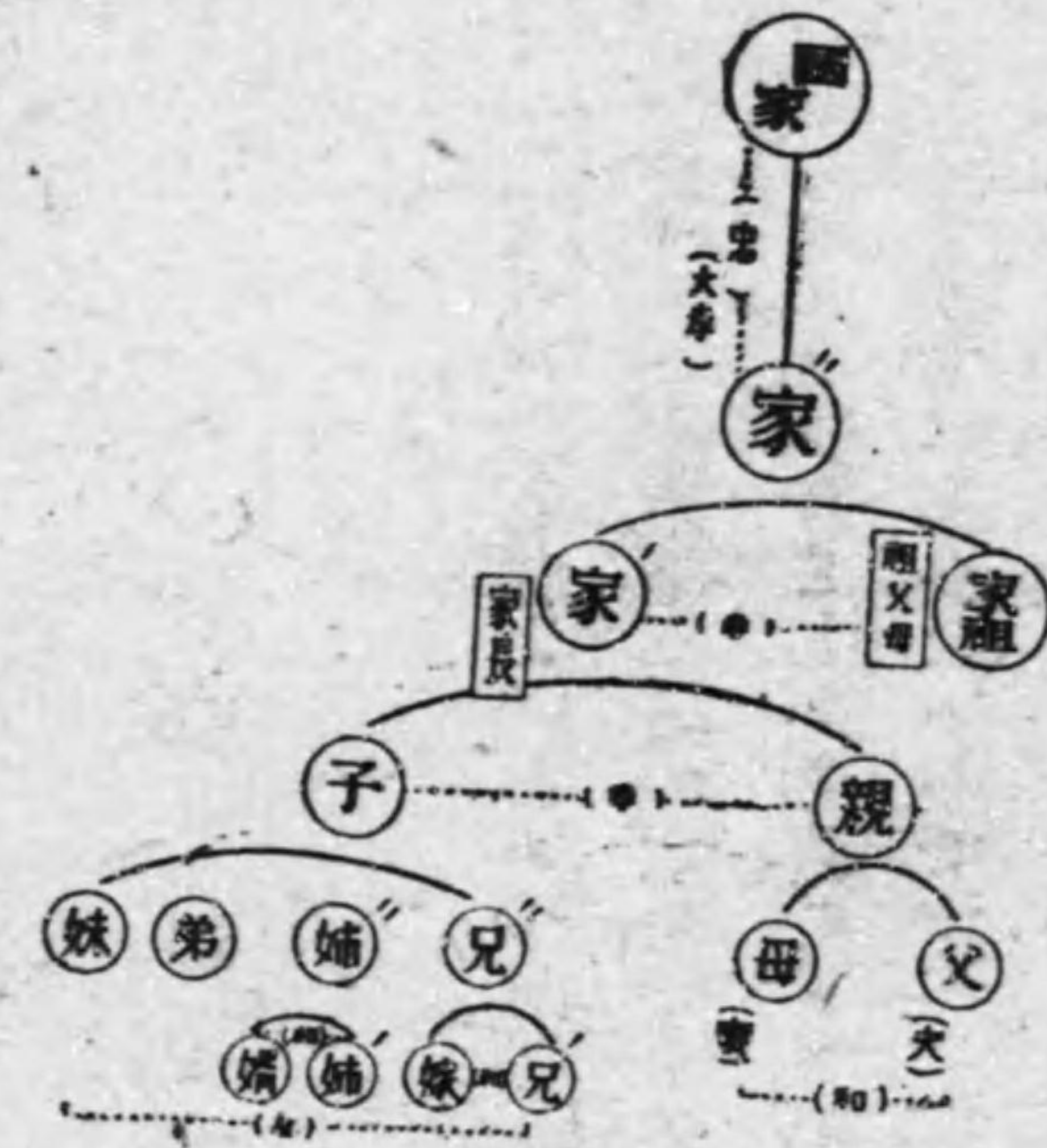
第一章 わが家族制度——「家」

一、眞の「親」

「家の戸締りせよ」といつた場合の「家」は、皆さまでも存じのやうに、私たちの日常
起き臥する建築的家屋の意味ですが、「家の名譽にかけても……」といつた場合の「家」
は、そんな生やさしい物質的・外形的なものではなくて、もつと精神的な、むろん一の宏
大な建築物に違ひないので、それも今は生々と生きて先祖の血と肉で築かれた、
有形・無形の物心兩界にわたる、住居といふよりも世界といひたいものなのです。かうし
た過現未の悠久的な世界に打建てられた祖孫一體的な、わが家族制度の組織と體形が、私
たちの普通呼ばれる「家」なのです。

かうした輝かしい他に比類ない特質の「家」がどうして出来たか、その淵源するところ極めて遠く、わが建國の肇めに遡らなければならぬと思ひますが、それは漸次叙述につ

れて明瞭にして行くことにしまして、まづわが「家」の外観的な組立——組織から説明して行くことにしたいと思ひます。これを圖式で示せば次のやうです。



で、まづ「家」の支柱をなすものは「親」なのですが、普通に「親」といへば父と母のことだと單純に考へるかも知れませんが、「家」における「親」といふのは、そんな生やさしい單純なものではないのです。單に父と母といふのは、「親」を形づくる要素だけを言つただけで、まだ「眞の「親」ではないのです。

眞の「親」といふのは、父と母が統一的に一體化され相睦みあつた情心ゆたかな生活境涯を指していふのです。父は母の世界に、母は父の世界に没しきつて、そこに人間的な醜さ、きたなきの何物もない、全く淨らかに被ぎした超我の世界——それが眞の「親」なのです。

だから、父と母は別々なものではなくて、「親」といふ生活境涯の二面と考へなければなりません。父が「親」といふ生活境涯の表であれば、母はその裏だといふことになりま

す。物の表裏といふものは、皆さまも存じのやうに、表を削れば更に新しい表ができ、更に削れば更に新しい表が出来ます。そして最後に裏に徹します。それをまた裏から削りはじめても同様です。新しい裏ができ新しい裏が出来て、最後に表に徹します。しかし削り去られた破片の何れにも、ちゃんと表裏がついてゐます。

さうした緊密不離な一體的な關係にあるのが物の表裏なのですが、「親」における父と母の關係も、それによく似てゐます。「父の裏には母があり、母の表には父がある」といふのが、眞の「親」なのです。

これを、父を a とし母を b として、眞の「親」をあらはせば、 $a \times b = ab$ となります。

したがつて父は眞の「親」(ab)を基盤として立ち、a(ab)となつて初めて眞の父となり、また母は眞の「親」(ab)を基盤として立ち、b(ab)となつて初めて眞の母となります。

この眞の「親」(ab)の基盤を失つた、單なる父、單なる母は、眞の父でなく、また眞の母でないこととなります。昔から日本では「二元一體」と申しまして、その世界にのみ「神おます」と信仰されました。皆さまもご存じのやうに、父と母は二元であり、それが統一的に一體化されれば、いはゆる人間にして神の世界に参入してることとなります。だから、眞の「親」とは神の姿なのです。

この境涯においてのみ子どもが生れます。子どもを人間の力だけで生れるものと思つては、大に間違ひです。人間と神の力によつてのみ生れます。それは普通にいふ「子ども」だけのことでなく、私たちが生産する——いはゆる拵へるものゝ全體が、この境涯においてのみ拵へられます。それが最も生命的なものなのです。その他の境涯で拵らへたものに生命的なものは絶対にありません。みな生命ないものです。

で、眞の「親」の境涯においてのみ、最も強靱な生命的な家の礎石が築かれ、最も健康な子どもが生れ、生ひ立ちます。したがつて、かうした「家」には、最も永遠的な隆昌と繁榮が持ち來されます。なぜかならば、眞の「親」の境涯は生々發展して止まない宇宙生命の實相だからです。

この父と母の二元一體的な境涯は、生活としても極限の完全形なのですから、他を統制し教育するの磁力性も、きはめて大きく高いわけです。昔から「無爲にして化す」といつた言葉がありますが、この生活境涯における教育的磁力性の偉大なことを、指して言つたものだらうと思ひます。

で、父は如何なる場合にも母を忘れず、常に母と物心兩界にわたる完全な統一的境涯に始終し、母もまた如何なる場合にも父を忘れず、父と完全な物心一如の統一的境涯に身を置いてこそ、最もよく子どもが教育され、最もよく成人させられるのだと思ひます。また一家の善ない和平幸福も、そこから滾々と泉のやうに湧き出るのだと思ひます。

父と母の間に思想や感情の、人間的な醜い畦みあひや疎隔があつたり、獨りよがりの獨

善的な専恣やわがまゝがあつたりして、とかく不和勝ちであることは、人間がゐても神がゐない形であり、父と母がゐても眞の「親」がゐない姿ですから、子どもが幾人ゐても、みな孤兒といふ悲惨なことになります。

これで一家がうまく、子どもが完全に育つと思つては、大變な間違ひです。それは東京へ行かうと思つて、下關へ行つてることになります。絶対に引かへさなければなりません。だが、かうした家が相當に多いのでないかと深く憂慮されます。

家があつて「家」がなく、親があつて「親」がないといふことは、慘中の慘だと思ひます。諦めようにも諦めようがないのです。かうした父と母の下に、子どもが福々しく純良に育つわけはありません。皆すねにすねあぐんで、多くは不良の深い谷におちます。深甚の省慮を煩はすべき點だと思ひます。

二、佛現一體の「親」

次に、不幸にして父及び母の一方が死去された場合においても、眞の「親」としての生活境涯は失はるべきでないと思ひます。眞に亡夫または亡妻の遺志をつぐといふことは、この眞の「親」としての生活境涯を飽までも堅持することだと思ひます。

昔、楠木正成が兵庫湊川に戦死したあと、その妻であり正行の母であつた久子の方は、亡夫―正成の遺志を固くつぎ、いはゆる眞の「親」としての生活境涯において、さも父―正成がなほ現世にゐますがごとく、父と母が佛現一體となつて、子―正行を教育し訓陶したものに違ひないと思ひます。

必ずや母―久子の方は朝な夕なに夫―正成の靈前に額づき、あかき燈明をかゝげ、供物をそなへ、いとも敬念に、眞の「親」としての生活境涯が、いやが上にも明澄清和ならん

ことをこれ願ひ、祈禱したに違ひないと思ひます。さうあつたればこそ、子―正行は完全に育ち成人し、父にもまさる忠誠無二の永遠的な榮光を勝ち得たのだと思ひます。

往々、世の多くの人だちは、正成・正行父子の忠誠をたゞへるに急であつて、その母・その妻の勞苦に及ぶものがありませんやうですけれど、私はむしろ、この偉大な母・妻に深き感銘と厚謝の念を捧げないわけには行かないのです。

河内は正成の城下でその勢力範圍だつたらうから、正行の母・久子の方にはよほどの好意と同情をよせたに相違ないと思ひますけれど、天下の狀勢が既に敵に有利・味方に不利だつたわけですから、ひよつとすると、四面楚歌の冷たい怨嗟と侮辱の白眼を、久子の方にむけはしなかつたか。

その逆遇の間に立ちながらも、なほ雄々しく健氣に夫―正成の遺志を繼承し恪守し、正成在世のときにも増した悲壯敢爲なもので、眞の「親」としての生活境涯を堅持し、子―正行を披導し薰陶したところ、並大抵の勞苦と辛酸ではなかつたらうと察せられます。

その辛酸と勞苦のほどを思ふにつけて、かよわき女手の上に涙の滂沱たるを禁じ得ない

ものは、果して私だけでせうか。

だが、この妻・この母あつたが故に、夫―正成も心おきなく湊川で勇戦敢闘することが出来たのでせうし、子―正行も何の未練なく四條畷の花と散ることが出来たのだらうと察せられます。私だち同胞の日本國民として、この妻この母の偉大を讃仰しないわけには行かないと思ひます。

だが、母の性格的下向性は、常に大地深く喰ひ入つてゐるものなるが故に、正成・正行のやうに世の表に輝かししくは出ません。ために、多く埋木的に見逃がされ勝ちであるは、至極遺憾なることだと思ひます。

でも、生半解に世の表に輝き出ようよりは、地下深く喰ひ入つて、「忍従」の無際限的な性格に徹しきつてゐなさるところに、却て萬斛の涙をわかせる偉大なものが見られます。私はむしろ、そこに母の神としての崇高さを感じ、景仰おく能はない肅嚴なものにかられます。

なほ正行の母ほどでなくても、父なく母だけの不遇な家庭から、幾多の偉人傑士の輩出

があるのは、やはり忠貞と佛心にあつい母の性格から、前述の眞に「親」としての生活境涯が、明澄に肅嚴に子どもの前に示顯された賜物に外ないと思ひます。

すなはち正行の母と同じやうに、夫―父なる佛前にいとも聖なる禮拜をさしげ、子どもの生長と發展の上に、絶大な加護と恩寵あらんことを、これひたすらに祈請し念願し、そこに夫―父と佛現一體の明鏡な至上涯を體現し、子どもの前ではもう單なる母ではない、佛神具象の崇高しい姿となつて現はれたものと思ひます。

この靈境的な崇高しい母の姿が、多大に子どもを刺戟し發奮させ、大奮闘大努力の生活に精進させた結果だと思ひます。この信仰的な母の偉大に何人も頭をさぐべきであり、また下げざるを得ないのです。

今度の支那事變から大東亞戦争にかけて、夫―父を亡くした妻―母がよほど數多くゐられると思ひますが、まことに一家のためご名譽この上ないことと存じます。何卒ゆめて悲歎にすることなく、夫―父のご遺志を深く身に體し、佛現一體の眞の「親」となつて、お子さまの育成教育のために、格段のご努力と精進なされるやう神かけてお祈り申し

たいと思ひます。それが如何ほどに亡き夫―父へのご冥福か知れないと思ふが故です。

また後に遺つたお子さまにしても、單に母だけの姿では絶対に育たないのですから、飽までも精進これご努力になつて、佛現一體の崇高しい眞に「親」としての生活に入られるやう呉々も願ひしたいと思ひます。これが日本の「家」における、母の最も高き節操であり忠貞であると信じます。

次に、こゝで繼妻・繼母の問題について申し上げておきたいと思ひます。

繼妻・繼母もその文字が示すやうに、妻をつぎ母をつぐべきものなのです。今まで繼妻の方は、先妻の幻影や遺品、甚だしきはその遺牌きでも、夫及び家の周邊から拂ひのけようとしたやうですけれど、それは大變な謬見だと思ひます。

繼妻は文字通り妻をつぐべきものなのですから、先妻の一切のものうちに没入し、そのうちに融けあはなければならぬと思ひます。いはゆる先妻と佛現一體の至上涯において一切の生活が示顯されなければなりません。それでこそ眞の繼妻であり繼母であります。でなくば、夫とは明純無垢な眞の「親」としての一體的な生活に入ることが出来ませ

ん。その生活に入り得ない以上、先妻の子どもを眞にわが子として愛し得ないばかりか、自分の子どもにもまた眞の「親」として接し得ないことになります。

かうなつては、父・母・子の三者が共に悲惨な不幸におちることになります。この點、繼妻の方は宗教的に聰明でなければならぬと思ひます。自分のちつぽけな我執と感情はかなぐり捨て、勇躍して先妻の靈を體し夫の懷に抱かるべきだと思ひます。それは父・子及自分の三者を救ふ所以だと思ひます。

如何に夫の腦裡から先妻の幻影を拂ひのけようとしたところで、それは絶対に不可能だと思ひます。だから、繼妻はむしろ先妻の冥福を祈りその靈志を體して夫に接した方が、どれほど夫をよるこばせ、どれほど容易に一體的な生活境涯に悟り入られるか知れないと思ひます。

この生活境涯こそ、先妻の子どもへの眞の「親」であるばかりか、自分の子どもへの眞の「親」なのですから、どの子どもも差別なく立派に育ち成人します。一家にとつてこれほど幸福なことはないと思ひます。

これに反し、繼妻にこの宗教的悟りの聰明さがなく、事ごとに我執と小感情にとらはれて、先妻の幻影にをびえ立ち、苛立しく尖つてばかりゐるやうでは、夫としても面白い筈はなく、思はずも無口となり或は外出がちとなるは必然だと思ひます。それはまた繼妻のお氣に入らう筈はなく、かうして鬼ごつこのやうに不幸な深瀬へ深瀬へとおち込んで行きます。

子どもとしても「親」のゐない寂寥に明け暮れしませうし、また繼妻自身としても、それは決して幸福であらう筈はありません。いはゞ父・母・子どもが相共に不幸な谷底におち込んでることになります。深く思省すべきだと思ひます。

三、眞の「子」

次に「子」についても「親」と同様ながいへます。兄弟弟妹が友愛相助の聖なるま

ところにおいて相融和され一體化されて初めて眞の「子」といふことが出来る。それでこそ初めて「親」の前に眞の「子」として跪くことが出来るのです。

兄弟姉妹が相助友愛の聖なるまごころがなく、相融和されず一體化されない單なる兄・姉・弟・妹の個々では、子の外貌はそなへておましても、魂のない形骸だけの子といふことになりません。それでは眞の「子」とは言はれません。

眞の「子」としては絶対に友愛相助の聖なるまごころ——魂が入つてゐなければならず、生活的には相協援し一體化されなければなりません。それでこそ眞に「親」に孝たること出来るのです。この根本をぬきにして「子」たるものゝ存在はないと思ひます。

兄弟姉妹の個々において、親の言ひつけに従順なることも悪いとはいひませんが、しかしその仲が常に不和で喧嘩がちであり、友愛相助の聖なる情心に缺けてるやうでは、不孝の最も大きいものだと思ひます。それは子があつて子「が」ゐない形ですから、親として諦めようにも諦められない心痛なことだと思ひます。

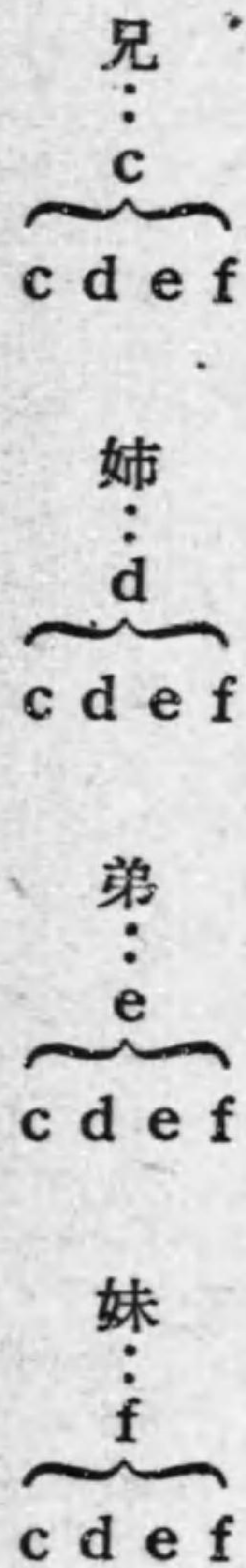
ひよつとすると、他の兄弟姉妹はどうあらうとも、「自分だけ親に孝養つくせばいゝ」

と考へるかも知れませんが、そんな小乘的なちつぽけな下心では、孝養いかに高からうとも、まだく徳の至れるものでないと思ひます。親として絶対にそれで満足されるものはありません。

むしろ暫く親の膝下をはなれて、完全に眞の「子」たることに努力した方が、よし直接的には多少孝養に缺くところがあらうとも、それが親としてどれほど嬉しいか知れませぬ。そこに眞に大乘的な神佛もめでたまふ「大孝」の至れるものがあると思ひます。

で、兄弟姉妹が眞の「子」たらうためには、絶対に友愛相助の聖なるまごころから相融和し一體化し、その基盤の上に立つて何事も爲さなければなりません。いはゆる一舉一動がその基盤の上に立つものでなければなりません。

兄をc、姉をd、弟をe、妹をfとして、これを圖式であらせば次のやうになります



次に、兄に嫁をもらつた場合——これも兄の夫婦的半量として嫁は高次の兄のうちに包攝され、他の姉弟妹と同様に「子」の列に加はります。いはゆる「親」から見て「子」の一員となるわけです。姉が婿をもらつた場合も同様です。日本の家族制度もなか／＼巧妙に出来てゐると思ひます。哲學的に破綻なく、一家がうまく統一すべく出来てゐます。全く敬服の至りです。

こゝに來て、嫁・婿と舅姑、小舅姑の間における倫理關係が、如何なる形質のもので動くべきか——も明瞭されるわけです。すなはち嫁・婿は舅姑には「子」であり、小舅姑には兄弟または弟妹であるといふことになります。

だから、眞に理想的に出来た家庭では、家族の數が幾人ゐようとも常に和氣藹々たるもので、舅姑・小舅姑の他人めいた言葉も消え、嫁婿の冷たい意識も消えうせて、眞に「親子」眞に「兄弟姉妹」といふ温かい情心ゆたかな日々を送り迎へられ、家族全たいの生活が嬉々として朗麗に營まれて行くわけです。全く理想的な「家」とはかうした家だらうと思ひます。

四、「子」に準ずるもの

私だち日本種族の最も特色的な性格は、血縁關係の強靱無比なことで、その思想的諦觀が擴延して、あらゆる無生物にまでも及んでゐることだと思ひます。

すなはち、その諦觀の最も高いものに至つては、あらゆる一切のものを「わが身」と觀じ、或は「わが子」と觀じます。或は「兄弟姉妹」と諦觀して親しみなづきます。「四海同胞」といふ言葉もこの諦觀から出たものだらうと思ひます。まことに長多いことだが、神武天皇の「八紘爲宇」の肇國のご精神も、この高い諦觀からお發しになつたのではないかと拜察申してゐます。

で、この思想的諦觀の淵源するところ極めて悠遠であり、遠く肇國の初源に遡らなければならぬと思ひますが、その根元とするところは、私だち日本種族の血液的性格として、

本然的に具有されてゐるのではないかと思ひます。

むかし世の下積みとなり物の數にも入らなかつた「やくざ」の社會においてさへ、生命を約束した場合、「親子」の血縁關係において「親分・子分」といひ、或は「兄弟」の血縁關係において「兄分・弟分」といつた位ですから、よほどこの血縁的諦觀の思想が、「やくざ」の下層社會にまでも徹底し生活化されてたものと見えます。

これは單なる生活上の利害關係、或は打算關係から來た生やさしいものではなくて、全くそれ等の一切を超絶した血液的・精神的、或はもつと強く本能的なものだと思ひます。いはゞ私だち日本種族の必然的な血液的要請として、それを欲しそれを希求して來たものと思ひます。

上古時代に行はれた「殉死」のときも、「親木が枯れれば子木も枯れる」といふ必然的な諦觀に深く根ざし、「飽きでも主従—親子の血縁關係を絶ちたくない」といふ、いみじくもいとしい念願から來たものと思ひます。いはゆる「來世までも主従—親子の血縁關係にありたい」と願つた至心至情の果てから來たものと察せられます。

その他、諺にも「袖の振りあひ多少の縁」とか、「同じ木蔭にやどるも何かの縁」とか言つたのも、この血縁的諦觀の思想と感情が擴延されて、さうした諺にも出たのではないかと思ひます。これ日本に佛教的興隆を見た所以でもあり、また佛教によつて愈々その思想が深められた所以でもあると思ひます。

これ等の點から見て、私だち日本種族は本然的・血液的に親和的であり平和的であり、性格的には宗教的・母性的だと思ひます。いはゞ私だち日本種族ほど親和的・平和的・宗教的・母性的な種族はないと思ひます。それは附双的なものではなくて、血液的・本然的に生れづいてゐるものと信じます。

日本に、西洋のやうな「科學」が發達しなかつた原因も、他に色々な事情もありませうが、その主たる原因は、私だち日本種族が宗教的・親和的だつた性格から來てるものと思ひます。

日本に林檎が落下しなかつた筈はなく、また鐵瓶の湯氣がたぎらなかつた筈はないと思ひます。また雷が轟かなかつた道理もないと思ひます。

だが、私だち日本種族は多大に宗教的・血縁的だつたが故に、林檎の落下を芭蕉の句——「古池に蛙とびこむ水の音」の寂音ときき、鐵瓶の沸き立つたぎりを、四疊半のせまい茶室における天然の妙なる音楽ときいたかも知れませんが、それを萬有引力説だの、蒸氣機關の動力だのと考へる、そのことが既に、それ等と血縁關係を絶つ傷ましいことではなかつたかと思ひます。雷なども、天神の怒りたまふ神鳴りと畏れ敬して、ひたすらに敬念の赤誠をさしげるほか餘思なかつたところを見ても、十分にうかゞはれると思ひます。

この點、日本の女性——母たる方々は、大に自覺していたゞきたいと思ひます。だが、それは今日の科學的進歩を阻止しようとするものでは絶対にありません。今日の科學を正しきにさへかへせば、究極は宗教につらなるものと思ひます。しかもそれは太陽のごとく燦々と光輝ある宗教となるであります。

わが建國の大祖に、女性にして太陽のご性格あらせられる天照大神のましますことも、私だち日本種族の血縁的性格のありかを、ご明示になつてゐられるのではないかと、恐るゝ拜察申し上げます。

で、結論として、私だち日本種族の性格は血液的・本然的に、親和的・平和的・宗教的、母性的なのですが、その澎湃たる性格の色合ひが、日本文化のあらゆる面に顔を出してゐることは、皆さまもご存じのことと思ひます。

いはゆる殺戮の道具である日本刀は護身の女神であり、一粒の米にも佛を感じ、犬猫にも人間的な人格を見出すといつたわけです。戦争にしましても、それが「聖戦」と諦観され信念されない以上、絶対に戦争しないといふのが、日本傳來の血液的な掟なのです。そこは實によく女性的に隠忍します。

だが、一たび起てば「消極の積極」とも申しませうか、それは恐ろしい勢で起ちます。堅剛そのものです。如何なる強敵といへども屠らずんば止みません。日清・日露・大東亞戦争などその好適例だと思ひます。

「聖」とは宗教的境涯の極地を指します。殺戮慘禍の極限である戦争を宗教化するほど偉大な國民はないと思ひます。私だちは「日本種族」といふ偉大な血液の所有者であることを、心から壽ぎたいと思ひます。

で、私だち日本種族の血液的性格が、その苗床とも考へられる日本の「家」に、最も色濃くあらはれることは必然だと思ひます。すなはち「親子」「兄弟」の近親的血縁の強靱なことは申すまでもないことですが、全く血縁關係のない無縁なものでも、血縁的に「子」として待遇し、家族の一員に準ぜられたものに、まづ召使——婢僕があります。

これは昔の武家時代においてはその數も多く、家臣・家來・從者などいふ言葉もあつて、義においては「主從」と申しましたけれど、情においては「親子」でありました。その情と義の濃やかで嚴しかつたことは、皆さまも十分ご存じのことと思ひます。これはひとり「武士」階級ばかりでなく、上下各層おしなべての良風美俗でした。

次に犬・猫・鶏・牛・馬などの家禽家畜があります。それ等は性は獸鳥であり人間でありませぬけれど、やはり一屋の下にあるといふ因縁から、「子」として遇され愛育されました。更に「家」の周邊にある草木土石なども同様「子」のごとく身内として愛護され撫育されるのを例としました。家財道具なども決して死物としては取扱はず、すべて生き物として取扱ひ決して粗略にはしませんでした。

その他、苟もわが一屋の下にあるものは、その生あると生なきに係らず、血縁化に多少の厚薄強弱があつたにしましても、悉く「わが子」「わが身内」として血縁化し、大和的に包容し温かくいぶきをかけ、慈しみ愛でたことは否定すべくもありません。まことにわが日本における「家」は、大慈悲權現の殿堂だつたとも考へられます。だから、日本の「家」では、小さいながら肇國の精神たる「八紘爲宇」の實現が立派に出來てゐるのです。日本にこの強靱な「家」がある以上、天壤と共に無窮なることも十分に肯かれると思ひます。で、更に望むらくは、これを今一段と大きく擴延して、國家化することだと思ひます。といふのは、これを行政的にいへば字・村・町・市・郡・縣を「家」化し血縁化することであり、更に學校・官衙・銀行・會社・工場等を「家」化し血縁化することであり、また今日喧しく言はれてる隣組・部落會・町會などを「家」化し血縁化することだと思ひます。更にこの思想・諦觀を擴延高化して大東亞を八紘爲宇化すべきだと思ひます。

今日、國家と個々の「家」とは申分なく緊密に強靱に結びついてゐるやうですが、どうも横の社會面的には何か空疎薄弱なものがあるやに思はれてならないのです。これは後ほど

——「第四章……母の國家的地位と責務」の章において詳しく申し述べたいと思ひます。

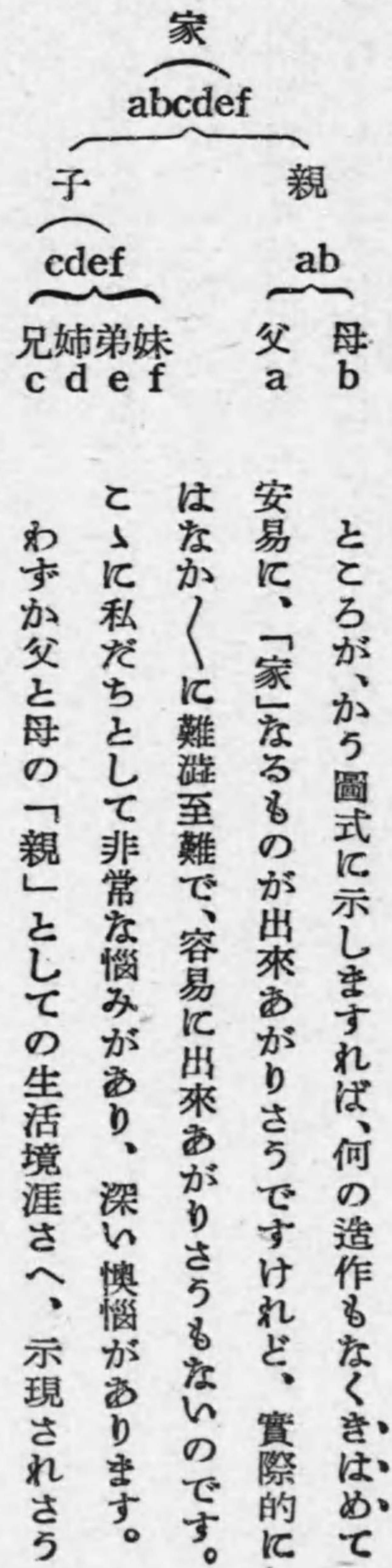
五、第一次の「家」

父と母が統一的に相渾和し一體化すれば、そこに「親」としての生活境涯が示現されます。父をaとし母をbとすれば、その生活境涯は、 $a \times b \parallel ab$ であることは、既に述べた通りです。

次に兄弟姉妹が友愛相助の聖なるまごころにおいて相融和し一體化されれば、そこに「子」としての生活境涯が示現されます。兄弟姉妹をそれぞれにc d e fとすれば、その生活境涯は $c \times d \times e \times f \parallel cdef$ となります。

この「親」と「子」が更に統一的に相渾和し一體化すれば、そこに「親」と「子」をもつて形成される一段と高い複雑な生活境涯が示現されます。この生活境涯が普通にいふ

「家」なのです。私はこれを第一次の「家」と申してゐます。といふのは、「家」は更に高次に進展して「國家」となるものであることを、深く信念してゐるからです。で、「家」を圖式であらば次のやうになります。



で容易に示現されないのが普通なのです。これは皆さまも十分に存じのことに思ひます。今日一日どうやらうまく行つたかと思へば、明日はもうぎごちなく打ちこはされてゐます。二つのものがちぐはぐか、或は唾み合つてゐます。よほどの精進努力をいたしませんと、この生活境涯の永續といふことはむづかしいと思ひます。ましてや兄弟姉妹の一體的な生活境涯に至つては、そこに長幼の生活的異差があつた

り、またさうした心掛けに乏しかつたりして、なか／＼に至難なやうです。多大にお母さま方の指導的配慮や助成的労苦が要せられるわけです。

それが更に、「親」と「子」の一體的な生活境涯——「家」になりますと、一段と困難さが増し、いはゞその具現が難中の難と言はなければならぬと思ひます。それは「家」としての生活境涯が、よほど高次化して來てるからです。

統一が高次化すればするほど、その統一的堅持と保有が困難の度を増します。そこによりほど確とした統一力ある一者が出現しませんが、容易に保つては行かないものなのです。

この統一的な一者への信憑と要請は、統一が困難であればあるほど、いはゆる統一的悩みと懊惱が深ければ深いほど、統一を構成するものゝ各自の心意のうち、必然の要請として目ざめ希求されて來ます。これは宗教にも似た敬虔なものなのです。この一者が「家」における「家長」となるのです。

統一にこの一者を得れば、その一者の偉大量に比例して信仰され、多岐と分離が整頓され、一に歸統されることの平安と安易を覺えます。日本の「家」ではこの一者を父がつと

めるのですが、父のもつ性格と地位から見ても、まことに妥當で必然なことだと思ひます。

もと／＼統一的な一者は神聖にして犯すべからざる神位にあるもので、その舉措は絶対的で彼これ言あげすべきでないのですが、しかし父は有待の身をもつてこの神位についてるのですから、その責任や重且つ大と言はなければなりません。

父の舉措如何によつては、統一的な一者たる絶対の神經をけがすことになりますので、この點はよほど深く考へていたゞかなければならぬと思ひます。一家の隆替・休戚は、一に父の双肩にかゝつてると申すも、敢て過言でないと思ひます。

むろんその構成員たる家族全員が戮力して大に努力しなければならぬと思ひますが、その努力の根柢をつちかふ、そのことさへ統一者たる「家長」の責任ではないかと考へますので、「家長」たる父はあらゆる點において、聰明者であり慈悲者であり人徳者でなければならぬと思ひます。これはなほ「家の倫理」の項において詳述したいと思ひます。

六、第二次の「家」

更に「家長」は第一次の「家」を率ゐて「家祖」と融合一體化しますれば、第二次の「家」を形づくります。「家祖」は祖父母を最低位として層々重疊して初原の最始祖にっ
らなります。

この連綿たる血液の繼承は「親子々々」の関係において、既に私だちは總べての祖先を血液的に繼承し内包してゐることを物語ります。即ち父をaとし母をbとしますれば、「子」の血液は $a \times b = ab$ となり、「子」は父母の血液を繼承します。したがつて「孫」の血液は $ab \times a'b' = aa'bb'$ となり、曾孫の血液は $aa'bb' \times a'a''b''b'' = aa'a'a''bb'b''b''$ となり、孫々相ついで祖先の血液を繼承し、祖先の數だけ繼承となるわけです。

で、「家祖」を奉祭し佛現一體の至上境に入ること、祖先の靈心・靈容を身につけることに違ひないのですが、それはつまり自分の體内に繼承し内包してゐる祖先的な血液の自覺と確認に外ならないのです。この血液的自覺と確認は私だちに巨大の生活力と不撓の敢闘心を與へてくれます。

で、私だちに「親がなく祖先がない」と思ふほど味氣なく、士氣を萎縮させ阻喪させるものはありません。私だちに「健康な親があり、連綿悠久なる祖先がある」と識認され信念されてこそ、初めてあらゆる人生の苦難にも堪へ、また克服しても行けるのです。更にまた苦難が倍加しようとも生き抜くことも出来るのです。

私だち一個の力といふものは、さう大したものではありません。私だちの背後に身に直接して、「層疊連綿たる偉大な祖先がゐます」と信念され確認されてこそ、異常な人力以上の勇猛心もわき、超絶大な不撓の堅忍力も高く保有されるのだと思ひます。

祖先を敬崇しない、また敬崇に値する祖先を持たない種族は必ず滅びると思ひます。この意味において、萬邦に比類ない類稀の偉大な祖先をもつ私たち日本種族の、多慶至福を壽ぎたいと思ひます。

大家族制の氏族時代においては、家祖は氏神として奉祭されたのですが、大家族制が今日のやうな小家族制に轉移されるにつれて、家祖の崇祭は多く佛祭で行はれるやうになりました。

皆さまもご存じのやうに、佛教が欽明天皇の十三年に渡來したのですが、日本における祖神への信仰・敬崇が、如何に根強いものであるかをまざまざと見、これに楯ついては到てい弘流の道がないことを知りました。だが、そこに一の大きな洞穴があることを見つけたのです。

といふのは、今申しましたやうに、祖神への信仰・敬崇はまことに根強く敦厚なものはあつたが、それは主として氏族的團體として、或は聚落的部邑として神祭で行はれたもので、氏族の個人、或は小家族制に分岐した「家」といふものには、その奉祭神祀がなかつたのです。そこに新來の佛教が入込む大きな洞穴があつたわけです。その洞穴へ佛教は多大に祖先尊崇化した日本的なもので深く喰ひ入つたのです。

だから、日本にこの洞穴がなかつたら、佛教が如何に教義が高遠であらうとも、今日の

やうな隆昌はかち得なかつたかも知れないと思ひます。これは日本における佛教の發達史をひもとけば、釋然とお判りのことと思ひます。だが、今その餘裕もありませんから割愛しますが、その間、佛教はたゞの一度も日本古來の祖神尊崇にむかつて楯ついたことがなかつたばかりか、却て祖神を敬崇し神の道と兩存すべきことを、これ努めて來たとだけを附記しておきたいと思ひます。

だから、今日、日本の私たちとしては、日本古來の祖神尊崇的信仰と印度傳來の佛教とは、何ら抵觸背馳するものではなく、むしろ兩者が渾然たる一教として役立つてゐるだけで、宗教としてはキリスト教のごとく偏狭なところはなく、全く自由無碍、潤達として宏大もない世界に生きてゐるやうです。

佛の信仰を抱いて神前に額づくも、神のお怒にふれるといふ杞憂もなく、また神を奉祭して佛に歸依するも、佛意にさからふといふ心配もありません。私の家などは佛壇のすぐわきに神棚が奉置されて、朝な夕なな抹香のかをりや蠟燭のほひなど、神棚の周邊に雲霞のやうに浮遊してゐます。それで別に神威が逆鱗あらせられるとも考へなければ、また

佛意のご氣色を損じてるとも考へてゐません。

むしろ私は、神は私たちの清なる世界を象徴あらせられ、佛は濁れる世界を象徴あらせられるものとして、敬崇これ努めてるわけです。日本ではもう神の道でもなく佛教でもない、神佛一體化の教宗として尊崇され信奉されてるものと思ひます。これが私だち日本種族の血液的要請からの宗教だと思ひます。いはゆるこれは、私だち日本種族の血液の振幅が非常に廣大だといふことを語る證左だと思ひます。

だから、家祖尊崇が神祭で行はれようと、或は佛祭で行はれようと、そこに何等の矛盾やそこはないわけです。やがては護國の神として靖國神社に奉祭せらるべき英靈の公葬が、市や町や村においては佛祭で行はれることは、もう今日では常識で何ら異とするに足りません。たゞ國家的な崇祭だけは、今日もなほ肇國の典例にならひ神祭で行はれるわけです。

で、朝な夕なに祖先に對し敬崇怠らず、わが血液の悠遠宏久なるを想ひ、身を淨め氣をしづめ、たゞ一念に加護恩寵の高からんことを請ひ願ふならば、必ずや祖先の靈心その身

に垂れましくて、そこに麗朗なる佛現一體の至上境涯が示現されるであります。

この姿こそ一家統帥の大慈悲的なみ親の姿があり、永遠的・立體的な恒久に潰えぬ確固不動なものです。こゝに來て、血縁關係を主軸とした、日本の「家」の完成的な姿を見ます。

更に「家」は第三次への發展を見ます。これが今日、國家——國の「家」と稱せられるものです。詳しいことは、次の項に——

七、第三次……の「家」——國家への發展

更に、「家」と「家」が統一的に融和し一體化されて、上御一人の側近へと進展します。これが普通にいふ日本國家——「國家」なのです。

今まで私たちが國家の「赤子」として、上御一人に對し奉り、眞の近親血縁も嘗ならな

い緊密強靱なもので歸一申しあげ、現在もまた申しあげてゐることは無論ですが、しかし遺憾なことには、それが孤^{みなし}的・單個的・小乘的なもので、上御一人に對し奉つて、眞の大乗的な連帶責任ある「赤子」ではなかつたやうに思はれてならないのです。

むろん、前にも申しましたやうに、私だち日本種族は、血縁化の諦觀と思想が濃密醇厚で、わが一家にすまふ婢僕・寄寓者は申すまでもなく、家禽畜・草木・果ては無生物の石ころまでも、「わが身」・「わが身うち」として血縁化し、双翼のうちに温かく抱く良風美俗があり、その思想・諦觀が擴延されて「八紘爲宇」の世界觀ともなり、大宇宙觀ともなるのだと思ひますけれど、どうもそれが今日の状況では、一家中心主義の偏狭に、片より過ぎてゐるやうに思へてならないのです。

いはゆる「家」と「家」の全國一體的な横の大きな聯繫脈絡がなく、たゞ單に孤的に上御一人に歸一申してゐるだけで、連帶責任的な大きなものでないやうに思ふのです。これでは上御一人に對し奉つて申譯なく、また陛下の大まろやかな御満足をうることも出来まいと思ひます。だとすれば、眞の「赤子」ではないことになると思ひます。

これは、兄弟姉妹が一如的に相融和し一體化されなければ、眞の「子」でないと同じやうに、私たち並に日本の「家」全たいが、身體的に、一如化し一體化し、打つて一丸とならなければ、眞の「赤子」、眞の「國民」、眞の「國家」ではないと思ひます。だが、遺憾なことには、この思想・この考へ方が非常に足りないと思ひます。

むろん、今まではそれでよかつたかも知れませんが、今日の大東亞共榮圈の確立、世界新秩序の建設を大目標として、大東亞戰爭遂行のまつた、中にある、緊迫せるこの國家情勢としては、絶対にそれで満足すべきでなく、またこの大理想を實現するには、餘りに非力で薄弱だといふことになるのです。

だから、よろしく大飛躍的に血縁諦觀の大擴延を行ひ、全國一億の私だちが一丸一體となり、相率ゐて連帶的に上御一人に歸一申しあげ、一日も早く「高度國防國家」の身體的な體制を、完成しなければならぬのです。

むろん、大東亞戰爭が勃發して以來、「一億一心」とか「隣組常會」とか、漸く叫ばれて、その氣運に動いてはゐますけれど、まだ、一家中心主義であり、悪くいへば利己主

義で、「自分だけ、或は自分の家さへよければいゝ」といつた思想・考へ方以外に、一歩も出ないのです。

それが、國家の政策に不満がちとなり、進んで協力しないばかりか、政策の裏をくゞつて買溜となり、賣惜しみとなり、闇相場となつてゐるのだと思ひます。この犯罪取締の爲に國家がどれほどの精力を浪費してゐることか、量り知れないものがあるのです。國家のその精力はすべて敵方に向けらるべき國力なのです、その國力が國內に浪費されてゐるのです。惜しいことだと思ひます。

昔は、「向三軒・兩隣」といひまして、この五軒が相助的一體的に生活すべく法制づけられてゐました。これが今日の「隣組」の始まりだと思ひます。この隣組は徳川幕府の自己擁護的な下心も手傳つて、相當厳しいものでした。生活的な扶助援護はむろんのこと、甚だしきは幕政違反の責任までも連帶的に負はされました。すなはち、一人の違犯者があれば一家全員は申すまでもなく、隣組全たいの責任でもあつたのです。

今日、これほどの厳しいものは如何かと思ひますけれど、それほどの固い決心と覺悟と

責任感があつていゝと思ひます。そして固く聯契し共苦共甘すべきだと思ひます。それが更に逐次的に擴延發展されて、「町會」となり「部落會」となり、行政區劃的に上進されて、村・町・市・郡・縣・府となるべきだと思ひます。

昔の部落には、氏族制時代の大家族的なしきたりをそのまま残して、よほどよく血縁化され、緊密醇厚なもので一體化されてゐるところがありました。

皆さまざま存じのやうに、部落には必ず氏神があつて、それが部落諸事を中心をなしてゐました。いはゆる祭政一致です。神を祭ることによつて、分離し荒みがちな部落民の人心を柔げ取まとめ、常に温かく一に歸一させてゐました。

年中行事として、月一回の例祭が行はれ、わけて春秋の大祭は部落あげての總力によつて、いとも賑々しく行はれました。奉納相撲・競馬・武藝などの競技によつて、少青年の士氣が作興され、また奉納田舎芝居・舞踊・能音楽・催物などによつて、部落民藝の發達が促され、情操方面の陶冶と訓練が行はれました。と同時に、部落民の休養娛樂の機會でもあつたのです。

また部落各戸から寄進された神前への供物は、その年收穫の逸物ばかりで、それが自然と品種の改良増産の奨励ともなりました。そはたゞ單に増産のための増産、品種改良のための改良ではなく、一に神への敬虔な奉仕から得られた賜物でした。

佛事の年中行事として大きいものに、盆踊・報恩講などがあることは、皆さまもお知りと思ひます。報恩講は自分の「家」でも行はれましたが、部落一寺のお寺では、最も盛大に行はれました。

さうした大祭やお盆・報恩講には、一家眷族のものが、道の遠近を問はず集つて來まして、一家團らんの一ときを過しました。手づくりのお粗末な、それも心からの馳走に、一同が舌うち鳴らして、お互に久闊を謝し消息を語る柔やかな空氣のものでした。

その他、神佛何れとも、また「家」「部落」何れともつかない年中行事に、お正月・節分・節句・地藏祭・彼岸祭・田植祭・蟲送り・お月見・菊祭・山祭・濱祭・田祭といったものがありました。北國の或所では雪祭までも行ひました。

私たちの子ども時分には、さうした年中行事が次々と追ひかけるやうにあることが嬉し

く、夜も眠れないほどでした。「もう幾つ寝たら何だ」といふことで、小さい紅葉手を折つて指折り數へるのでした。それはまた子どもへのいゝ教育の機會でした。それ〴〵の行事の由緒や歴史を、その度ごとに聞かされるのでした。昔は學校といふものがなく、主としてさうした年中行事によつて躰けられ、教育されたのでなかつたかと思ひます。

なほ、部落にはさうした年中行事の外に、春秋の多忙なときには、炊事・植付・刈入れ・溝路の土工などを、部落の共同作業として行ひました。それがまた勞力の節減となり増産への督勵となりました。と同時に、部落民心の一體化―融合を生活的・實踐的に促進もし強固にもしました。

だから、全部落は部落長を中心として、眞に一家のやうに和氣霽々たるもので、無慾で純眞な彼だちは、嬉々として日常の生活を樂しむことが出來ました。そこに血縁的諦觀の如何に高きものがあるかを、泌々と味はさせられました。

だが、これは明治の中年ころから、西歐の物質的・科學的文化の中毒が見え初めたころから、かうした日本固有の大家族的な血縁化の麗はしい部落から、お祭が影をひそめ、お

盆が見えなくなつて行きました。それはつまり部落から神佛が影を没したことなのです。いはゞ部落の人々が神や佛を失つたことなのです。人が神や佛を失へば、動物的となるより外ありません。この他の樂しかつた年中行事も、片端から消え失せました。

だから、部落は素漠、砂をかむやうな味氣ないものになつて行きました。共同作業も分離し、部落はばらばらになつて行きました。そして都會の眩惑に目がくらみ、都會へくと人心が集中するやうになりました。これ地方の農漁山村が萎靡し、都會が徒に膨大した所以なのです。

この文化的中毒がまた、日本の「家」に影響しないではゐませんでした。日本の麗はしい良風美俗を、片端から脅かしたことは言ふまでもありません。「家」の空氣が夥しく荒れすさみ、若夫婦と老夫婦は、遠く離れた別屋に住むやうになりました。これは精神的にもさうなので、かうした別屋的な思想、感情が生活の一切を支配してゐました。

だが、時は遂に來ました。滿洲事變・支那事變・大東亞戦争と・次々と私たちの上によつて來ました。いはゆる試煉の秋が來たのです。試煉が大であればあるほど、犠牲の大を

要求します。犠牲とはいけにえ、血のことなのです。多大の血を要求します。

殊に、大東亞戦争は國家の興亡安危をかけての大戦争なのですから、その完遂までにはどれほど巨大な血が要求されることか。測り知れないものがあると思ひます。私たち日本種族の血の最後の一滴までも、捧げつくさなければならぬかも知れません。またそれほど覺悟と決心で當らなければ、成就しないと思ひます。

だから、私たちはこの際この時、私たちがもつ總量の血をあげて、大結集すべきだと思ひます。どんな微量少額といへども、私だち種族血とあれば、欣然悦んで懷を大にし、結集し回収すべきだと思ひます。私だち種族が一億あれば、一億の血を一滴のむだなく驅り集めなければなりません。

それも、個々に分離し解體した孤的なものでは、間にあはないのです。それでは各個殲滅的に瞬く間にやられてしまひますから、絶対に集團的一體的でなければなりません。そして鐵石の精強さを示すのです。

それも現實の私ただけでは弱いのです。悠久三千年の歴史を築きあげて來た、祖先の

神々の恩寵と加護、それをも併せ持たなければなりません。いはゆる私だちがもつ名譽ある歴史をかけて、集約し結集しなければならぬのです。

これでこそ、どんな大試煉にも堪へうる異常な力、神力にも等しい偉大な力が發揮され高揚し得るのです。これをこそ一億一心、高度國防國家體制の金剛力ともいへるのだと思ひます。私だち一億種族が、この完全な結集體制になり得てこそ、初めて上御一人の御前に、眞の「赤子」として參調の光榮を擔ひうるのだと信じます。

これはさうむづかしいことではないと思ひます。すでに已に私だちの血液において、血縁化の思想と諦觀が内含され、今日はその「家」において、或は「軍隊」において、昔は一部の「部落」において、十分その成功を見てるのですから、その思想諦觀の擴延を國家全たいの上に及ぼせばよいのです。

家禽・家畜までも、或は無生の石ころまでも、「わが子」・「わが身」として諦觀し思想しうる私たち種族でありながら、何が故に、血を同じうする種族相互の上に、近親的な情愛と感情を持ち得ず、「わが子」・「わが身」としての諦觀を阻むのであるか、私としてそ

れがどうも判らないのです。

實をいへば、明治以降の日本の政治に、「人情」といふものがなかつたのです。物質的・知性的な冷たい政治ばかりだつたのです。これは西歐政治の體制をそのまま輸入し實施した茶毒だつたと思ひます。

これに反し、日本の政治は昔から温かい道義の政治だつたのです。冷たい理窟だけで政治するのではなくて、正しい義と温かい情の「親心」で政治するのです。これは日本の「家」・「部落」が近親的に置はしかつた状況を見ましても、また上古の御親政の時代の色々な制度や状況を見ましても、判然とさう肯かれるのです。この「親心」の政治が「家」・「國家」を結合させて來たのだと信ぜられます。いはゆる眞の「親」があつて眞の「子」があつたわけです。眞の人間の政治だつたのです。

ところが、群雄割據の封建時代になりましたから、その道義政治の麗はしいものが藩々に割據し、藩はまたその道義政治を、高々が「家」か「部落」程度に止め、部落と部落が一體化的に結合することを絶対に許しませんでした。民力の集團的を怖れたのです。こ

これは徳川幕府も同じで、藩と藩の一體化的な結合は、絶対に許しませんでした。却てその離間策さへ採つた位です。——（これは後で詳しく述べます）——

ために、私だち種族の血縁的な思想諦観も、「家」的・「部落」的には相とう濃密に發展擴張されましたけれど、それ以上には一步も出なかつたのでないかと思はれます。

だが、今日ではもうさうした割據時代ではありません。わけて現下の緊迫せる國家安危の時局下において、單なる個人的・「家」的・「部落」的なちつぽけな思想・感情・諦観では、物の用に立たうとも思へないのです。

よろしく、ちつぽけな舊殻をかなぐり棄て、**「家」と「家」が、「部落」と「部落」が、「村」と「村」が、「町」と「町」が、「郡」と「郡」が、「府縣」と「府縣」が、大家族制に結集し一體化し、また職能的にも「會社」と「會社」が、「工場」と「工場」が「銀行」と「銀行」が、「學校」と「學校」が、大家族的に結集し一體化し、總學的に一丸となり一體となり、一億全たいが一人残らず最も近親のわれ等**同胞**として、結集し團結しなければならぬのでないかと思ひます。**

私だちの思想・感情・諦観を全振幅的に大發展大擴張されて、一億全たいを内に包むばかりか、更に發展擴張されて、大東亞共榮圈に及び、宇宙光被の至上境にまで達せしめなければならぬと思ひます。

そこに初めて、建國の大精神たる「八紘爲宇」の實現も、名實ともに可能なのだと思ひます。それにはまづわが「國家」を、絶対不敗の精強な至上體制にまで、築きあげなければならぬと思ひます。

第二章 「家」の道

46

一、神ながらの道

日本古來の高い道義的な傳統として、私だちの行ふ道は、必ず「神ながらの道」でなければなりません。 「神ながらの道」とは、「神のまゝの道」——「神が行ひたまへば必ずこの道を行ひたまふ」といふ道でした。その道を行ふために、私だちの祖先は心血を注いでまゐりました。

だから、一行を行はうとする毎に、「いま自分が行はうとする道は、果して神の行ひたまふそのまゝの道であるか、どうか」と、厳しい反省と思慮の深いものを加へることを忘れませんでした。そして行つては更に反省し、行つては更に深い思慮を遂げて、一步でも

神に近づかうと努力しました。それは涙の出るほどに敬虔なものでした。

佛教徒が「難行苦行」と申しまして、佛の道に悟り入るために、あらゆる修業と妄念を禁ずる生活を遂げましたが、私だち祖先の生活はその「行」の生活にも劣らない生活でした。生活そのまゝが「神ながらの道」への「行」だつたのです。

で、「神ながらの道」を常住坐臥、立派に完全に行ふには、まづ「自分の身も心も、神のやうに淨らに研ぎ澄まされてゐなければならぬ」と、私だちの祖先が思慮したことは當然でせう。その方法として行はれたのが、「禊ぎ」であり、「祓ひ」なのです。

●「禊ぎ」とは、清き流れの水で、心身を洗ひ淨めることであり、「祓ひ」とは、神前にお祈りして、心身の穢れを拂ひのけることなのです。「心身が神であれば、行ひがまた神である」の深い考へからでした。殊に身體の清く淨きは尙更のことですが、それよりも精神の清く研ぎ澄むことに、最大の努力を捧げました。

さうした日常の心掛け營みによつて、「一步でも神に近づかう」と精進努力したわけですが、それも唯漠然と精進努力したのでは、進境の度が低いと考へまして、そこに一の目

47

標をさだめ、殊に自分にとつて、神の道に最も遠く短所と考へられる點に、大きな重い力點をおいて、精進努力し倦むことを知りませんでした。その目標が普通にいふ「自誠」であり、「座右の銘」でした。

「自誠」・「座右の銘」は、その人その人によつて違ひ、色々あるわけですが、たとへば、怒りつばい性質の人は、その怒りを直さうとして、「怒るな」の自誠をもち、朝寝坊の人は、「朝小暗きに起きよ」とかいふ「座右の銘」を持ちました。

或は「天地の恩を忘るな」とか「君に忠、親に孝なるべし」とか、その他色々宏遠な自誠を持つ人もありましたが、それ等の「自誠」や「座右の銘」に共通して、一般的な大切なものとしては、「すなほ」・「まこと」・「おこなふ」の三つに歸するものが多いやうでした。

「すなほ」とは、漢字で「素直」と書くのですが、これは、これより以上の直さがない直さのことで、まあ直さの極限のものなのです。純真無垢、しかも柔軟性に富み、何物の中へでも樂々と苦勞なしに入り込める自由無礙の姿なのです。また何物も拒まず寛容に受

け入れる宏量な姿でもあります。或は「大自然の姿だ」といつてもいゝでせう。更に「神の姿」だといつていゝかも知れませんが、柔軟ではあるが、骨もあり實もある頼母しい姿なのです。

これは「神ながらの道」への精進として、最も根本的なものでないかと思ひます。「すなほ」で純真でなくては、神への道も程遠いと思ひます。「正直な頭には神やどる」といふ言葉がありますが、これもこの「すなほ」な純な姿から出た言葉だと思ひます。

物事といふものは、一度は「すなほ」にその懐に入つて見ないと、眞實のこと——「まこと」の神のみ心は判らないものです。何事にも何物にも「すなほ」に柔順に入つて見て、それから眞實の神の姿に立ちかへることが、一ばん大切なことだと思ひます。

最初から、いはゆる食はず嫌で、生半解に物の上面^{うはつら}だけで解釋し、いちけた氣持ちで他の懐に抱かれても見ないでは、眞實の神の姿は判らず、神の道へも達しないことになりま

す。何事も一度は理窟なしに、——（神ながらの道に「言擧げせず」といふ言葉があります。これは「理窟いはない」といふ意味です）——「すなほ」に隨順して見ることが、

「神ながらの道」の基礎だと思ひます。

また、何物も一度は理窟なしに「すなほ」に食つて見ることも、大へん大切なことだと思ひます。「あれが厭だ」・「これが厭だ」と食はず嫌ひすることは、狭量で栄養不良に陥り易いと思ひます。それでは廣やかな「神の道」には至り得ぬと思ひます」

だから、私だちはいぢけないで、一も「すなほ」二も「すなほ」で、「すなほ」くで
行きたいものだと思ひます。すると、いつとはなしに神の參詣路に顔出すのだと信じま
す。

よくお母さまのうちで、事ごと怒りつぽく、子どもを叱つてばかりゐなされる方がありま
すが、それは大變な心違ひだと思ひます。子どもを叱つては、決して「すなほ」に育ちま
せん。きつといぢけます。もとく子どもは神に近く「すなほ」なものなのですが、それ
を叱つてばかり育てるとは、「神の道」に却て遠のくことになります。悪い癖です。

叱らないで育てる方がいくらかもあるのですから、出来るだけ怒るときは慎しみ、叱らな
い方が上々の策だと思ひます。叱れば、叱らないよりも結果がきつと悪いのですから、叱

らない方がいゝと思ひます。悪い結果だけ助かります。

だから、絶対に叱らないで、子どもが「すなほ」に聞けるやうに、持つて行き方を工夫
なさることがいゝと思ひます。ちよつとの言葉のあやでそれが出来るのですから、さう苦
勞はない筈です。でも、よく口癖のやうに怒つてなされる方があります。醜いものです。お
氣をつけないと、子どもの將來にとつて、大きな禍根を遺すことになつてしまふ。絶対に一時
的な感情の満足で、子どもを叱つてはなりません。

「君子、バケツ持つてお出！」

と、癪高に命令的に言ひますと、如何に子どもでも「すなほ」に出れないものなので
す。それを優しく同情的に、

「君ちゃん、お慥巧だから、バケツ持つて来てくれない？」

といへば、子どもが聞くまいと思つても、聞かねばならぬことになるのです。

次に、「まこと」は、眞言・眞事まことで、神の御靈ごたまは「まこと」に盡きるのでないかと思ひ
ます。だから、私だちの祖先は、一も「まこと」二も「まこと」で、「まこと」を最も高

い徳の至れるものとしてゐました。

言は靈なのですが、その言が立派に表現されて、完成の域に達すれば「言成り」と申しまして誠「まこと」となります。その言成らせることが「まこと」の道となります。その道に仕へることがまた「仕事」となります。——（これは後で詳しく述べます）——で、言成らなければ虚言・虚事となります。

物事にはきつと、言（事）成つたものと言（事）成らないものゝ二つがあります。一は「まこと」であり、一は「うそごと」なのです。だから、常に物事を成り成らせることが大切なのです。それが「まこと」の道となります。

「親切」はいゝことですが、その親切にも成りなつた「まこと」の親切と、成りならぬ「うそ」の親切とあるわけです。その見分けをはつきりつけて、常に「うそ」の親切をすて、成りなつた「まこと」の親切につく。これが大切なことで、「まこと」の道なのです。

だが、よく紛れます。それをよく判断し見わけるのが、さきも言つたやうに、「すなほ」

な純な、私心ない大自然——神の心なのです。しかし、自分の心が「すなほ」でないために、時折だまされます。

だが、自分だけは絶対に一も「まこと」二も「まこと」で行きたいと思ひます。一生涯「まこと」でおし通したいものです。常に成りなつた神ながらの「まこと」の道で父母につかへ、兄弟姉妹につきあひ、他のあらゆる人々にも接したいものだと思ひます。

「俯仰天地に愧ぢず」といふ言葉もありますが、これは「まこと」だけの生活でないと言へない言葉だと思ひます。「公明正大」といふ言葉も同じ事です。これも眞の「まこと」の生活から出た言葉だと思ひます。かうした言葉が、眞に心から言へる生活に入りたいたいのだと思ひます。またさうした生活を一生涯遂げたいものです。

この成りなつた神ながらの「まこと」を、今の言葉で宗教的にいへば聖であり、科學的にいへば眞であり、道徳的にいへば善であり、藝術的にいへば美なのです。あらゆる學問の最も高き神の位置におかれたものです。だから、神ながらの「まこと」の道ともいふのです。

だが、「まこと」の道は、その時・その場合において、唯一つしかない厳しいものなのですが、その時・その場合におけるあたりの状況が、その時・その場合によつてすつかり違ひますので、「まこと」の道もまた違つて来るのです。昨日「まこと」の道だつたものが、今日「まこと」の道でなかつたり、今日「まこと」の道でなかつたものが、明日「まこと」の道だつたりします。

その判断と見わけがまた、よほどむづかしいことになります。よほど自分の心境が「すなほ」に純に澄んで、神ながらの「すなほ」さになつてゐませんと紛れます。とんだものをつかまへて、「まこと」の道だと思ひ込みます。

たとへば、小刀が「まこと」の道であるのに、鋸を出したり、鋸が「まこと」の道であるのに、小刀を出したりします。それは兩方とも「まこと」の道に外れてゐます。やはり小刀が「まこと」の道であれば小刀を出し、鋸が「まこと」の道であれば鋸を出さなければなりません。あべこべでは絶対にいけないのです。

次に、自分だけが「まこと」の道だと考へてゐましても、相手の人が「まこと」の道だ

と考へない場合があります。これも困るのです。やはり「まこと」の道は、兩方の人が「まこと」の道だと思はないと困るのです。眞の「まこと」の道ではないのです。これを「自他包全」といひまして、「まこと」の道は「自他包全」でなければならぬのです。一方が生きても一方が死んでは、「まこと」の道ではないのです。そこは飽までも兩方が生きた「自他包全」でありませんと、「まこと」の道でなくなります。

だが、この「自他包全」といふことは、なか／＼にむづかしいことで、すべての學問も修養も、この「自他包全」の「まこと」の道を見つげるためにあるやうなものです。宗教も科學も道徳も藝術も皆そのためにあるのです。また私たちが懊惱・苦惱するのも皆そのためです。それほど「自他包全」の「まこと」の道がむづかしいのです。私たちは、「まこと」／＼と簡単にいひますけれど、さう簡単には行かないのです。

それは、その時・その場合における周囲の動きに、見落しがあつたり、手ぬかりがあつたりするからです。そこは「すなほ」に純に神の心となつて落つき、内も外も上も下も見落しなく、見・聞き・味ははなければなりません。そこにちつとのこだはりがあつたり、私

心があつたり、不純があつたりしますと、眞の「まこと」の道が判らなくなつてしまふのです。

だから、出来るだけ落つき、純な「すなほ」な氣持になつて、周囲まわりの動きを巨細にわたつて見・聞き・味ひ、そこに最も適應した「自他包全」の「まこと」の道を見つけないければなりません。これを今日の言葉で「創造」といつてもいいでせう。或は發見・發明なのです。「まこと」の道はその時・その場所において、常に神のささやきをきき、神の啓示をうけなければならぬのです。それが「まこと」の道の發見・發明です。

だが、それはなか／＼にむつかしいことで、多くは「まこと」の神の道だと思つて、行つて見て後に、眞の「まこと」の道がわかるのです。そして後悔さびします。「後悔前に立たず」といひますが、眞にその通りです。だといつて、行はなければ、永久に眞の「まこと」の道はわかりません。それは絶対に行はなければなりません。

だから、私たちは、「おこなふ」ことによつて、眞の「まこと」の道を知り、更に「おこなふ」ことによつて、更に眞の「まこと」の道を知りして、一步一步「まこと」の神の

道に近づかなければならぬのです。それが私たちの人生であり、生活であり、仕事なのです。

「仕事」とは「まこと」の道に仕へることで「まこと」の道を身體からだで姿にし、形にし、物にして行くことです。いはゆる「生産」なのです。

多くの人は、職場における仕事だけを、仕事だと思つてるかも知れませんが、むろん、それは仕事の大きな根元的なものです。そればかりではありません。親につかへる「まこと」の道も仕事であれば、隣人への「まこと」の道も仕事であれば、國家への「まこと」の道も仕事なのです。その何れを粗略にしてもならないのです。

「職場における仕事だけを忠實にやればいゝ」といふ狭い考では、その職場における仕事も眞に立派に行かないものなのです。職場における仕事を、眞に「まこと」の血を通はせ、眞に「まこと」の肉をつけ、眞に福々しく大きく事成らせるには、親に「まこと」でなければならず、兄弟にも「まこと」でなければならず、隣人にも國家へも「まこと」でなければならぬのです。その何れに手落があつたり、「まこと」の道に事缺けることがあ

れば、それだけ職場における仕事も悪くなるのです。

だから、職場における仕事を、「まこと」の道に成り成らせて、真に「神の生産」となさうとするためには、一切の「まこと」の道を誠實に眞面目に眞剣に行はねばならぬのです。それ等の饒かな「まこと」の榮養的補給があつてこそ、職場の仕事も眞に完全に「神の生産」となるのです。

それを職場の仕事は忠實に眞面目にやるが、他の仕事はすべて粗略にぞんざいにやつて、あそこにもこゝにも「まこと」の道に事缺いてるのでは、その職場における仕事も危いものだと思います。單なる物の生産におちてるでせう。今までは多くそれだつたのです。残念なことです。

だから、今後の私たちは、家族への「まこと」の道も、隣人への「まこと」の道も、公共團體への「まこと」の道も、國家への「まこと」の道も、それがすべて「まこと」の道である以上、當然私たちに課せられた眞の仕事として、職場における仕事と同じやうに、何等のわけ隔てなく、最も忠實に眞面目に眞剣に行はねばならぬのです。それで初めて、

仕事は「神の生産」となるばかりでなく、私自身も神の姿となるのです。そこに私たち人間としての全容が、花のごとく麗はしく現はれます。

今までの人たちは、職場では職場の面を出し、家では家の面を出し、友だちの前では友だちの面を出しといった形で、ちつともその全容を現はさないので。私だちの全容は神のごとく麗はしく、花のやうなものなのです。その全容を現はさないものだから、すべての人が寒く冷たいのです。何千人といふ多數の人が職場に集つてゐても、徒にその冷度を増すばかりで、ちつとも温度が上つて來ないのです。

學校でも、子どもは學校の面だけを出してゐますから、ちつとも徹底した教育にはならないのです。それは丁度、教育を拒否してると同じ形なのですから、學校でも家庭でも、よほど注意しなければなりません。私だちは何れのところに行くも、常に人間としての全容が出せるやうに修養しなければなりません。それが眞の「まこと」の道でもあるのです。

次に、自分がどんなに「自他包全」の「まこと」の道だと考へても、相手の方に理解さ

れない場合があります。この場合には絶対に怒つてはなりません。自分の不徳・不明の致すところとして、きはめて謙虚な氣持になつて、相手の立場や言ひ分など出来るだけ同情的に聞き、またこちらの立場や言ひ分を、諄々と根氣よく理解させることに手をつくさなければなりません。

だが、それでも相手が理解せず駄目ならば仕方ありません。「泣いて馬糞を斬る」の嚴然たる態度に出なければなりません。相手が理解しないから、また相手の地位や權勢が高いからの理由で、自分までも「まこと」の道に反してはなりません。そこは生命を賭してまでも、「まこと」の道に殉すべきだと思ひます。これは日本の傳統的な道義として、最も輝ける尊いものなのです。

前にも言つたやうに、私たちの生命は、「まこと」の道に仕へる仕事に授かつたものなのですから、「まこと」の道が通らない以上、「まこと」の道と共に死ぬことは當然だと思ひます。ゆめ／＼生命を惜しんではなりません。

次に、「おこなふ」ことですが、これを今日の言葉でいへば、實踐であり躬行です。「まこと」の道を身體で姿にし、形にし、物にして行くことです。いはゆる、これが眞の「仕事」なのです。

これは大變に大切なことで、私たちの生きてゐる證として、これより外にないのです。だから、生きてゐることは「おこなふ」ことであり、「おこなふ」ことは生きてゐることなのです。「おこなふ」ことがなければ、死です。

どんなに身體が健康でも、どんなに精神が優秀で、「まこと」の道が立派に判つてゐても、「おこなふ」ことがなければ、寶の持腐れで何にもならないのです。反古も同然で、これだけは屑屋も買はないだらうと思ひます。だから、私だちは絶対に行はなければなりません。生きる證はこれり外にないのです。

一も「おこなふ」二も「おこなふ」全生涯これで押して行くべきだと思ひます。今までには、「口舌の空花」といひまして、實行の伴はない無責任な空論を弄して、満足してゐたやうですけど、それは飽までも空花空論で、貴い人生を徒消してゐるものなのです。何等

の效驗——生産を残すものではありません。

で、人生をして眞に充實した、いはゆる成りなつた「まこと」の「神の生産」たらしめようためには、絶対に行はなければなりません。絶対に仕事しなければなりません。私たちの祖先は、徹頭徹尾、言受けせず實踐躬行でおしきつて、今日の大を築きあげて來たのです。「口舌の空花」を弄するやうになつたのは、ほんの近頃なのです。固く誓めたいと思ひます。

更に、前にも申しましたが、私たちがどんなに「自他包全」な「まこと」の道だと考へましても、凡愚の域を脱し得ない悲しさで、實際に行つて見なければ、眞の「まこと」の道が判らないのですから、この意味においても「おこなふ」の價値が十分にあるのです。

だから、まことに苦勞なことだが、「おこなふ」ことによつて眞の「まこと」を知り、更に「おこなふ」ことによつて、更に眞の「まこと」を知りして、いはゆるなりなつて完成の域に到達しなければならぬのです。それが「修業」なのです。

だから、人生は、最後の一呼吸までも「修業」だと思はなければなりません。「修業々々」の連続で、人生が終るものと思つて間違ひありません。それでこそ最も偉大な人生の生産——金字塔が築かれるのです。

生半解な浮調子の營み方では、絶対にさうした輝かしい人生の生産——金字塔は築かれません。全く血みどろな悲壯そのもので築かれるのです。いはゞ血をもつて築きあげるのです。

だから、「おこなふ」ことに卑怯だつたり、怠慢だつたりしては、人生——生産の一礎石も築かれないものと思はねばなりません。それではもう、私たちが人間の生活ではなく、動物的か植物的な生活に墮落してゐるものと言はなければなりません。昔の人がいつた「醉生夢死」といふ言葉はそれなのです。

だから、人間生活の尊さにおいて、一步でも「神」に近づかうとするならば、「神」に通ずる「まこと」の道を「おこなふ」ことによつて、致々營々、鏤刻精勵して、一瞬の寧時もあつてはならないのです。造次にも顛沛にも、神ながらの「まこと」の道を「おこな

ふ」ことより外に、何物もないのです。あればそれだけ「すなほ」さに缺けるといふものです。「神」に捧げてる身ではありません。「神」に捧げてる身は、最も純にして「すなほ」な筈です。

二、父と母の道

父と母は、子どもが出来ない前は、夫であり妻であるのですが、しかしそれは、子どもが絶対に出来るものとしての約束において、すでに父であり母であるのだと思ひます。

もし不幸にして子どもが出来ないとなれば「家」が成立ちません。「家」が成立たなければ一家断絶といふことになり、祖先の靈心そこに滅し、不孝これより大なるはないといふことになります。

また國家にとつても、その増強繁榮は一に「家」の増強繁榮に待たなければならないの

ですから、「家」の断絶と滅亡は國家の悲運衰退の兆と言はなければなりません。したがつて不忠の大きいものともなります。

昔の夫婦離婚の條件に、「子なければ出づ」といふのがありますが、その意味はこゝから來たものと思ひます。だから、子どもは絶対に出家さなければなりません。財寶のうち金・銀・物資など色々ありますが、わけて子は「子寶」といつて、寶甲の寶とたゞへられ、子孫繁榮を壽いだ祖先のいみじい心根も、十分に肯かれると思ひます。

だから、夫と妻は結婚すると同時に、父であり母であるの絶対的な約束の上に立たなければなりません。若し不幸にして子どもが出来ない場合、養子を貰つても父となり母とならなければなりません。こゝに「父と母の道」は、直ぐそのまゝ「夫と妻の道」であるまこと肯かれると思ひます。

では、「父と母の道」の根本的なものは何であるか。それは前にも申述べたやうに、父と母が統一的に一體化して、眞の「親」となることです。父を a とし母を b とすれば眞の「親」は、 $a \times b = ab$ となることです。

往々、父と母は加へ算的に加へられて、親が出来るやうに思ひますけれど、眞の「親」は加へ算では出来ないのです。加へ算では $20+10=30$ となつて、永久に統一的一體化の形成作用とはならないのです。

統一的一體化の形成作用とは、父が母倍され、母が父倍された掛け算の積においてのみ初めて見られるのです。これが眞の「親」の姿なのです。なほ言へば、父が己れを没して母になりきり、母が己れを没して父になりきるの境涯——それなのです。

海軍の報道部課長である平出大佐が、いつかのお話のうちに、次のやうなことを申されました。

「米英の方は加へ算で戦争してるが、日本は掛け算で戦争してゐる。だから、日本の陸海軍は強いのだ」と。

それはどういふ意味かといひますと、「米英には軍艦が何隻、航母艦が何隻、潜水艦が何隻、飛行機が何機、海軍の兵員が何百何十萬ゐる。日本にはこれ／＼しかゐない。その差はこれ／＼だ。だから、米英は必ず勝つ」と考へるのです。これは正しく加へ算の戦

争です。

だが、日本のは掛け算で行くのです。といふのは、兵器と兵員が渾然と一體化して、兵器が兵員か、兵員が兵器か判らない、火の玉の一丸となつてぶつかつて行くのです。日本の飛行機は單なる飛行機ではない、人間化した飛行機なのです。いや人間化したといふよりも人間の神化した飛行機なのです。だから、同じ一臺でも米英の一臺とは譯がちがひます。米英の二十臺・三十臺に匹敵するかも知れません。いやそれ以上とも考へられます。だから、日本の陸海軍は強いのです。

これを數學式にあらはせば、なほはつきりすると思ひます。

飛行機十架四 = 飛行機十架四

飛行機×兵員 = ?

いはゆる掛け算では、それがどれほどの大きな積となるのか、答が出せないので。飛行機の性能力と兵員の體力・精神力の相乗積なのですから、答が出せないのが當然だと思ひます。

飛行機に兵員を掛けるといふことは、飛行機が兵員の手足のやうに完全になり切るやう整備されると同時に、兵員はまた完全に飛行機になり切ることなのです。いはゆる兩者が渾然と融けあひ一體化して、一の生き物となるのです。そこに神業にも等しい絶大な威力が發揮されるわけです。

父と母がこの境涯に入りえて、初めて眞の「親」となるのです。だが、これには猛精進が必要なのです。日本の陸海軍が今日の境涯にまで築き上げるには、そこに積年の猛訓練があつたことは、皆さまもご存じのことと思ひます。それにも等しい猛精進・猛努力が、父にも母にも必要であることを申添へておきたいと思ひます。生やさしく眞の「親」の形體は出來あがるものではありません。

だが、次のやうなことは言へると思ひます。「眞の航空兵員となるためには、眞に飛行機を理解しなければならぬ」と。それと同じやうに、眞の「親」となるためには、父は母を、母は父を眞に理解しなければなりません。

父と母の理解とは、父が母の、母が父の、一般的な性質と、その父、その母だけにある

個人的な癖を知ることです。一般的な性質とは、父ならば父として誰でも持つてゐる性質であり、母ならば母として誰でも持つてゐる性質であります。個人的な癖とは、その父・その母だけに限つてある特有なものを指していふのです。癖といへば悪い意味に取れるかも知れませんが、よい意味の癖もあることを知つて頂きたいと思ひます。性質といつても同じなのですが、癖といへばなほはつきりするからです。

で、一般的な性質は、誰でもほとんどの同じですから、割合に簡単に理解されますが、その一般的な同じ性質のものを、生活的にはその人その人の癖をとほして現はしますから、理解には厄介なのです。そこに幾多の問題がひそむわけです。

たとへば、草木は一般的な性質として殆んど總てが花を開くものですが、しかし草木にもそれ／＼癖があつて、春開くものと夏開くものがあり、また秋開くものと冬開くものがあります。色・形にしても、それ／＼癖があつて千種萬態です。それ等の癖を知らないで、草木を作つたところで何にもなりません。

しかし癖と知つてしまへば、至極簡単に事が運びます。たとへば、「暴れ馬が」といふ

て誰も相手にしない馬を、喜んで安く買って行つて、この上ない柔順な馬に仕立てる人があります。それはさうした暴れ馬の癖を、よく呑みこみ得るからです。

また「猛獣使ひ」といふものがゐます。猛獣といつて一たび怒れば、大變な危害を私たちに與へるものなのですが、それを安々と子どものやうに使ひこなします。それはその猛獣の癖をよく呑み込んでゐるからです。

だから、その癖を呑み込み、その癖をつかみさへすれば、割合に簡單なのです。癖といふものは、一の軌道レールのやうなもので物、事がその上に乗りさへすれば、造作もなく轉がり果しなく運轉します。

だが、その癖の上に乗らないと、挺子でも動かない頑固な抵抗を示すものです。それは難儀なものです。癖には本能的・動物的なところがあつて、「おい、それ」と簡単に理窟で行かないところがあります。それほど私だちは自分の癖を死守しようとしみます。だから、どうしても理解が必要なのです。

私だち人間の癖は、鳥や獸よりも格段の差で繊細に動きまゐります。色や形もあるはるので

すけれど、屢々それを見失ひます。それほど繊細なのです。たとへば、「あの人の聲は黄ろい」とか、「あの人の感じは紫だ」とか、「あの人はいつも尖とがしく角ばつてる」とか、「あの人は四角い」とか、「あの人は圓滿で角がとれてる」とか、「あの人は物柔かだ」とか、「あの人は辛い」とか、色々言ひますけれど、ちよつと素目には感じられないことが多いものですから、大抵は見失ひがちです。だから、簡單には行きません。

だが、さきほども言つたやうに、癖は一の軌道のやうなもので、私だち人間の癖も繊細は繊細ですけれど、その癖以外には一步も出ないものなのです。タンポポの花は來年も春がくれば、野邊でタンポポの癖通りに、黄ろく菊花の形で咲きます。狸や狐なども癖通りに同じ道を通りますので、そこを狩人にねらはれます。魚類なども癖通りに大抵同じ道を通りますので、漁士はそこをねらつて多くの魚類を捕ります。

だから、その癖さへ判れば、さうむつかしいことはないのです。絶対に信頼していいのです。信頼はまた一切のものを物柔かにほぐします。ほぐせばまた癖の正體が一層はつきりして來ます。

信頼は自分を裸かで投げ出してる形ですから、よほどの理解がなければ出来ないことな
のですが、しかし理解の前に信頼することも一方法だと思ひます。いはゆる「虎穴に入ら
ずんば虎兒を得ず」で、まづ自分を裸かで投げ出して全幅の信頼を示すといふことが、兩
者の理解と一體化を速める近道だと思ひます。

だが、そこに相當の危険とか不安を伴ふことは止むを得ません。それをいつまでも恐れ
て虎穴遠く離れてゐたのでは、永久に虎兒を捕へ得ないかも知れません。さうした卑怯な
人が、世に數多くあることは事實です。だから、よし虎兒を捕へ得ても、相當の長時日を
要することになります。

だが、夫婦が結婚するまでには、相當深くつき込んだ調査もやり研究もしての上でせう
から、さういつまでも猜疑的な視察の眼をつかはないで、むしろ運命的な逃がれがたいつ
ながり縁があつたものとして、全幅的に信頼しあつた方が、男らしく見上げた方法でない
かと思ひます。

この點、昔は厳しかつたやうに思ひます。殊に女の方に厳しく高いものがあつたやうで

す。一ど嫁入つた以上、死んでもかへらない。すでに生みの「親」・「家」はないものと堅
く覺悟して、如何なる辛酸勞苦にも堪へ忍ぶ——そこは女の「消極への積極」とも申しま
せうか、まことに異常な意氣と氣構だつたと思ひます。

嫁入は非常にお目出たいのですけれど、晴衣の下には死出の白装束で出掛けたものなの
です。全く自己を滅した崇高しいものでした。そこに何ともいへぬ花嫁姿の後に圓光のや
うな尊いものが仰がれます。それに付き添ふ生母の眼には、悲喜交々、萬感胸にせまつた
涙があつたらうと察せられます。

それをいゝ餌ごとにして、随分わがまゝ勝手に振舞つた夫もあつたやうですけれど、そ
れは夫の暗愚蒙昧を示すだけで、そのために、絶対に妻の尊嚴を害するものでなかつたと
思ひます。この點、日本の歴史の上では妻—母の方が大に光つてると思ひます。今後もか
うした妻—母の光輝ある幾多の記録が残されるだらうと信じます。また信じさせて頂きた
いと思ひます。幾多の軍神の母なども、皆さうして母がたではなかつたかと敬崇おかない
ものです。

かうしたことを考へますと、日本の「家」は父で持つて来たといふよりも、多くは妻一母の力で持つて来たのでないかと思ひます。妻一母の捨身的な奉仕と忍従の美德、それが日本の「家」を、如何なる荒くれた暴風雨的な苦難のうちにも、よく巍然として持ち耐へて来たのでないかと思ひます。この點、日本の父なる方も、一段と聰明の度を加ふべきだと思ひます。

兎も角、父と母は相互に自己を滅して、全幅の信頼と理解を相互の上におき、温かく抱かれるべきだと思ひます。さすれば、必然のうちに親愛の度もまして、慈しみあひ融けあひ、眞の統一的一體化の親の麗姿が、顯現されるや疑ひないと思ひます。

次に、夫の仕事への理解ですが、それも細々とした内容的な理解までには大變でせうから、まあ大體の大まかな輪廓だけで許して貰ふとしても、理解しておくことは絶対に必要です。夫の仕事への理解がなくては、妻としての一資格を失ふと思ひます。しかも仕事への理解は夫への理解ともなりますから、一舉兩得だと思ひます。

で、仕事といふものは、一般に女味の少ないもので、緊張と焦燥と苛立しさの連続みたい

なものです。いつも干葉をかむやうな索然したもののなのです。よほど修養の進んだ高い人でないと、仕事のうちにうま味とか、うる味とか、あま味とか、楽し味とかいつた味ひを味ひ得ないものなのです。それ等の味はみな女味につらなつたものです。

だから、夫は日暮れて仕事が終われば、全く枯木も同然でカラ／＼と乾き切つて、むしろ女味に飢ゑかつて家に歸つて来るものなのです。そして家で一気に充さうとします。妻は十分にそれを心得てゐなければなりません。

夕飯の色とり／＼のご馳走準備も必要缺くべからざるものですが、と同時に、精神的な女味のご馳走をふんだんに準備しておくことも、しごく肝要だと思ひます。それが家にかへつてもそれ等の準備に事缺いてゐますと、あたら物的方面のご馳走も臺なしになることがあります。夫は堪へ切れなく、しまひには火を噴くことになるのです。それは絶対に夫の故だと思つてはなりません。仕事がさうさせるのです。だから、妻一母の方もそれも仕事と思ひ、仕事に事缺いては苦情あるのが當然だと思はなければなりません。

むろんお母さまも、一家の拭き掃除から、洗濯ご飯の準備、子どもの養育など大變でせ

うけれど、夫のかへる一時の間における女味の準備だけは、如何に多忙でも缺かさず用意された方がいよと思ひます。それは女のたしなみといふものだと思ひます。たしなみは女の命ですから、どんなに年とつても失ひたくないものです。

夫の肩持つわけでありませんが、夫も年とつては弱りますけれど、その心根は坊やのやうなもので、わがまゝ身勝手に駄々つ子なのです。そこは夫の妻であるといふよりも、夫の母である方が萬事うまく行くと思ひます。

こゝで「家」の装ひ・整備が、高尚にして優雅な女味の瑞々しいものであることが、必要とされて來ます。これは子どもの教育としても大切なことですが、夫への精神的な馳走としても絶対に必要です。「家」の中が取亂れて沙漠のやうに索然としてゐることは、決して夫の疲れを癒やすものではありません。貧しながらも妻―母のたしなみとして、出来るだけ整理・整頓、女味の溢れたものとなさなければなりません。

夫―父が一日の疲れに尖々しい氣持でかへつて來たのに、さもそれに反抗するかのやうに、玄關の入口から取亂れてゐる靴の入場もないといふ状況では、事が瑣細なやうで決し

て瑣細でないと思ひます。自分が多忙で出来なければ、子どもにでも命じて綺麗に掃除整頓させ、野花の一本でも挿花して、恰も夫のかへりを歓迎するかのやうな空気を、放散させておくことが肝要だと思ひます。

寒ければ火鉢に火を、暑ければ團扇をといつた優しい心盡しが、妻―母にあれば、一家は靄然としてうまく行くと思ひます。

だが、夫―父にしても、自分本位にばかり考へないで、妻―母の心勞辛酸のほども、十二分に考へて見なければならぬと思ひます。わけて妻―母も外に仕事をもつてゐる場合は、絶対に妻―母ばかりを、責めるわけには行かないと思ひます。

妻―母として外に仕事を持つとなれば、女でありながら性にはない男として、それだけの仕事を終えて來ることになりますから、性にあふ家庭的な仕事より、どれほど多く疲れるか知れないのです。それでゐて「家」の仕事は放つておくわけには行かず、いはゞ二重以上の負擔を背おふことになります。それを夫―父は十二分に理解してやらなければならぬと思ひます。理解は最上にして最大の休養となるものなのです。理解こそ人生のオア

シスではないかと思ひます。ありたきものは理解です。

何も家内だけが臺所に立つものと限らなくてもいゝと思ひます。仕事の轉換はまた格別な味のあるものですから、その意味で多大の休養となります。夫が臺所に立つてゐる姿は、決して醜いものでなく、むしろ微笑ましく親懐の情さへ増します。生れて間もない赤ん坊をデーツと危げに抱いて、餵湯に入れてる父親をよく見受けますが、決して悪い感じのものでないと思ひます。父親の品こそ増せ、決して落すものでないと思ひます。——（なほ「第三章「家」における母の地位と責務、三、女味」のところ、詳しく申し述べたいと思ひます）——

兎も角、父と母は、双方の理解と同情の歩みよりによつて、眞の統一的一體的な「親」の生活境涯を、完全に示現したいものだと思ひます。これ教育勅語に明治天皇が「夫婦相和シ」と仰せられた境涯なのです。出来るだけ聖旨を奉戴して、聖旨に副ひ奉るやう精進努力したいものだと思ひます。

三、兄弟姉妹の道

兄弟姉妹の道としてその根柢的なものは、友愛相助のまごころにおいて、相融和し一體化して、眞の「子」となるべきことだと思ひます。兄弟姉妹が眞の「子」とならないので、他の諸徳が如何に麗はしからうと、それは蟬の脱殻のやうなもので、魂のない形骸に等しいと思ひます。

だから、兄弟は弟妹を慈しみ、弟妹はまた兄弟を敬つて、常に統一的一體化の眞の「子」となるべきだと思ひます。そして他の諸徳はすべてその根源から發すべきだと思ひます。

むかし平重盛が忠孝兩全だと賞めたゝへられました、私の考へからいへば、まだく不十分だと思ひます。それは宗盛以下の兄弟とは不和だつたからです。

重盛が眞に「親」に孝たらうとするならば、まづ父の非を諫言する前に、宗盛以下の兄

弟とは友愛相助の至情において、眞の「子」とならねばならぬと思ひます。むろんあの火急の場合さうした餘裕もなかつたらうとは思ひますけれど、もつとそれ以前に、眞の「子」となるべき手段をつくしてゐなければならぬと思ひます。

むろん宗盛以下の兄弟には、異腹の兄弟もゐて同腹の兄弟のやうには行かなかつたでせうけれど、それにしても、盡すべきは當然盡すべきだと思ひます。あの場合たゞひとり父の前に馳せ参じたことは、その忠誠から發した至情は大に嘉すべきにしても、「子」としては淋しい孤兒的な姿だと思ひます。

父に對して獻替の諫言を致すならば、やはり眞の「子」として爲すべきだと思ひます。眞の「子」は兄弟姉妹うち揃つて父のおん前に馳せ参じ、その非を諫言すべきは諫言すべきだと思ひます。それをこそ眞の「孝」といふものです。

それは事が急火に迫つて出来るものでありません。日常日ごろから互に融けあひ、慈しみあひ、渾然と一體化してゐなければなりません。そして事火急にのぞんでも騒がず亂れず、提携相助して、眞の「子」としての道にいそしんでゐなければなりません。

宗盛以下の兄弟にしても、如何に父―清盛の命令だとはいへ、長兄―重盛の存在を袖にして、父の傘下に馳せ参じたことは、物々しく孝行なやうだが、未だ孝行の至れるものはありません。小乗的な功利主義の孝行に墜してと思ひます。況して父の所行たるや、上御一人に對する非行においてをやです。不孝不忠の最大なものだと思ひます。平家滅亡の兆は、敢て源氏―頼朝の蹶起を待つまでもありません。すでにその時に池の堤が切れると思ひます。

だから、重盛の存命中は、父―清盛の専恣横暴を幾分か抑止し、平門一族の崩壊を防ぎとめてゐましたけれど、重盛死して一たまりもなかつたわけです。

父子ともに道によらずして、権力によつて事を成就させようと考へたことは、すでに滅亡の悪鬼が身に迫つてると思ひます。それを知らないほど平氏一族は暗愚だつたのです。平家のために情ない氣がします。

これ父―清盛の蒙昧暗愚によることはむろんですが、宗盛以下の子としても過半の責任はあると思ひます。いはゆる親があつて「親」がなく、子があつて「子」がない悲惨な状

態が、その時の平氏だったのです。これで一家一族が隆昌安泰だらう道理はありません。

平氏の滅亡崩壊は源氏―頼朝の蹶起によつたものと見えるかも知れませんが、絶対にさうではありません。むしろ一族内部の驕慢と不統一的禍根が、外―源氏の蹶起を招んだに過ぎないのです。禍根はいつも外部にあるものではなく、内部にあるものなのです。

親が眞に「親」たり、子が眞に「子」たらば、一切のさうした禍根が芽生ふ餘地ありません。一家一族が常に隆昌安泰の一途をたどるばかりです。

だが、親が眞に「親」たらず、子が眞に「子」たらずるにおいては、如何に外貌は權勢をはり威壓を示さうとも、内部的に禍根は崩壊衰亡の悲運を餘儀なくします。堤防は必ず内から切れはじめます。

この點において、毛利元就がわが子を眞にわが「子」たらしめようとして、矢の教訓をなしたことは、推賞するに足ると思ひます。眞の「親」として正にさうあるべきです。眞の「子」がなくて、眞の「家」があらう筈はありません。眞の「家」は眞の「親」と眞の「子」によつて成立つのです。

だから、兄弟姉妹は絶對的に、友愛相助の至情において、相融和し一體化して、眞の「子」とならねばなりません。それは兄弟姉妹としての根本的な道義であり、高き倫理なのです。

「身體髮膚これを父母にうけ、敢て毀傷せざるは孝の始めなり」といふ古い言葉がありますが、この毀傷の考を單に自分だけに止めず、兄弟姉妹の全たいの上に及ぼすべきだと思ひます。それには「子」は自分だけではない、兄弟姉妹全たいが「子」であるといふ同緣的な思想と諦觀が必要とされて來ます。これは親が子に十分言ひきかせて、絶えずさうした思想と諦觀の徹底につとむべきだと思ひます。

むろん、兄弟姉妹といつたところで、この四子が同時に出来るわけではなく、順々に年次を追つて出来る筈ですから、二子・三子・四子……と基礎づけて行けばいゝわけです。これが家庭教育の主要課題なのです。

だが、眞の「子」への絶對的な垂範―手本となるべきものは、眞の「親」なのです。から、平清盛のやうな專恣横暴な親では、絶對に眞の「子」が出来ないことを、十二分に知

つてゐなければなりません。

眞の「子」は、眞の「親」の磁場内においてのみ育ち、生ひ立ちます。眞の「親」がゐないでは絶対に眞の「子」が出来ないのです。だが、眞の「親」さへゐれば、その親の形體からは慈光が發し、電波が放射され、昔の古い言葉の「徳」の至れるものは無爲にして「化す」で、必然のうちに眞の「子」が出来て來ます。生ひ立ちます。

親として眞に子を「子」たらしめようためには、その先決問題として、まづ自分が眞の「親」とならねばならぬわけです。それが前後しては成功覺束ないものと考へなければなりません。だが、多くは前後するのです。この點、深く思省していただきたいと思ひます。

それから、親として子どもが幾人ゐようと蔭ひ、ななく公平に、愛し慈しみ育てゝやつて頂きたいと思ひます。そこにちつとでも不公平があり偏頗があると、子どもは敏感ですから直ぐにひがみます。ひがみは「子」の一體化に多大の障害となります。

同じお腹を痛めた子どもなのですから、さうした不公平や偏頗がない筈ですけど、ま

ゝ世間では見ます。これは瑣末なやうで決して瑣末ではありません。堤を崩す蟻の孔にも比すべきものです。

次に、「この子は自分の子だ」といふ淺い考から、子どもを馬鹿にして吞んでかゝる母親を見ることがあります。これは大に慎しまなければなりません。「五分の蟲にも一寸の魂」といつて、子どもは子どもなりに矜りと持前があるのです。それを傷つけられ痛められますと、親に對して、ども反抗の底意と意地を持つて來ます。これがまた眞の「子」への一體化を妨げます。

だから、子どもは出来るだけ尊重し、それも甘やかすのではありません。よく子どもの癖と持前を見て、手落なく公平に躰けて行くのです。

それは主としてお母さまの仕事なのです。から、お母さまの勞苦も並大抵でないことをこ同情申し上げますと同時に、子を眞に「子」たらしめれば、それだけ母は酬いられるものであることを附記しておきます。

四、親と子の道

眞の「親」は、父と母の統一的一體化によつて出来あがるのですが、生活的・具體的には再び父と母にかへつて現はれます。だが、そのときの父は單なる父ではなく、親(ab)の基礎の上に立つた父aであり、母は單なる母でなく、親(ab)の基礎の上に立つた母であるわけです。その形はa(ab)・b(ab)であります。

なほいへば、眞の「親」としての父は、母を含んだ父であり、母は父を包んだ母でなければなりません。よく世間では、「父は義であり、母は情である」といひますが、それならば眞の「親」としての父は、母の情を含んだ父であり、母は父の義を包んだ母でなければなりません。

それが單なる父、單なる母におちますと、冷酷すぎるほど義に厳しい父となり、しつ

こいほども情に熱い溺愛的な母となります。眞の「親」としての義は正しく、情は温かくなければなりません。厳しく熱いのでは、眞の「親」としての情義ではありません。

かうした親は、親は親でも眞の「親」ではなく、「子」に對する資格が遠く失はれてるものなのです。こんな無資格な状態で「子」に接しては、「子」を損傷するばかりで何の利得にもならないのです。

これは「子」に對する道義ではありません。「子」に對する絶對的な道義は、眞の「親」としての父であり、母でなければなりません。情を含んだ正しい義であり、義を包んだ温かい情でなければなりません。

「可愛い子に旅をさせ」といふのがそれなのです。この諺のうちに、正しい父の義と温かい母の情が泌み込んであります。眞の「親」の姿なのです。

「可愛い子に苦勞な旅はさせたくない。いつまでも自分の膝もとにおきたい」と願ふのは母の至情として尤もなことなのですが、それも或限度があるものでして、その限度を越えては單なる母の熱い溺愛に墮ちます。そんな親の下では、子どもは小乗的・目前的に小

成するかも知れませんが、大乗的・永遠的に大成しないのです。

子どもを大乗的・永遠的に大成せしめようには、どうしても父の正しい義と母の温かい情が必要とされます。母もこの正しい父の義に目ざめてこそ、初めて「可愛い子に旅させる」温愛にもなれるのです。

また「泣いて馬稷を斬る」といふ言葉もありますが、これも眞の「親」の姿なのです。馬稷はむかし支那における功勞ある將軍だったので、諸葛孔明の軍令にそむいたことで、孔明は自分の股肱の臣ともいふべき馬稷を斬るに忍びなかつたのですけれど、軍令の大義的尊嚴を、一片の私事的な情にかられて寛恕すべきでないと思つて、涙をふるつて馬稷を斬つたのです。そして極めて鄭重に葬りました。

「情いかに濃やかなるも大義を滅せず」といふ巍然たる態度と、「泣いて」といふ母性的な温愛の至情が、その處置に泌み出るので、今日もなほ、この言葉が人口に膾炙されているのです。これも眞の「親」の姿だと思ひます。

だが、これは眞の「親」としての父の姿なのです。前の「可愛い子に旅をさせ」も同じ

父の姿です。母の姿はいつも父の裏の姿として現はれます。

但論に「魁たもととられしその手にすがり、あなた危い鬚の針」といふのがあります。これは淑貞高い良妻の姿なのですが、直即ち眞の「親」としての母の姿でもあると思ひます。

怒れる夫は、妻の魁をとつて引ずり廻さうとします。如何に良人の仕打とはいへ、餘りにも亂暴な仕打です。妻も猛り立つて反抗すべきです。普通の妻ならば決して黙つてはあません。きつと大喧嘩となつたに違ひありません。夫もまた心のうちでは十分にそれを期待し、妻が反抗すれば更に怒り狂はう氣構へなのです。

だが、淑徳たかく、眞の「親」としての母に目ざめた妻の聰明は、さうした暴風雨的な危難のさなかにも、しかもその危難の主が夫であるのにも係らず、それをも忘れて、なほ夫の身の危険を氣づかふ。——これが眞の母——妻の姿なのです。眞の母の姿はまことに痛々しく、涙のそふ姿なのです。

かうした崇高な神にも等しい妻——母の姿に接しては、如何に憤怒苛烈な情焰に荒れくるつた夫といへども、妻の温愛ふかい膝の上にひれ伏し、泣いて前非を悔いなければならな

いのです。そして一切の誤解も釋然し、以前にも増して濃密な一體化へと誘はれ行くわけです。まことに偉大な母の姿と言はなければなりません。

この姿はまた宗教の姿でもあるのです。キリスト教の聖書に次のやうな有名な言葉があります。「人なんぢの右の頬をうたば、亦ほかの頬をも轉じてこれに向けよ」これが眞の宗教の姿です。母はまた直即にその姿なのです。

これを「無抵抗の抵抗」とも申しませうか。母はたくまぬ本然の、無抵抗の極限において、抵抗の父の義を示すのです。これが眞の「親」の姿なのです。

父はまた「抵抗の無抵抗」の姿において、無抵抗の母の情を示し、眞の「親」の姿となります。「可愛い子に旅をさせ」「泣いて馬糞を斬る」はそれで、抵抗の無抵抗の姿なのです。

單なる「抵抗の抵抗」單なる「無抵抗の無抵抗」では、そこに「親」の姿はなく、一は粗剛に、一は柔軟に墮ちます。それでは子どもが育たないのです。子どもは眞の「親」の姿においてのみ育ちます。

子どもを叱るにも、温かい正しい「親」の情義において叱り、子どもを賞めるにも、温かい正しい「親」の情義において賞める。——それでこそ子どもが眞に育つのです。粗剛なる父の義や柔軟な母の情だけでは、一は焼け死に、一は溺れ死にして、子どもは何れにも育たないのです。

親の子に對する道義として、親が眞の「親」となるより外にないと思ひます。この根本への精進と努力が、やがて子を眞に子たらしめる所以だと思ひます。また子どもへの最高の贈物だと思ひます。ゆめ／＼父は母の温かい情を、母は父の正しい義を忘れてはなりません。

だが、往々、父は義に走りすぎて粗剛におち易く、母は情に溺れすぎて柔軟になり易いものなのです。これは絶えず警戒しなければなりません。わけて父または母の留守中は、その危険が多いのです。

お互目の前にあれば、互に牽制しあつて、その正しい温かい姿勢を崩さないものですけれど、得てして一方が留守となれば、わがまゝ勝手となり、父は母を忘れ、母は父を忘れ

ます。そして單個の我におちます。悪いことです。それが自他をそこなふ災害を生みます。

父も常に母を忘れず温かく包んでれば、職場にゐてもすべてが物柔かくうる、味がそつて、世間的な觸りもいゝのですけれど、「家」を一步出れば、すぐ母を忘れ妻を忘れず。それが社會を、職場を母のぬない、干葉をかむやうな索然たるものにするのです。

母も常に父を忘れず正しく包んでた方が、どれほど家を正しくし、清々した朗かなものにするか知れないのですけれど、父が職場にでも行つて留守になりますと、初めて自分の世界が咲き出たやうに誇しげとなり、家は亂れ柔軟におち、足の入場もない汚れたものになります。

そして子どもには、全く自制心のない暴君のやうにヒステリックに振舞ひ、當り散らし、子どもをメソク泣かせて、それが子どもの生長にどれほど悪影響あるかも考へず、たゞ目前の瞬間的な感情を晴らして満足するといつた淺はかな狀景を呈します。これで子どもが眞にうまく育つたら、全く捨ひ物と言はなければなりません。

子どもを育てるのに、「叱る」といふことは絶対にいけないのです。叱らないで育てることが上々の策なのです。叱りには必ず怒りが伴ひます。それが悪いのです。

怒りを眞に怒りうる人は、よほど修養の出た高い人です。怒りは行ひのうちで一番むつかしいと言つてもいゝのです。だから、怒ればきつと後味の悪い、「あ、怒らなかつたらよかつた」といつた後悔が、自分の良心を蟲喰ひます。それだけ子どもにも暗い影を投げてゐます。その影がまたいつまでも尾をひきます。

ですから、出来るだけ——出来るだけといふよりも絶対にと申したいのですが、まあ出来るだけ怒らないで、諄々と「子どもを義す」といふことがいゝのです。「義す」とはまことの道にのぼせることで、それには叱言や怒りの感情を全ぜん抜きにして、たゞひたすら子どもの蟲の納得に訴へることがいゝのです。蟲の納得のみ私たちの生活一行為を支配します。その納得が行かない以上、再び同じまちがひを繰り返さずかへします。

だから、一時的の昂奮や感情の叱り方では、ますく子どもに反抗の底意を持たすかも知れませんが、眞の改悛には至り得ないのです。それは親の權勢や威壓で一時的な膏藥張

りは出来るかも知れませんが、永久的な改悛とはならないのです。

しかし、お母さま方も感情の持主ですから、怒らないこともご不満でせうから、さうした場合は、黙つて後向きになり、壁か戸障子にむかつて、したゝか感情をお充しになる方がいゝと思ひます。だが、絶対に、その鋭鋒を子どもに向けてはなりません。

またお母さま方のおたしなみとして、どなたもきつと帯の間に鏡をお持ちの筈です。その鏡をお化粧のときばかりお用ひにならないで、怒つたときにもお用ひになつて、女人の怒顔といふものが如何に醜いものであるか、しよく泌々とと覺になる方が、きつと大きな教訓になると思ひます。

多くのお母さま方は、外面的なお化粧にばかり鏡をお用ひになりまけれど、内面的な精神のお化粧にお用ひにならないことは、大きな間違ひだと思ひます。長多いことですが、天照大神がさういふ淺はかなお志で、鏡を皇孫瓊々杵尊にお授けになつたのでないと思ひます。「この鏡を見ること朕を見ることがくせよ」と仰せられた筈です。それはよほど深い宏遠な精神的なお考へからだと拜察します。だから、お母さま方もこのご教慮を體し

奉つて、もつと精神的に鏡をお用ひになるやうお勧めします。

かうした意味において、この頃どこのご家庭でも、鏡を部屋々々にお掛けになつてゐる風習を嬉しいと思ひますが、しかし單に一の装飾品としてあるだけで、かうした場合などに有効に使用されてゐないことを遺憾に思ひます。

私は、お母さまがガミ／＼ヒス的にお怒りになつてゐなされるよりも、黙つてお袖で涙をふいてゐなされる方が、どれほど心床しく、眞のお母さま的か知れないと思ひます。それがまた、どれほど純眞な子ども心を感動させ、子ども自らの意志によつて、改悛の動機をつかむよすがともなると思ひます。

これがお母さまの、子どもへの贈物として最善のものでないかと思ひます。

兄弟弟妹が友愛相助のまごゝろにおいて、相融和し一體化して眞の「子」となれば、親に對する道義の過半以上は達せられたことになると思ひますが、さてそれがなか／＼に至難なことで、ちよつと容易に實現すべくもないのです。

といふのは、兄弟姉妹には長幼の思想的・感情的な遠い異差があり、個々の生活的な習癖もあつて、なか／＼に融和せず一體化しがたいものなのです。それは父と母が融和し一體化しがたいことよりも、もつと至難かも知れません。

だといつて、そのまゝに捨て、おくわけに行かず、その間の取りなしは主としてお母さまの責任とされてるのですが、お母さまのお氣づかひ勞苦もまた大變なことだと察します。まして兄弟姉妹の數が多いとなれば、その勞苦や氣づかひも倍加されるわけで、泌々のご同情申し上げる次第ですが、しかしこれは「家」として、「國家」としても大へん大切なことで、正に天下の偉業と申していいのですから、一つご奮闘ご精勵願ひたいと思ひます。

で、最初は長兄か長姉が出来るわけですが、その育て方の最初から、すでに兄弟姉妹が數多くあるものとして、お育てになる方がいゝと思ひます。素直に純眞に何物にでもよく同化し折合ふやうに、育てなされるがいゝと思ひます。すね者の意地ばりにお育てになつては、後にきつと禍根があると思ひます。

しかし、子どもは育てばかりにも由りませんから、それは子どもの癖をよくつかみ、よく抑へて、母の懐にだけは完全に入つたものとしておかなければなりません。そこが兄弟妹を融合させ一體化ならしめる根本だと思ひます。母の懐にも入つてゐない子どもが、融合し一體化する道理はありません。

で、母は子どもの癖をつかみ抑へることが達者でなければなりません。それは乳をのませお尻の汚れを始末する幼少なころから、よく視察して、それを確とつかんでおかなければなりません。そして鵜飼ひの漁士が鵜をあつかふやうに、手さばきよくなつてゐなければなりません。

むろん、幼少なころの兄弟喧嘩はつき物なのですが、それも子ども心の純眞なものは、さう意に介しなくてもいゝと思ひますけれど、企みの悪質なものは、よく義を立て、黒白をはつきりさせておかなければなりません。それがする／＼に放任されますと、後に禍根を残すことになります。

で、その裁きは、義に走らず情に溺れない、眞の「親」としてゝなければなりません。

よし兄に悪い點があつて詫びさせるにしても、母の取りなしで飽きでも兄の體面は保たせてやり、弟が悪いにしても、やはり兄の思ひやりを促し、弟の顔が立つやうに取りなしてやらねばなりません、如何なる場合にも、子どもを全面的に潰すことは慎まなければなりません。そして仲なほりと氣晴しのために、臨時的なお三時でも出してやる方がいゝのぢやないかと思ひます。

かやうに、兄弟姉妹がふえるにつれて、建築技師が石垣でも築くやうに、堅實に築きあげて行くことだと思ひます。そして子どもが物わかり出来るころともなれば、「親子の道」「兄弟の道」なども説きかければ、内質的・精神的に一體化をはかることも出来るかと思ひます。

たゞこゝで注意しておきたいことは、他の兄弟姉妹を袖にし、ない物にした行爲—行動を厳しく絶対に抑制することです。自分ひとりよい子にならうとする抜けがけ的な行爲—行動を許すと、今までの苦勞辛酸も臺なしになります。それはよほど氣をつけなければなりません。

如何なる場合にも、それが兄弟全たいの總意であるかどうか。それをはずきり、確めて應接しなければなりません。もしそれが兄弟全たいの總意でない以上、事の善悪は別問題として、須く兄弟全たいの總意であることを欲し求めなければなりません。

そして、兄弟姉妹の總意をもち、その全體的な幸福を願ふものゝみが、「親」に對面できるものであることを十分に言ひきかせ、自分ひとりよい子にならうとする不心得を諭さなければなりません。それが兄弟姉妹の一體化を取り崩す茶毒なのですから、重々警めなければなりません。

だから、親と或子の間に秘し事や、或子をかばひ、或子をかばはないといった不公平な仕打があつては、絶対にいゝ結果を持ち來たさないことを銘記してゐなければなりません。それは親自から「子」の一體化を取亂すことになりますから、絶対に避けなければなりません。

子どもの品評なども、子どもの將來を思つて、父と母の間で祕かに行ふことはいゝが、子どもの前で軽々しく行ふことは、慎まなければなりません。「馬鹿だの」「あほだの」

といふ言葉なども、口舌の快感かも知れませんが、子どものためには、氣をひがます害だけで、何の薬にもなりません。「馬鹿だ」といはれたからとて、その言葉が利いてすぐ伶俐になれるものぢやないのです。それには別な方法を探らなければなりません。

子どもの馬鹿は親の馬鹿、子どものあはれは親のあはれだといふ自省自誠が、親だちになんことには、子どもが眞に育ちません。親のこの自省自誠だけが、子どもを伶俐にし聰明にするのです。この度ましい謙虚な親の自省自誠がなくて、何が子どもを發奮激勵させることが出来ませう。よくよく考へて頂かなければなりません。

親が眞に「親」たり、子が眞に「子」たらうとする道の目的は、やがて「親」と「子」が完全な融合と一體化において、最も理想的な申分のない強靱な、「家」を形づくらうとするにあるのですから、この目的を忘れては、百千の努力も無駄になります。

むしろ、親が眞に「親」たり、子が眞に「子」たらば、必然のうちに吸引的な磁力性が發せられ、たくまぬ自然なもので統一化され一體化されるのですけれど、更に完全な

「家」たらうとする努力を持つことも必要と思ひます。その努力的な道義として、親に「愛」、子に「孝」があるわけです。

「愛」はもと／＼統一への形なのです。統一への相手方にのみ活く私だちの意慾と感情なのです。だからそれは男女や親子の間にも動くものではなくて、生活全たいの上に動くものなのです。

生活は、皆さまもて存じのやうに、小なる統一から大なる統一へ、大なる統一から更に大なる統一へと、連續進展するものなのですから、愛もまた、小なる愛から大なる愛へ、大なる愛から更に大なる愛へと、生長發展するものと見なければなりません。

男が男として生長しきれば、それで生活の行詰りを感じ、それから先は、今まで通つて來た單調な男としての一本道を歩くにすぎない、そこに何等の目新しい發展と生長を見出し得ないところから、多大の淋しさ、物足りなさを感じて來ます。最後には死感にさへおそはれるかも知れませんが、私だちが常に上位の統一へ、上位の統一へと進み得ないことは死なのですから。

女としても同様です。女としての十分な生長を見れば、それで生活の行詰りを感じ、これから先は、今まで通つて来た單調な女としての一本道に行くにすぎない。そこに何等の目新しい生長と發展を見出し得ないところから、多大の物足りなさ、淋しさを感じて來ます。

この淋しさ・物足りなさの焦燥と憂鬱から脱し、更に上位の目ざましい統一—生活發展に入るべく、恰好の相手方を探し求めて來ます。この意慾と感情が異性者への「愛」なのです。

更に両者が結婚して、その間に子どもが出來ます。これがまた、上位の生活—統一への發展なのです。男女が結婚して永年にわたり子どもがいないことは、そのまま生活の行詰りであり、それから先は單調な今までの一本道に行くにすぎません。味氣ない淋しいものにおちます。

だが、その間に子どもがあることは、その行詰りを打解し、生活を清新し、未來への頼母しさ嬉しさを展開して來ます。いはゆる未來永劫への生存的基礎が得られたことになり

ますから。これ以上の生活的展開がないわけです。だから、親が子への愛は、最も熾烈に濃密に動きます。恐らく、その度と質において、この愛に及ぶものがないと思ひます。親が子のために、その生命を捨てた例は、數限りないほどですから、親のこの愛は生命的なものだと見られます。

で、親が子への道義として、「愛」を説くことは、野ぼに近い感さへします。だから、私はこゝで、親が子への愛の不足を説かうとは思ひません。むしろ愛の過剩的弊害を説き、不純的茶毒を申しあげたいと思ひます。その節制と自肅こそ、親が子どもへ道義だと思ふからです。

で、得てしてあり、餘るものは浪費がちになります。厚着と過食は多くそれから來る通弊なのです。子どもは薄着で害はれるよりも、多く厚着で害はれ、小食で傷められるよりも、多く過食で傷められます。食はないで死んだ人はなく、多く食ひすぎて死にます。

「愛」もさうなんです。小愛で害はれるよりも多く過愛で傷められます。わけてお母さま方は、愛の埋藏は無盡であり權化ともいふほどですから、よほど警戒し自誠していたら

かないと、あたらず子どもを傷害し死地におとし入れることになります。

それは前にも申し述べましたやうに、父の正しい義を身に體し、父を包んだ麗はしい愛にして頂きたいと思ひます。ゆめ父を忘れて單なる母だけの柔軟な愛にしては、子どもは熱すぎ息ぎれすることになります。或は溺死し、或は焼死するかも知れません。これは大に警戒して頂きたいと思ひます。

子どもの衣食において、厚着・過食は大に心配して頂いてると思ひますが、愛の厚着・過食も、それ以上に配慮して頂かなければなりません。節制と儉約は、一家の經濟的支持の上から何の上にも必要なのですが、わけて「愛」の上にはそれが絶対に必要だと思ひます。でない、子どもが立派に育たないのです。

父の義にすぎた冷酷と母のけじめない愛の過剰とは、何れ劣らない罪科はあると思ひますが、わけて母の過剰的な溺愛に自省して頂いた方が、子どもに接する度の多いだけ、効果的でないかと思ひます。

次に、愛の不純ですが、これも氣をつけて頂きたいと思ひます。不純は多く我の雜夾物

から來ます。それは父として母を忘れ、母として父を忘れたとき、多く單個的な我におちるので、そのときが一ぱん危険なのです。

同じお腹を痛めた子でありながら、或子を可愛がりすぎ、或子を虐めすぎたりします。或は夫への不平を、或は原因も判らない感情を、子どもにあてたりします。さうした場合、鍋釜にあてることはいゝとしても、絶対に子どもにあてゝはならないのです。その節制と自誠が、親として子への最高の道義なのです。

父としても職場の憂うつと不平を家に持ちかへり、家で放散するのを通癖とする人があります。それも妻だけならばなほ忍ぶべしとするも、一家の空氣を臺なしにして、子どもにまでその餘波・飛沫を食はすことは、絶対に避けなければならぬと思ひます。

内にこたはらなければ外に必ず響きありで、何事もスムースには行かないものです。だから、内をこたはらなく清純にすることが第一だと思ひます。それにはいつも眼界を數段と高きにおき、現實に立脚することはいゝことですが、現實の低位におち、現實に巻き込まれることがいけないのです。現實に巻き込まれ盲目的に、まつ暗になるから、清純な行動

を失つてしまふのです。

常に清純に心の太陽が輝いてゐなければなりません。心の太陽さへ明純に輝いてゐれば、一切の不平や憂うつやわだかまりは、たちどころに解消して天氣清朗となります。切に修養を願ひたいと思ひます。それが親として子への最善の道義でないかと思ひます。

この「親」にして、初めて「子」が親への道義である「孝」が導き出せるのだと思ひますが、でも、古い言葉に、「父父たらずといへども、子子たらざるべからず」といふ言葉もありますから、子は子として、親の如何にかゝはらず、親はあくまでも親で、親の尊さに變りがない筈ですから、「孝」の道義は絶対につくさなければならぬと思ひます。

だが、實をいへば、子が親への道義は、過去—祖先への生活發展として基礎づけられ、祖先への一體的な統一として、初めて内質的・精神的に成立つて來るのではないかと思ひます。だから、親が子への道義である「愛」よりもよほど困難なことでないか。なぜかと申しますと、親が子への「愛」は、現實的・未來的ですから、感覺的にも十分訴へること

が出来、身體的にも容易に行動化されると思ひます。

だが、祖先への生活展開—統一は、過去の・精神的ですから、さう沁々と感覺的・身體的にもこたへず、わけて子どもは—さう現實的・未來的で、今日と明日の生活に忙しんですから、昨日への生活などはよほど縁遠いものでないかと思ひます。

だから「親死して初めて孝を知る」といつた後悔的な言葉もあるのではないかと思ひます。この言葉の裏には、親の死ぬまで孝をなさなかつた不孝を悔い歎いてる意味が含まれてると思ひます。なほ「子を持つて初めて親を知る」といふ言葉もあります。この言葉にも、自分は結婚して子を持つまで、親の勞苦—有難さを知らなかつたといふ後悔が歎かれてると思ひます。それほど「孝」といふ道は、年數を経ないと目ざめて來ないのでないかと思ひます。

だといつて、私は「孝」の粗略を主張しようとするものではありません。たゞ眞に目ざめた内質的・精神的な「孝」といふものは、よほど子どもが成人して大きくなり、過去の・祖先的・精神的な生活が萌し發展しうる時期にならないと、芽生え目ざめて來ないの

ではないかと言いたいです。

いはゞ現實的・未來的・子孫的な生活發展が行詰まり、その行詰りさを打解し展開するには、過去の・祖先的・精神的なものゝ刺戟と鞭撻によるより外ないと、自覚し目ざめるやうな年輩にならないと、「孝」の眞のものが發生して來ないのでないかと思ひます。

むろん、親死して初めて孝を知り、子を持つて初めて親を知るは、大へん晩稻かきの方だと思ひますけれど、しかし私だちに眞實な言葉として迫つて來るものがあります。だとすると、孝の道を子どもに躑けて行く上において、相當の考慮を巡らさねばならぬと思ひます。

だが、「孝」の道は、その自覺と目ざめが晩稻は晩稻のやうですけれど、祖先への一體的統一感から來るものなのですから、血液的・種族的なもので、他の諸徳に比して、よほど根強いものである思ひます。それは親が子への愛と同様に、強靱なものだと思ひます。だから、今少しくその根柢について、述べさせて頂きたいと思ひます。――

私だちの生活が單に現實的・未來的ですと、すぐに生活が行詰つて來ます。そこに單調

な一本道的な昨日の生活を、繰返さねばならぬ物足りなさ、淋しさが湧いて來ます。憂うつな暗い死影さへさし初めます。その死影が私だちを生きられない焦燥と苦惱に追ひ込むのです。

この苦惱と焦燥が私だちを血液的に自覺させ、過去を眺め祖先を招ぶことになります。今日のこの行詰りさ淋しさを打解し救済して、清朗な力強い未來の生活に展開してくれるものは、過去の・祖先的・精神的なものによるより外ないと、雄々しくも氣づいて來るのです。こゝに多大に私だちの歴史が物を言つて來ます。この歴史によつて慰められ、激勵され、方向の指針を與へられて勇氣百倍、勇ましく再出發するのです。

だから、過去の・祖先的・種族的な歴史を持たないものは、淋しい脆いものでないかと思ひます。過去―歴史のない現實と未來だけでは、如如に元氣が盛んで潑刺としてゐようとも、それは中核のない果物のやうなもので、危いものだと思ひます。

だが、私だち日本種族のやうに、輝ける過去・祖先・歴史がありますと、それによつて、ますます現實が中核的な精神―支柱を確立し、内容が豊富となり、力強い研ぎがかけ

られ、未來への發展が期して待つべき有望さ頼母しさとなるのではないかと思ひます。

大東亞戦争の赫々たる戦績も、むしろ忠勇義烈な陸海軍將士の敢闘に待つべきものが多いと思ひますけれど、その敢闘精神の中核に私たちの祖先的・種族的な光輝ある歴史が、根強く存在してゐるが故でないか。いはゆる今や陸海軍將士の全員が、完全にわが歴史の權化となつてゐるのではないかと思ひます。

それで精強無比、何物も粉碎せずんば止まないのだと思ひます。歴史あるものは強い。佛現一體、それが祖先への完全歸一だと思ひます。宗教の絶對的な境地に參入してゐるものだと思ひます。

昔、大化の新政も歴史にかへり、建武の中興もまた歴史にかへり、明治維新もまた歴史にかへつて、その改革がなされました。私たちは歴史にかへつてこそ、初めて現實の行詰りを打解し、憂鬱を放散し得るのです。新しき創造もまた歴史にかへつてのみ、初めて可能だと思ひます。過去—祖先の歴史をかへり見ないで、未來への前進は絶對に不可能です。歴史の力によつてのみ創造され前進されるのです。

今日、大東亞戦争の困難的な障礙を突破する上において、如何に私たちの祖先的精神—歴史が高揚され闡明されつゝあるか。十分にご承知のことと思ひます。

事が重大であればあるほど、どうしても祖先のみ力を借らなければ、一步も前進し得ないので。祖先のみ力だけが私たちに事件解決の方策と信念を與へてくれるのです。

思ふに、私たちが祖先は、悠久三千年の光輝ある歴史を築きあげ、力の出づる泉の水たるや滾々として盡きません。米英が如何に強敵たらうとも、この光輝ある三千年の歴史を、絶對に崩すことが出来ないと思ひます。

米英が日本の實力を過小評價したが故に、緒戦以來の惨敗を喫したのだといふ。恐らく過小評價とは、悠久三千年の光輝ある歴史的威力を計算のうちに入れてなかつたのだらうと思ひます。

兵員が單なる一個の兵員、飛行機が單なる一個の飛行機と考へてゐる以上、如何に精密な計算をなさうとも、唯それだけの質量にすぎないと思ひます。だから、過小評價とは彼等の後悔的な文句で、當初は過小評價でも何でも無い、正真正味の適正評價だつたに違ひあ

りません。だが、それは歴史の威力を知らないものゝ暗愚者の計算なのです。

高々が百年か二百年の歴史、しかも海賊的記録だけの歴史しかない米英にとつては、歴史の現實の人間に及ぼす絶對的な威力など、理解されよう筈がありません。だから、米英に巨億の富があらうとも、また軍備が日本に數倍加されようとも、單なる現實の人間力だけでは、高が知れたものだと思ひます。それは脆いものに違ひありません。簡単に手をあげるにきまつてゐます。たゞ、海綿の集積的な厖大を虚勢してただけだと思ひます。日本の佛現一體的な信念と威力の前には、一たまりもないものと確信していいと思ひます。

「孝」とは、かうした過去—祖先への生活發展たる基盤の上に立つて、初めて眞實な内容を持つて來るものでないかと思ひます。これは幼少な子どもには、容易に理解にしくいと思ひますから、徐々にその歩武をすゝめることが肝要だと思ひます。

でも、父と母は、十分に理解と會得が出來なざる筈であるから、まづ自ら率先してその示範を垂れられるやう願ひたいと思ひます。子どもにはこれが一ばん効果的だと思ひます。

父と母は相とう現實の生活にも經驗があり、「子を持つて親を知る」の自省にも可能なわけであり、また過去—祖先への生活發展にも切實な要求がありと思ひますから、一つ實踐垂範して頂きたいと思ひます。私だちの祖先は萬事に言擧げせず、たゞ實踐し垂範することによつてのみ、一家を率ゐて來たのであります。この點、吳々も申し上げておきたいと思ひます。

で、今まで「孝は百行の基」といつて、まづ孝の完成から期して來たやうですけど、今も言つたやうに、孝の自覺と目醒めはよほど遅いのですから、その逆の行き方から導いて行つた方が、より効果的で行ひ易いのではないかと思ひます。

逆の行き方とは、「百行の完成は孝の最も到れるものなり」の格言です。この格言から行きますと、親の言ひつけを完全に守ることも孝、朝寝坊しないで完全に早く起きることも孝、學校で成績が完全に優等なることも孝、お友だちの危急を見て完全に助けてあげるのも孝といふことになりすから、指導や躾けの目標が完全に決まりますから、やり易いと思ひます。また子どもとしても理解し易く實踐も容易に行動化されると思ひます。

五、舅姑と嫁婿の道

嫁・婿は婚家に入つては、兄弟何れかの妻となり、或は姉妹何れかの夫となり、その名において、舅姑に對しては子となり、小舅姑に對しては兄弟姉妹となるわけです。更に統一的に一體化されて「家」を形づくる一因子となるのが、わが家族制度の建前なのです。

だから、こゝで、どんな考慮の下に嫁婿を選ぶべきかの問題も、「家」の建前から自明的にはつきりして來ると思ひます。まづ夫となり妻となる當人の、最も麗はしい人生の好伴侶たるべきは無論のことですが、と同時に、舅姑への最も好ましい子であらねばならず、小舅姑への最も申分ない兄弟姉妹でなければならぬといふことになります。

だから、當人一個の思想感情だけで嫁婿を選ぶわけには行かず、親の思慮、兄弟姉妹の思惑も十分考慮のうちに入れて、選定しなければならぬことになります。でないと、一家

に絶えずいざこざ紛糾がかもされ、遂には破鏡を免れないことになります。自分が犠牲となるか、一家が犠牲となるか、何れかの浮目を見ます。むろん、嫁婿にも傷がつきます。

で、戀愛が嫁・婿を選ぶ最善の方法だとしますならば、それは當人だけの祕事として行はるべきでなく、一家の公事として、一家全たいの總意において行はれなければなりません。こゝに來て、今までの當人本位の戀愛至上主義も悪ければ、當人の意志を無視した舅姑至上主義の方法も悪いといふことになります。

だから、わけて嫁・婿と姑・小姑の間に、家庭的いざこざ紛糾が多いと豫想されるならば、當人と母と姉妹の三人で戀愛が出来るやうな相手を選ぶのが、最も手落ない理想的方法でないかと思ひます。

今までの戀愛が母にも語られず、兄弟姉妹にも話されずして、さも當人一個の祕事であるかのやうに行はれたことは、家庭的にも社會的にも、幾多の災害と禍根を残してと思ひます。結婚は斷じて當人一人の祕事であるべきでなく、一家・社會・國家の公事でなければならぬと思ひます。だから、當人において戀愛的な好伴侶があるならば、公然と親に

も語り、兄弟姉妹にも打あけて、その成功的助力を仰ぐべきだと思ひます。

それが、敬愛する親への眞實な孝であり、親愛する兄弟姉妹の友であり、またやがて結婚を豫想される相手方の美はしき道義でもあると思ひます。ゆめ／＼自分一個だけの祕事として深入りし、さて結婚となつて自分も泣き相手をも泣かすやうな罪惡を、絶対に犯すべきでないと思ひます。

また親や兄弟姉妹にしても、「子」への愛と兄弟への友情において、出来るだけ當人の意志を尊重し、出来るだけの手だてしてその達成に助力すべきだと思ひます。自分の嫁婿を貰ふのではなく、當人の生涯的運命かけての同伴者を貰ふのですから、むげに當人の感情意志を踏みこむべきでなく、まづ當人の意志・感情を第一とし、相倚り相助けて角立たず圓やかに取運ぶやう、協力的に努力すべきだと思ひます。

それが親としての眞實な「愛」であり、兄弟姉妹としての「友情」の至れるものだと思います。そこまで一家の血縁的情愛が秘徹してない以上、どこか一家の生活的営みにおいて缺けてるものがあるやうに感ぜられます。

事前にさうした手落ない手順と諒解の道が開けてゐれば、嫁婿が婚家に入つても思想感情がすでに事前に融和し、立板に水を流すやうすらくと行くと思ひます。それが舅姑・小舅姑のうち何れかに釋然たらざるものがありますと、いつまでも^{くす}燻的に尾をひき、晴れやらない梅雨のやうな空気に一家を包むと思ひます。だから、出来るだけ一家が總あげして歡び迎へられるやうな嫁婿を、捜し索めることに努力すべきです。

だが、如何に「いゝ嫁だ」「いゝ婿だ」と歡び迎へた嫁婿にしても、やはり人間の果敢さですから、長い年月のうちには、お互に感情の緩みもでき、わがままも顔出し、あらも見えしますから、それ等を克服して、眞の「子」同様に血縁化し同化するまでには、相とる餘震のやうな細かい、いざこざ紛糾があるものと豫想しなければなりません。

そこはお互に勘忍と辛抱を第一とし、語りあひ譲りあひ同情しあつて、一步一步と理想に近づくやう努力すべきだと思ひます。もと／＼嫁婿といふものは、自分の家で生ひ立ち成人したものでなく、全ぜん家風・生活態度・様式のちがつた他家に生ひ立ち成人したもののなのですから、萬事が萬事、婚家の人々の氣に入らう筈がないと思ひます。それを一々

啓めたてしてゐては、際限がないわけです。飽までも深い同情と愛をもつて、懇切に訓へ導き、徐々になじんで貰ふより外ないと思ひます。

むろん、嫁婚は生みの親をすて、生家はないものと固い決心で來てるのでせうけれど、生にゐてさう完全に諦観し得られるものではなく、また二十年近い生家における生活的癖といひませうか、生家の家風・態度・様式が心せずして思はずも顔出し、「はつ」と戦き慄へることが多いのです。また時々につれづれに、善きにせよ悪しきにせよ、生みの親をなつかひ生家を戀ふは人情の常で、「嫁して他家の人となり、初めて生家を知る」といふことも出来るのですから、わけて婚家が居辛いとなれば、居辛いほどその情が熾烈に湧くものと思ひます。

だから、嫁婚が家に居づくまで深い思ひやりで温め、一日も早く家に根をおろすやう氣づかひ心配してやるべきだと思ひます。そしてゆる／＼と家の家風や生活様式になじんで貰ふより外ないと思ひます。

それにはやはり二十年近くはかゝるのでないかと思ひます。入婚一歳とすればさういふ勘定になります。まあそれほどの永い氣で、一人の娘、一人の息子を育てるやうありたいと思ひます。

何といつても、姑の方は母であるべきで、年齢的には二十歳以上の嫁婚でも、決して大きい一人前の嫁婚だと思つてはいけません。飽までも「當歳の赤ん坊を育てるのだ」といふ、永い氣と温かい愛と深い心づかひが必要なのです。でないと、嫁婚は決して育たないと思ひます。

しかも、婚家において、最も嫁婚に同情と理解のあるものは、姑でなければなりません。また姑の深い過去の経験から、その同情と理解は十分に出来る立場にあると思ひます。嫁婚にとつて姑の同情ほど嬉しいものはないのです。全く生きのびた嬉しさのものです。沙漠に泉を見つけたやうな嬉しさともいへませう。私は、嫁婚が夫や妻の愛よりも、姑の愛で家に居づくのでないかと思ひます。

姑が依怙地で、思ひやりや同情がなく、嫁婚虐めの冷酷なものならば、如何に夫や妻が親切で愛が深からうとも、どれほど居づらいか知れず、しまひには夫や妻の愛や親切をも

棄て、家出せぬとも限らぬと思ひます。それほど姑の愛は嫁婚にとつて重大なものです。それもその筈です。姑は母なのですから。

姑と婿の間よりも、姑と嫁の間にいざこざ紛糾が多いやうに聞くのですが、それはどうした理由からか、私には判らないのです。私にはいせれば、姑と嫁は同じ性なのです。から、萬事に理解がよく行つて、そこにいざこざ紛糾がない筈だと思ふのですけれど、或は私だち男の考へ及ばない、女性特有の生理的心理といつたものがあつて、自分自身でも理窟ではどうすることも出来ないのかも知れませんが、それでもお互に女なのです。から、「理窟ではどうすることも出来ない、女特有の生理的心理といつたものがある」といふことまでも、十分に理解されて、そこが圓滑に行く筈だと思ふのですけれど。ひよつとする、そこまでの深い理解がない上から来るのかも知れません。

だが、姑と嫁の間にいざこざ紛糾が絶えないといふことは、双方の人生を傷めてることになるのですから、どちらかど一歩譲つて圓滿に行きたいものだと思ひます。

「譲る」といふことは、感情上なか／＼出来がたいものですけれど、そこを押し譲ると

ころに、人品の高く優雅なことを示すものだと思ひます。わけて上位にある人の美德ではないかと考へます。

譲ることを下位のものゝ義務かのやうに考へることは、人品として下の下たるものだと思ひます。私にはいせれば、上位にある人こそ譲るべきだと思ひます。またそれほどの餘裕と思慮は、持合はせてゐなざる筈だと思ひます。でなければ、上位にある價值が失はれます。嫁がどんなに嫁としての心得を失はうとも、姑は飽までも姑としての温かい心をもつて接し、嫁の曲つた不心得を素直になほしてやれるやうな、宏量と寛大な姑がほしいと思ひます。

姑と嫁の間に、いざこざがあるといふことは、姑が母の心得を失ひ、嫁と同じ線にまで下つてることだと思ひます。これでは同格ですから、母としての價值が失はれてゐます。姑は如何なる場合にも、太陽のごとく母の地位を失ふべきでないと思ひます。

姑は常に太陽のごとく母の地位を保ち、總の子が睦しく自分の懐に入つてると同じやうに、嫁婚をも自分の温かい懐に入れ孕まなければなりません。そして小舅姑との間に折合

ひでも悪いことがあれば、よくその間を取なして、すべてが折合ひよく眞の「子」となるやうに、訓へ導くことが肝要だと思ひます。むろん若夫婦の折合ひも睦しく、よくその邊の面倒も見てやるべきだと思ひます。姑の方もお忙しいことです。ご同情申しあげます。

次に、嫁婿の生家における家風・生活態度・様式への理解なのですが、これはやがて當人の生活癖への理解ともなるのですが、この方が先決問題かも知れません。

嫁婿は二十年近く、しかも最も適當な教育期の幼年時代をかけて、生家に生ひ立ち、生家に成人してゐたのですから、生家の家風・生活態度・様式に深く染み込んで、それが持つて生れた當人の生活的な癖と、見界がつかぬほどに馴じんでるかも知れません。それを一々咎めだてしてゐては、前にも言つたやうに際限がなく、しまひには嫁婿を殺すことになるのです。これは「父と母の道」のところでも言つたと思ひますが、「生活の癖」といふものは、その者の持つて生れた天性なのですから、「直せ」といふよりも、理解するより外ないのです。理解とは自分の世界に溶かすことなのです。「同化」といつた方がいゝかも知れません。

なほ、次の「嫁婿の道」のところでも詳しく述べたいと思ひますが、家風・生活態度・様式といふものは、同じ一つの富士山に登るやうなもので、駿州路から登るものと甲州路から登るものと、登る路が甚だしく違つてゐても、登る目的地は同じ一つなのです。

と同様に、どんなに家風・生活態度・様式が遠距離的な隔てがあらうとも、皆その生活的な目的地は同じなのです。そしてこの方法が一ばん正しい方法だと考へてやつてゐるので、

そこをよく理解すれば、角立たなく自分の世界に受け容れられると思ひます。だといつて、自分も甲州路から登るといふわけではないのです。駿州路から登ることは自分の持前なのですから、自分は駿州路から登つていゝのですが、たゞ他を寛容する——許すといふ意味なのです。

だが、自分も甲州路から登つて見ることは、決して悪いことではありません。それ／＼違つた味といふものがありますから、ひよつとしたら、それが機縁となつて、甲州路の方が眞の自分の持前だと悟るかも知れません。

私たちには、「こだはり」といふものがあつて、その「こだはり」のために、自分の持前でないものを自分の持前だと信じて、後生大事と守つてゐるものが多いのです。だから、色々なものを好き嫌ひなしに食つて見ることです。すると眞の自分の持前を發見するので、それが佛教の言葉でいふ「さとり（悟）」なのです。

「さとり」には「縁」といふものが大事なのです。縁とはまあ今日の言葉でいふ機會のことです。早州路から登つたことが縁なのです。また「さとり」が開かれなくても、甲州路から登つて見たことによつて、「駿州路が眞の自分の持前だ」といふ確信を益々固くしただけでも、大變な收穫だと思ひます。

だから、姑となり嫁婿となつた「縁」によつて、何程か自分の世界が開け、明く廣くなつたとなれば、双方の幸福でないかと思ひます。何にしても、自分の狭い生き方にこだはり躍氣となつて、他を排撃し他を憎むことはいけないことだと思ひます。一切を素直に柔和に受け容れて、他を泌々と味つて見ることも大切だと思ひます。それは、つまり、自分への生長なのです。

自分の世界に、或は自分の「家」に、新しいものを受け容れるといふことは、自分または家の生長發展の上において、血液的にも生活的にも、大へん大切なことなのです。でないと、自分または「家」がコンクリート化して死んでしまふのです。私たちはいつも「新しいものを食ふ」といふことによつて生きてゐるのですから、それを食はなければ死ぬのが當然です。

この意味において、嫁婿は血液的にも生活的にも、多大に新しいものを背負つて來てゐることになります。それを思ふ存分に食はないことは、自分または「家」の生長發展を自ら阻止してゐることになるのです。だから、素直に柔和にそれを受け容れて、泌々とその味を味ふことは、つまり自分または「家」の生長發展を願つてゐる道義ともなるのです。それは嫁婿への敗北ではなくて、自分または「家」への凱歌なのです。

「さう、そんなご飯の炊き方もありますわね。ちや、今日は一つその炊き方で炊いて頂きますせう」

と素直に炊かせ、結果がよければ、

「まあ、今朝のご飯のおいしいこと。あの炊き方いゝのね。これからあの炊き方で炊いて頂ませう」

となれば、嫁はどんなに感激して、仕事に精勵するかも知れないのです。また結果が悪ければ悪いで、素直に、柔和に

「ちと、ご飯がまづいやうね。明日はうちの炊き方で炊いて見ませう」

「すみません」

この「すみません」の言葉のうちには、きつと「姑」の深い愛への涙が添つてると思ひます。そして明日は懇切にこま／＼と自分の家の炊き方を訓へ導いてやればいゝのでないかと思ひます。

それを頭からガミ／＼と、

「そんな炊き方では困ります。うちの炊き方はかうなのよ。ちと見ていらつしやい」

などと叱らなくてもいゝと思ひます。そこは飽までも素直に柔和に、大きくまるやかに行く方がいゝと思ひます。苛々と尖つたやり方では、「道近くして結果甚だ遠し」と思は

なければなりません。

そして、嫁婿を愛し慈しむことによつて、また嫁婿から新しい生長と発展の糧を酌むことによつて、自分の「家」がますます／＼朗かとなり、生々發展の正氣が満溢するといふことになれば、こんな嬉しいことはないと思ひます。

なほ、さうした嫁婿の媒介によつて、嫁婿の生家との折合ひ交際も、ますます／＼深く濃密に運ばれるとなれば、上々の吉運だと思ひます。「家」と「家」の固い深い結合の必要なことは、國家としても忽諸にしてはならないことなのです。國家はその強靱な紐帶によつて、築きあげられなければならないのですから、さうした深い固い「家」と「家」の結合は、やがて國家の隆昌發展する礎ともなるのです。とくと考へて頂きたいと思ひます。

次は、小舅姑の道なのですが、これも眞の兄弟姉妹の至情において、嫁婿と相融和し一體化し睦まなければなりません。そして眞の「子」としての躰はしい姿を見せなければなりません。

むろん、嫁婿は年齢的には上かも知れませんが、「家」では當歳の弟妹にも等しいので、すから、よく不案内な點をお訓へして、二人で父母への孝養を怠らないやうに氣づかひして頂ければ、申分ないと思ひます。

もし、父母、若夫婦の間に折合ひでも悪く、うまく行かぬやうなことであれば、その間をよく取なして、父母も立ち、嫁婿も立ち、若夫婦も立つやうに、出来るだけの力を致さなければならぬと思ひます。

そこは、父母、兄弟姉妹とは血縁關係ある強味で、相とう突き込んだことも言へて、いはゆる一下情上達、上意下達」の、頼母しい水路ともなることが出来ると思ひます。

「お母さま、お母さまはちと嫂せうさんに同情がないんぢやないの」

「どうして」

「どうしてだつて、あれぢや嫂さんの立つ瀬がないと思ふわ。わたしだつて怒るわ」

「濱子さん、いゝの、わたしが悪いの、お姑おぢさまにはちつとも悪いとこありませんの、

わたしが悪いのです。あやまります。ご免なさい。お姑おぢさま」

「いゝのよ。氣をつけてさへ頂ければ、一時はかつとしたもんだから」

これで、小姑の嫁への道義は、完全に達せられると思ひます。かうした聰明な小舅姑であれば、嫁婿との間は圓滑にうまく行くと思ひます。

「濱子さん、さきほどは有難う。感謝するわ」

「いゝのよ、うちのお母さまはちと怒りばいの、そこをよう呑み込んで辛抱してね」

「有難う。わたし濱子さんゐるから、どんなに助かつてるか知れないわ。辛抱するわ」
かうした麗はしい感情の譲りあひ、或は同情と感謝によつて、一家がうまく強靱に保たれて行くのだと思ひます。それがこの反對に、嫁婿をないがしろにし、小舅姑を輕蔑し、甚だしきはお互に陰口をいひ、父母または若夫婦の間を離間せしめるやうな言動にでも出るとなれば、「一家の壊滅立ちどころに至る」といふことになると思ひます。

これは、本能的・一時的な感情の満足だけを追ふさかしい小伶俐者の必然的な運命だといへ、餘りにもその犠牲的代償が大きいと思ひます。氣をつけて頂きたいと思ひます。

次に、嫁婦の道ですが――

むかし、最も厳しい家では、娘を婚家に送らうとする前に、生みの親とは死別の水盃をかはし、生みの家は全ぜん無いものとした、異常な決心と覚悟を持たせて送り出したものです。結婚は非常に目出たいものだ、財をかたむけて一生一代の晴々しい仕送りをしなから、娘には全ぜんそれとは反対の死を負はせて、悲壯にも門出させたものです。

まことに義に厳しい祖先の崇高さに、自然と頭がさがるのですが、嫁婦の婚家への道義として、これ以上のものはないと思ひます。この決心と覚悟さへあれば、一切の道は何の遅滞なく立ちどころに開けて、樂々と通りぬけられるのです。

だが、生にゐて死ぬことは難いのです。難中の難といつてもいゝのです。だが、それほどの堅い決心と覚悟がないと、婚家ではつとまらないものと、私だちの祖先は考へ見ぬいたのです。またそれほどの固い強靱な覚悟と決心で、嫁に家を支へさせなければ家が持つて行けないことも、多年の思慮と経験の上から割出したものなのです。まことに高き思想と諦観だと思ひます。

全く敬服の至りです。

西洋のやうに唯單に、夫への妻であるといふならば、さうまで厳しい決心と覚悟は要しないかも知れませんが、日本の「家」では前にも申しましたやうに、夫への良妻でなければならぬと同時に、舅姑へのよき「子」でなければならず、また小舅姑への好ましき姉妹でなければならぬのですから、並大抵の業ではないのです。わけて個人よりも、「家」といふものに多大の重大義をおいた、私たち祖先の思想・感情として、正にさうあらねばならなかつたのです。

だから、それ等を完全に申分なくやり盡して行くためには、死して再び生ひ立つより外なかつたのです。「死して再び生ひ立つ」とは、過去の一切の我執を取除き、清らに純真に生れ出て、何事も素直にあな、まかせに生きることなのです。一も柔順、二も柔順、柔順より外に何物もない、透徹した神のやうな生活を遂げることなのです。

だが、それはなか／＼に至難なことで、死を代償とするより外に到り得ない道なのです。いはゆる、死をもつて一切をあがなふ――これが日本婦道の眞髓なのです。

これを世間では、多く犠牲といつてゐますけれど、犠牲でも何でもなく、嫁を最善最高に生かす道なのです。犠牲とは「勞して效ない」場合にのみ許された言葉だと思ひます。道義といふものは、如何に厳しからうとも、そのうちの一者を見殺しにしては、絶対に成立たないものです。たゞ犠牲的なやうに見えるのは、その勞苦的代償が餘りにも多大なるが故で、それだけまた酬られるところも大きいのが、道義の本義であり眞髓なのです。

だから、嫁・婿が死して婚家に生きることが、犠牲的なやうに見えて、絶対にさうではなく、嫁・婿を最善最高に生かさうための道なのです。この點、深く省慮し勇躍して婚家はらに入られるやう、切に希望したいと思ひます。

で、婚家に入つては、萬事が戸迷ひするほど勝手が違ふことと思ひます。臺所の隅々から上屋敷の隅々に至るまで、また家族の人々の起居、立ち振舞ひの一々に至るまで、すべてが勝手ちがふことゝ察します。

しかも、その型や様式は一朝一夕に出來たものでなく、いはゆる祖先傳來の根強いもの

ばかりが残されてることになり、それが一の家風となり、生活態度となり、生活様式となつてゐるわけです。なほその上に、家族その人たちの生活的癖が手傳つて、多岐多様となり複雑となつてゐることゝ思ひます。

それ等の間に身をおくとき、純眞で素直で、たゞひたすらにあなたまかせに隨順するより外ないことに氣づくでせう。それを一々生家と比較して批判したり、善惡をきめてあたりしてゐては、事ごといさこ紛糾の種で折合ひ悪く、しまひには立瀬を失ふと思ひます。そこに初めて、「死して生きる」ことの道義的眞を見出すでせう。

いはゆる、「死して生きる」とは、過去の生家的な一切の我執をすて、たゞひたすらに婚家の家風になじみ、婚家の生活態度や様式にすつかり身をはめ込むことなのです。更にいへば、婚家の眞の「子」として、入婚當歳の赤ん坊から生ひ立つことなのです。

それには生れて當歳の赤ん坊のやうな純眞さ素直さにおいて、夫に隨順し、舅姑に隨順し、小舅姑に隨順して、ひたすらに婚家の家風・生活態度・様式の、由つて來る精神の根源を學ぶことです。

何れの家風・生活態度・様式も、「一家が衰亡してもいゝ」といつた自棄的な精神から來てるものはなく、すべて一家の隆昌安泰をこれ願つての篤い深い精神から來てるものな
のです。だから、この點は生家と何ら異なるものなのです。ただ異つてるところは、そ
の行き方―方法が異つてただけで、一は右、一は左となつて現はれてるだけなのです。

それはその「家」の祖先的な思想・諦觀に根ざしてゐるものが多く、なか―に尊いもの
でもあるのです。だから、その行き方―方法が違つてゐるからといつて、その精神までもい
けないといふことは、大きな偏見であり謬見なのです。

これは、「舅姑の道」のところでも申しましたやうに、同じ富士山に登るのに、駿州路
からのぼるものと、甲州路からのぼるものがあるにしても、その「何れがいゝ」といふわ
けには行かないのです。むしろ、そこに日數の長短や經費の多寡や、登るに險阻的な難易
や、景色のよしあしはありませうけれど、それにはそれとして味のちがひもあり、うま味
の差もあつて、一がいに「何れがいゝ」とは決定しがたいのです。

だから、毎年駿州路からばかり登る人もあれば、また毎年甲州路からばかり登る人もあ

るので。中には代りばんこに登る人もあります。だが、何れも富士山に登り極めようと
する究局の精神に至つては同じことです。

よく食べ物なども問題になると思ひますが、食べ物もまた同じことです。その家その家
の習癖から、料理の材料や煮付の加減や味つけなどに相異がありましても、身體的な榮養
を攝らうとする精神―目的には、變りがないわけです。「午勞がすきだ」「人參が嫌ひだ」
といふ人もありますけれど、食べ物好き嫌ひは、そのものゝ味のよさが判らないからの
ことで、いはゆる、自分の世界がそれだけ狭いといふことになるのです。食物の味のよさ
さへ判れば、何でも食へるのです。

婚家の食物が拙い、味つけが辛すぎる、或は甘すぎる。ご飯が硬すぎる、或は柔かすぎ
る―などゝ色々小言いふ嫁もありません。それも材料の拙さのよさ、辛さのよさ、
甘さのよさ、硬さのよさ、柔かさのよさ―といふものが判つてゐないからです。それだ
け食べ物の世界が狹隘で貧相なのです。大きくいつて、人生が淺く狭いのです。

だから、それをおして進んで、むしろ廣やかな嬉しい氣持で、泌々と味つて見ることが

肝要なのです。それだけ自分の世界が廣くなり深くなります。それが眞の生きた精神修養といふものです。ひよつとしたら、食はず嫌ひだつたことにも氣づくのです。

午芻の味は知つてゐるが、人參の味は知らない。大根の味は知つてゐるが、蓮根の味は知らない——といふのでは、その「知つてゐる」といふ午芻や大根の味も危いものです。午芻だけを食つてゐて、午芻の眞の味は判るものでなく、大根だけを食つてゐて、大根の眞の味は判るものではないのです。一二三四……と多くの物を食べれば食ふほど、午芻の眞の味が判つて來るのです。大根の味も同じことです。すべての物の味の、聯立と階和の上に立つてこそ、初めて午芻の眞の味が判るのです。それは音楽と何ら異はないものです。

ピアノの一鍵板がひびくとき、その鍵板だけが鳴つてゐるものと思つてはなりません。全鍵板の聯立と階和の上に立つて、その鍵板が鳴つてゐるのです。それがお判りでないならば他の鍵板を抑へて見なさればいゝのです。すぐ判ります。

だが、なほ、ピアノの全鍵板だけだと思つてはなりません。ピアノのおいてある床板、お部屋の戸障子、柱、壁、ありとあらゆるものが一鍵板の響きによつて眼をさまし、聯立

と階和の役目を遂げてゐるものなのです。或は全宇宙のものが眼をさましいぶきして、聯立と階和の役目を果してるといつてもいゝのです。

それで一鍵板のひびきが、最も麗はしく妙に、天女も來り舞ふひびきとなるので。だから、その聯立と階和の質と量が、大であればあるほど、一鍵板のひびきがいゝといふこととなります。

これは、私たちの食べ物や音楽だけの世界ではないのです。すべてのものがさうだと思つて間違ひはありません。だから、出來るだけ一切のものゝ視野と眼界を廣くしなければならぬのです。そして一切のものゝ聯立と階和の協力を待たねばならぬのです。

だから、婚家には婚家特有の習慣やしきたりといふものがありませうから、その中へ忠實に素直に入つて見て、その由つて來る精神—魂をつかみ、その味のよさをとくと味つて見ることが大切なのです。すると、そこに思ひ設けぬ廣い視野—眼界が開けて來るものなのです。それは自分の生長發展であると同時に、やがては婚家發展の根柢ともなるのです。

すなはち、やがて自分の代ともならば、立派に婚家の傳統的な精神を生かしながら、改良も出来、また創造も出来るのです。物の根本精神がはつきり掴めないでゐて、改良も創造もありません。この點、吳々も反省していただきたいと思ひます。

嫁・婿は、婚家への改良的・創造的血液と生活の移入者ですから、ゆめ／＼嫁・婿を虐げ見殺しする氣があつてはなりません。むしろ大に尊重すべきだと思ひますが、しかしこの根本精神を忘れての改良や創造は、絶対に危険ですから警戒しなければなりません。やはり随順に徹してからの改良であり、創造でなければなりません。

で、最後に結論として、嫁・婿は同伴の夫または妻の名において、家族の一員となるのですから、夫婦の和合一體化が根本であることを忘れてはなりません。夫婦の間が不和不仲では、家族としての資格を缺くことになるのですから、その根本的な足場を忘れてはなりません。

次に、小舅姑と相むつみ一本となることは、眞の「子」としての肝要事なのですから、これまた忽諸にし等閑視してはなりません。

以上の二つが完全に出来て、初めて舅姑の前に、眞の「子」として跪ぶことが出来るのです。いはゞ、これでこそ、初めて眞の「孝行」たる事が出来るのです。眞の「子」とならないでゐて、眞の「孝行」がないものと思はなければなりません。

「夫婦の道、子への道」は、それ／＼の項において述べたいと思ひますから、それを見て頂ければいゝとして、最後に今一つ警告申しておきたいことは、――

嫁の方に子どもが出来ますと、今まで緊張した慎ましい態度がすっかり變り、夫に對して粗略になるばかりか、舅姑に對しても、小舅姑に對しても、しごく態度が横柄になる傾向があることです。これは大に警戒して頂かなければならぬと思ひます。

なるほど、子どもが出来て勞苦が倍加されるわけですから、今までのやうな手落ない配慮や氣くばりが出来ないかも知れませんが、しかし態度や心持ちの根本までも變へなせることは、どうかと思ひます。そのために、今までのなごやかな一家の空氣が、荒れすさんで来るやうな形になることは、至極惜しいことだと思ひます。

子どもを養育するために、相當の勞苦と時間が取られるのですから、今までの氣づかひ

や勞苦を省略し簡略にして、十を七にし、七を五にすることはいゝと思ひます。それは家族の他のものも認めなければなりませんし、また手助けもしなければならぬと思ひます。

だが、そのために、残れる七、五の質までも變へなせることは、悪いことだと思ひます。それでは臺なしと言はなければなりません。だから、是が非とも、そこは頑張つて、

「量はかへても質はかへない」といふ健氣な雄々しい態度と勇氣を持つて頂きたいと思ひます。でないとも夫も失望し、舅姑も失望し、小舅姑も失望します。その失望は決していゝ結果をもたらさないと思ひます。

だから、「量はかへても質はかへない」といふ雄々しく健氣な態度にこそ、一家の同情は蒐まり、それはやがてあなたの幸福でもあり、また「子ども」への幸福ともなると思ひます。

呉々もそれをお願ひして、次の項へ筆をうつします。――

六、婢 僕 の 道

婢僕は、義においては「主従」であります。情においては血縁化されて子に準ぜられ「子」の列に加へられることは、日本の家族制度の特質なのです。

だから、西洋流のやうに、權利義務の雇傭関係や打算関係ではなく、全くそれ等を超えた情義関係なのです。昔の嚴しいものでは、「忠婢義僕は二家に仕へず」といつたもので、そこは、武士の「二君に見えず」と同じものだったのです。

日本の武士道といへば、武士階級だけに尊ばれた道のやうに思ひますけれど、決してさうではなく、あらゆる庶民階級の隅々にまでも、泌み徹つてたものなのです。百姓・町人の階級はむろんのこと、當時の社會の下積みだつたやくざの層に至るまでも、「親分・子分」「兄分・弟分」といつて、それは情義かたいものでした。

と同時に、婢僕にしましても、一たび仕へれば、如何なる困難辛苦があらうとも、容易に主家をかへず、飽きでも忠勤これ努めて頑張つたものです。「主家の困難辛苦に堪へきれないで主をかへた」と言はれては、「男の言ひ分」「女の操が立たない」と生氣ばつたものです。だから、忠實そのものでした。「權化」とはさうした姿をいふのだらうと思ふ位でした。

今日では、その邊の情義も浮薄になり卑賤となり、轉々として給料の高きと勞苦の易きについて流れてゐますけれど、昔はそれを爲しもしなければ、また世間的にも出来なかつたのです。この點、社會的にも多大に日本的なものが失はれてるわけです。或意味において淋しいことだと思ひます。

むろん主家としましても、出来るだけのことは盡してたやうです。すなはち赤の他人を血縁化して「子」に準じ、その間にちつとの差別をおかず、可愛がり慈しみ、「たび／＼婢僕をかへては世間さまに對して申し譯ない」と深く自省し自誠し、一たび傭ひ入れた以上、多少の手落や氣に入らないところがあらうとも、出来るだけ辛抱し、婢僕の生涯にわ

たつて、面倒を見るといつた生真面目な態度と氣風だつたと思ひます。

婢僕の結婚のことから、家を持つた後々の生活までも心配してやり、生涯にわたつて「主従」の關係にあつた婢僕も、數多くあつた筈です。まことに置はしい情義の濃かなものでした。かうした情景は、今日も遠く都會を離れた僻遠の山村漁村に見られないこともありませんが、その他は多く荒廢に歸してゐます。

だから、昔の婢僕は安心して忠實に働くことも出来、私心なく長期にわたることも出来たのだと思ひます。よく主家になつき随順し、一家の和平統一を缺き亂するやうな非行は絶対になく、渾然と一體となり、ただひたすらに主家の隆昌安泰をのみ請ひ願ふ、といつた良風美俗が堅持されて來たのだと思ひます。

子どもだちも、「ぢいや」「ばあや」といつてなつき慕ひ、犬猫までも主人の名において撫育したものですから、そのなつき方も一入でした。

だから、昔は、婢僕の道義として、最も高く置はしいものが行はれてたやうです。だが、これをそのまま今日の「家」の上に、持ち來さう無理な願望は持ちませんけれど、唯

その「何分の幾つかの情義を持ち來されはしないか」の願ひだけは、強く動きます。だといつて、かうとした方法上の目安もつかず、次の項に急ぐことの淋しさを告白しなければなりません。——のを遺憾とします。

七、家長と家族の道

父と母が統一的に一體化されて、眞の「親」となり、兄弟姉妹が友愛相助のまごころにおいて相融和し一體化されて、眞の「子」となり、婢僕がまた子に準ぜられて「子」の列に加はり、この「親」と「子」が更に統一的に一體化されて、そこに初めて「家」を形づくるのですが、この「家」としての統一的一體化が、なか／＼に困難なものであることは、すでに述べた通りです。

これは丁度、オーケストラのやうなもので、オーケストラの各員がそれ／＼忠實に自分

の持場を守つて、その吹奏なり奏樂をやつてくれれば、必然に交響樂の統一的理想境を演出されさうなものですけれど、それではどうも破綻が出來て、うまく行かないものなのです。そこにやはりタクト者があつて、うまく指揮してくれなければ、演奏の足並が揃はず、統一的に一體化されて來ないのです。

これは軍隊でも同様なことがいへます。軍隊の各兵員が戦闘攻撃の目標と目的をよく解し身につけ、その目標と目的に向つて、最善の努力で突入してくれば、それで戦闘の目的は達せられさうなものですけれど、それではどうも足並が亂れて、うまく行かないのです。やはり一の指揮者があつて、うまく指揮してくれなければ、各兵員の總力が目標にむかつて結集せず、失敗に終るのです。

「家」における「家長」もそれなのです。家族全員の總力を結集して、一家の隆昌安泰に向けるためには、どうしてもそこに總力の結集者——指導者がゐないと、足並が亂れて總力が結集されず、よし結集されても薄弱で破綻がちであり、到底その目的が達せられなくなるのです。

實をいへば、「統一」といふものは、内在的なもので、内にさへしつかり統一してゐれば、いふものなのですけれど、それではなか／＼に纏らなく、よし纏つても非常に薄弱で、ちよつとした機みや躓きですぐ崩れてしまふのです。

だから、それをしつかりと支へて亂れを防いでくれるもの——さうしたものを内には到てい得られないから、外にそれを得ようとして來るのです。

たとへば、神佛への統一的な信仰にしても、内に深く信仰してゐれば、それでいゝ筈のものですけれど、それでは深い力強い信仰に入りがたいのです。必ず外にその存在をみとめて、いはゆる「内外一體化」の眞實在的な形象をとらないと、眞の深い力強い信仰には入りがたいのです。

こゝに、豪壯極まりない寺堂や大伽藍が建築されたり、藝術の極致的な表現とも見られる佛像が安置され、或はまた、大自然ともまがふ幽玄な境内が準備され、清淨そのものゝやうな閑雅な社殿が建築されるわけです。

かうした外在的な形象を得て、初めて神佛は眞實在的な存在となり、信仰が深い確固不

動の、何物にも揺がないものとなるのです。

「鬪の頭も信心から」といひますけれどそんな素朴な外在では、内なるものが満足されないのです。やはり内在の信仰的形象に比例した外在の形象でありませんと、内外一體化の渾然とした統一的信仰は、遂げられないのです。こゝに神社佛閣の建築的豪壯といひ、境内の幽玄といひ、簡素そのものゝやうな清淨といひ、十分に肯かれることゝ思ひます。それは皆、私だちの内在的な神佛への信仰的形象が外在に投影されて、さうなつたものなのです。

で、オーケストラの内在的統一者の形象は、タクト者の上に描かれ、軍隊は部隊長の上に「家」は「家長」の上に描かれ、投影されるわけです。ですから、「タクト者」、「部隊長」、「家長」は、神格化して來ることは、當然と認めなければなりません。

で、「家」における「家長」は、父なる有待の身をもつて、統一的神格の位置につくこととなります。これは父自らが自分の私意によつてつくものでなく、家族それ／＼に内在する家長的統一者の外在的な投影として、必然的に神格化され、その位置につくものです。

しかも、それはやがて父の有待の身であることも忘れ、父本然の性格でもあるかのやうに信仰されて來ます。この信仰がまた「家」の統一的一體化の上において、きはめて大切なことで、家族のものにこの篤い高い信仰がないと、うまく完全に統一が行きません。

家族のものにこの信仰があつて、父は「家長」として完全に神格化され、一家の統一者として崇信敬仰されることとなります。

こゝで、「家長」が家族への道義として、如何にすべきかの問題が、はつきりして來たことと思ひます。すなはち、「家長」は一家の統一者としても神位におかれ、神の具有したまふ性格の、あらゆるものを完全に具有してゐなければならぬこととなります。

「神は一切に萬能であらせられる」といふならば、「家長」もまた一切に萬能でなければならぬこととなります。こゝに「家長」の教養と生活もまた、神のごとく偉大でなければならぬこととなります。この教養と生活が偉大であればあるほど、いはゆる神に近ければ近いほど、家族の崇信と敬仰が増大し、その統一的一體化はますます強靱となり、精強そのものとなるわけです。「家長」の責任もまた重且つ大といはなければなりません。

これに反して、「家長」の教養と生活が偉大に遠く、神にうとければ、それだけ家族の崇信と敬仰は失はれ、統一的一體化も脆弱となり、破綻を免れないものと見なければなりません。

この點、昔の「家長」には見あげるほど立派なものが多かつたやうに思ひます。自己を律すること極めて嚴に、率先して何事にも當り、——（今の陣頭指揮です）——家族の責任は「家長」の責任として負擔し、他から非難の一指も觸れさせまいとしました。それで、家族をば柔和に仁慈にあつかひ、いはゞ「恩威並び行ふ」といふことに、多大の心血をそそぎ、精根を枯らして來たやうです。

家族としては、「家長」の義の嚴しさよりも、情の濃やかなることを欲するものなのですが、だといつて、情に濃かなれば溺れようとする缺陷と通弊をもつてゐます。この點も昔は相とう苦心された跡が見えます。

だが、何れかといへば、情の方は母方にまかせて、——（これは次章——「家長」への裏づけの項で詳しく述べます。）——「家長」そのものは、嚴格にすぎた方が多いやうで

した。だから、家族のものは、「家長」に親愛的だつたといふよりも、畏敬的だつたことは否まれません。そこに多少の小瑾的な弊害がないでもありませんでしたが、大體において完全に一體化され統一されて、肅嚴にして温かい「家」が形成されてたことは、敬賞に値するものだつたと思ひます。

今日、相とう亂れてる「家」があるやに聞くのですが、その原因には色々ありませうけれど、その主なものは、「家長」たる父が、「家長」の神格的地位の尊嚴さに自覺してないが故だと思ひます。いはゞ父自らが「家長」の地位を、よほどお粗末なものに考へてゐるからだと思ひます。

だから、日常の生活と教養がお粗末となり、曇天がちとなり、或は低悪となりして、何等そこに、家族の崇信敬仰の眼を光らせるやうな燦然たるものを示さない。それが主な原因でないかと思ひます。いはゞ「家長」たる父の生活的怠廢から來てるものと思ひます。

よろしく家長たる父は、「家」の國家的意義の重大性にかんがみ、「家長」の神格的地位の尊嚴に自覺し、自ら敬崇信奉し、率先垂範、家族を率ゆべきだと思ひます。

後ほど、それらの章と項において詳しく述べたいと思ひますが、「家」は國家の身體的發展としての一機關なのですから、「家」の隆替は直即ち「國家」の隆替だといつても、敢て過言ではないのです。だから、「國家」の隆替は一に「家長」たる父の双肩にかゝつてゐるものと思はなければなりません。

わけて今日の緊迫せる國家狀勢において、大東亞戰爭の完遂上、一日の偷安估息を許さないのです。前線の將兵諸氏が敢闘敢爲よく戦つてると同様に、私だち銃後の國民も、銃後を前線化して、精根のかぎり恪勤精勵して職能の萬全を期さなければならぬと思ひます。それには「家長」たる父の陣頭指揮に待つものが多大だと思ひます。大に頑張つていたゞきたいと思ひます。切望します。

なほ、「家長」の重大責務として、「祖先」への敬崇奉祭の道があります。また「家」と「家」の道があります。「國家」への道もありますが、これは後ほど項を改めて述べることに致します。

次に、家族として「家長」への道ですが、今も述べましたやうに、「家長」は統一的神位にあるものですから、神聖にして犯すべからざるものと考へなければなりません。それは「家長」自らの發意によるものでなく、家族それ／＼に内在する「家」的統一者への信仰的形象として、必然に父の上に外在化し投影したものですから、父の尊嚴的な性格から來るものといふよりも、自分の内在的な信仰から來る至上命令だと考へなければなりません。いはゞ自分の統一的信仰に自分が隨順歸一するのです。

だから、「家長」の命令は直即ち、自分に内在する統一的信仰からの至上命令だと考へ、これに絶対服従することが肝要なのです。もし「家長」の命令に服従を拒むならば、それは直即ち、自分に内在する統一的信仰の至上命令を拒むことになりすから、事の如何にかゝはらず自分を縊ることになります。反省しなければなりません。

むろん「家長」にも不明不徳があるやうにも考へられますけれど、それは有待の身である「父」との混同から來るもので、「家長」には絶対に人間的な不明不徳といふものはありません。もしあると見られるならば、それは「家長」の不明不徳ではなくて、有待の身

である「父」の不明不徳に歸すべきものなのです。「家長」の神位は常に絶対的なもので、神聖にして犯すべからざるものと、むしろ信仰しなければなりません。

「父」の不明不徳はまた家族の不明不徳で、家族も一半の責任を負はなければなりません。「父即神である」の念願は、「家長」たる父の自誠であり精進の目標でもあります。家族としてそれを望むことは道義に外れたものであると思ひます。むしろ父の有待の身であることに十分な理解をもち、自ら徳をはげみ、生活に手落ない萬全を期して、一家の統制に積極的な隨順と服従を示さなければなりません。

これが家族として、「家長」への最も高き道義なのです。心しなければなりません。

八、祖先への道

私たちは親（父母）の血をうけ、親はまた親の血をうけ、その親はまた親の血をうけ、

層々相重なり、連綿として祖先累代の血が、私たちに繼承されてるものなのですが、その血はまた祖先累代の思想・感情・意志によつて、生活的訓練と陶冶をうけ、いはゞ血に祖先の生活史が描かれて、この私たちに繼承されてるものなのです。だから、私たちは血液的に祖先の歴史を背負つてるといつていいのです。

明治維新の復古的な大政に雀躍し、その完成に身を挺した血しほの跡も承けついでる筈ですし、徳川三百年の鎖國的な雌伏に隠忍した血液の陶冶も承けついでる筈です。戦國時代の群雄割據的な凄惨な騷擾にも、よく堪へた忍耐の底力も承けついでる筈であり、弘安の蒙古來るの國難にも、舉國一致、火の玉となつて防衛した大勇の流れも承けついでる筈です。

或はまた、楠木正成的な殉忠無比の精神的陶冶も、血液的に承けついでる筈であり、また和氣清麻呂的な國體明徴の思想的訓練も、血液的に承けついでる筈です。

その他、祖先の時代々々において、祖先が思想し感情し意志した生活的行動の跡は、巨細にわたつて一も洩さず血液に印刻され銘記されて、この私たちに繼承されてるものなの

です。

血液は聲をもつて語らないが、たゞ黙々して祖先の思想的・感情的・意志的慣行と軌道の上に動き、また動くべく陶冶され規制づけられてるものなのです。だから、血液は「聲なくして祖先を語る」といつてもいいのです。この「聲なき聲をきく」といふことが、祖先奉祭の儀禮ともなるのですが、これは後で詳しく述べます。

で、今日、私たちの血液もまた、更に滿洲事變・支那事變・大東亞戦争といつた歴史的陶冶と訓練において、これを子孫に繼承せしめなければならぬわけです。

だから、目下遂行中の大東亞戦争が、如何なる形體において完遂されるか、いはゞ如何なる歴史的形體として血液を規制し陶冶して、これを子孫に傳へ繼承せしめることになるかの問題は、この私たちに負はれた責務として、甚だ重大な危機點に立つてるものと見なければなりません。

もし私たちの祖先が鏤刻三千年、營々築きあげて來た光輝ある歴史に一汚點でも印し、これを子孫に傳へなければならぬ、悲しむべきことにでもなれば、何の顔あつて祖先に見

えんで、昔ならば切腹ものなのです。よし歴史の記録は抹殺されようも、血液の上の汚點的印刻と規制の跡は、絶対に抹殺することが出来ないのです。

だから、私たちは、死を賭してまでも、血液の純正的な保持と確保において、大東亞戦争を完全に勝ちぬき完行し、これを子孫に繼承せしめなければならぬのです。これが祖先への最も高き道義であり、また子孫へのいみぢき道義でもあるのです。

祖先への奉祭はこの高き道義において行はれ、祖先の思想・感情・意志のあらゆるものを血液的に自覺せしめ、聲なきにきき、その自覺と靈聲において、私たちの生活を規制し顯彰せしめようとするのです。

大化の新政もこの自覺と靈聲において行はれ、元寇の困難もこの自覺と靈聲において克服され、建武中興・明治維新の大業も、この自覺と靈聲において斷行され行はれたのです。

また武士道魂の神髓も、この自覺と靈聲において鍊成され鍛へあげられ、忠孝一本の純正崇高な道義も、この自覺と靈聲において馴成され陶冶され、わが家族制度の良風美俗

も、この自覺と靈聲において育成され培養されたものなのです。

祖先尊崇、奉祭の禮は、わが祖先においては生半解なお座なりのものでは絶対になく、鏤刻碎身、精魂の限りを致して行はれ、また、その精神と信仰において生活實踐と躬行に挺身これ努めたのです。いはゞ生活實踐と躬行において奉祭の實を行つたのです。

だから、朝な夕ないとも敬虔な赤心において、祖先の遺牌―靈前に跪づき、いやが上なる心身の明澄と清純を遂げ、いはゆる佛現一體の靈境を身に體し、最も淨らかな精神と身體において、今日の生活を實行しようとしたのです。だから、私たちの祖先にとつては、祖先への奉祭以外に生活がなかつたのです。いはゞ生活それ自體が祖先への奉祭だつたのです。

わが「家」の周邊には、永久に祖先の英靈が澎湃として居在あらせられ、わが一家一族の生活行跡は巨細にわたつて照覽あらせられ、善きはすゝめ悪しきは警しめ給ふと篤く信仰し歸依し、唯ひたすらに加護と恩寵の高からんことをこれ願ひ、入るも祖先、出づるも祖先、常住坐臥、祖先と共にあらざるはなく、たゞ一途に祖先の靈心靈聲において生きよ

う他に、何物もなかつたのです。それは涙ぐましくも敬虔な、或意味において「神」そのものゝ生活だつたかも知れませんでした。

だから、義のあるところ必ずこれを行ひ、利害得失、生死の問題など全く眼中になかつたといつてよく、唯あるものは大義名分、祖先への殉忠だけだつたのです。

「それでは祖先に對して相濟まぬ」と一言いつたが最後挺子でも動かぬ一徹さを示したことは、皆さまもご存じだらうと思ひます。

だから、一家の主人―「家長」は、常に祖先の名において一家の責任をもち、一族一黨の責任はむろんのこと、甚だしきは飼犬猫の責任までも背負つて、自害したのもあつた位です。それは自分は忍ぶべしとするも、「祖先に對して申譯ない」といふ高い念慮が、さうさせたものなのです。

しかも、一家の慶事は自分の功績とはせず、一に祖先の高き恩寵と加護によるものとして慶祝し、一家の悲運は自分の不徳不明による痛く懺悔し悔悟し、自己を叱咤し鞭撻して更に倍増の精進と努力をもつて、悲運挽回の生活に躍入したものです。そこには絶

對に士氣の沮喪と銷沈はなかつたやうです。

士氣の沮喪と銷沈、或は自暴自棄の投げやりの生活行爲は、主として祖先を失つた私たちに襲ひかゝるものなのです。祖先を肅嚴に持つものは、常に祖先によつて慰藉され激勵され、如何なる悲運困難に際會しようとも、絶対に士氣の沮喪や銷沈はなく、また自暴自棄的な投げやり行爲もありません。却て倍増の奮闘力と鋭氣を祖先から酌み取ります。

この意味において、祖先は私たち人生の救手であり、人生の行詰りさを展開し、障害を打破し、限りなく人生の行手に希望と光明を與へてくれる燈臺なのです。だから、祖先あるものには、絶対に人生の失望と自棄沮喪がないのです。祖先なきものゝみに、それがあ

るわけです。
わが國運の永遠的な隆昌發展も、上御一人の御稜威によること無論ですが、主に悠久三千年の光輝ある歴史を築いた祖先があるからだと思ひます。試みに、私たちにこの祖先が全くないものと考へてご覧なさいませ。如何に寂寥空漠たることか。前途暗たんとして一歩も進み得ないではありませんか。祖先は人生の限りなき太陽なのです。私たちに悠久

三千年にわたる歴史と祖先あることは、大に感謝しなければなりません。この感謝がまた祖先への奉祭となるのです。

で、祖先の最下位に祖父母がゐられるわけですが、祖父母には絶対に孝養の赤誠を致さなければなりません。祖父母を粗略にして、祖先への奉祭はないものと考へなければなりません。よしそれがあつても一の虚禮にすぎません。虚禮は何物の意義もない無駄なものです。絶対に排斥しなければなりません。

往々、祖父母を邪魔物扱ひにして粗略にする人もありますけれど、それは考へ足りないもので、さうした「家」には祖先の加護・恩寵などがあらずありません。それは結局、自分の世界の亂れを示すものであり、祖先への系列が一体的に統一してゐない證據なのです。さうした「家」の生活は常に破綻がちであり、破綻の穴から一家衰運の芽が兆すのです。警めなければなりません。

で、「家長」は「家」の統一的一體化の名において、初めて祖先に見えることが出来、

そこに祖先の靈心靈容と一體化して、初めて過現未の悠遠にして宏遠な世界が確立され、何物にも揺ぎない精強不動の第二次の「家」が形成されるわけです。

だから、祖先を粗略にするものは、それ等の一切を失ふものであり、最後には自己自身をも失ふものです。三省五慮しなければならぬことだと思ひます。

だから、朝夕の禮拜は一家揃つて行ふことがよく、祖先の命日には心からの供物をそなへて、厚く崇信の禮をいたすがよいと思ひます。私の幼ないころの記憶では、祖母が大の佛教信者だつた関係も手つだつて、朝夕の禮拜をすまさないければ、ご飯を食はさなかつたやうですが、それほどの厳しいものがなくてもいゝと思ひますけれど、やはり子どもの幼いころから禮拜の習慣はつけておいていゝと思ひます。

それから新年元旦の朝拜、報恩講、お盆の墓詣りなど、出来るだけ賑々しく肅嚴に營む方がいゝと思ひます。出来ることなら親類姻戚などの人々も招じて、一家團欒の誼みを遂げつゝ、祖先の冥福をお祈りした方がいゝかと思ひます。

次に、氏神さまの祭禮には、これまた一家揃つて参拜する方がよく、その肅嚴な氣持が

却て人生—生活を饒かにし柔らかにするものです。それが神佛の功德といふものでないかと思ひます。

昔の年中行事は、主として神佛崇祭に係したものが多いのですから、出来るだけその精神を生かして復活した方がよく、決してけなしたり蔑しんだりするものではないと思ひます。それは祖先への敬崇であると同時に、子どもへのよき教育であるからです。昔は今のように學校があるわけではなく、唯それだけによつて、よく子どもを教育して來たのです。子どもを祖先に目ざめることは、「孝」の道を實踐的に知らしめることであり、やがてまた未來に力強く生かす所以でもあるのです。この點、祖先はよく考へて來てると思ひます。敬重していふことです。

九、「家」と「家」の道

前にも申し述べましたやうに、昔は「向三軒、兩隣」といつて、いはゆる隣組の「家」と「家」の提携一體化が相とう強靱に遂げられてたやうですけれど、明治維新後、西歐の物質的個人文化が盛んに輸入されてから、「家」と「家」の提携一體化の影が薄くなり、自然のうちに解消された形となつたやうです。

むろん、今日でも輸入文化に割あひ無縁だつた僻遠の地方に行けば、多少は残つてゐるやうですけれど、それも昔日の濃密強靱さはなく、たゞその面影を止めてるにすぎません。況して輸入文化に最も有縁だつた都市においては、隣に住んでる「家」の名前さへ知らな

いといふ、まことに冷酷氷のやうな冷たいものに墮ちてゐました。今日、大東亞戦争が勃發して以來、「一億一心」とか「國家總力の結集」とか叫ばれるやうになつて、やつと「隣組」とか「町會」とか「部落會」とか呼ばれるやうになり、ぼつ／＼「家」と「家」の提携一體化が復活され再起されて來ましたけれど、まだ／＼十分なものではないと思ひます。

抑も、「家」といふものは、「國家」の身體的發展としての一職能機關であり、一細胞

なので、**「家」と「家」の有機的統一の聯關と相助が成立たないでは、國家の存立的生命が生き物のごとく呼吸して來ないのです。**

たとへば、私だちの身體的職能機關である肺・心臓・胃・腸などが、横の有機的統一の聯關と相助を缺くに至つては、一日もその生命的存續を保ち得ないと同じやうに、「國家」もその生存的職能機關である「家」と「家」が、統一的に有機化され一體化されない以上、生存的存立の生命體とはなり得ないのです。

私はこゝに、日本國家の脆弱點を指摘して、非難しようとする意志は毛頭ありませんが、たゞ一途に國家の精強と安泰を希望するが故に、必然にその點にふれて行くのです。が、今までの「家」は、たゞ單に一個の「家」としては、申分なく完全に出來、また上御一人に忠誠も無二無比、まことに申分ない完璧なものでしたが、たゞそれが單個に陛下に直隸するだけで、横なる「家」と「家」が統一的有機化、或は一體化を遂げての隸屬ではなかつたのです。そこに大きな脆弱點があつたと思ふのです。

だから、上御一人―陛下に對し奉つては、お互に忠誠無比の「赤子」たる自認は十分持

つてたでせうけれど、更にそのお互が提携一體化することによつて、陛下に對し奉る忠誠量と強力さが倍增されることに氣づかず、全く孤立無援、お互が縁なき衆生のやうな態度だつたのです。

これは前章においても相とう強く力説しておいたのですが、父と母が統一的に一體化されなければ、眞の「親」とはならず、兄弟姉妹が友愛相助の至情において、相融和し一體化されなければ、眞の「子」とならないと同じやうに、私だちの「家」も、相互に「國家」の赤子なる眞心において、相提携し相助し、有機的に一體化されない以上、それは眞に「國家」の赤子たる眞の「家」とはなり得ないと思ひます。

よし一步をゆづつて、赤子たるを得ましても、それは飽までも孤的な單個な赤子で、眞の「赤子」としては甚だ距離が遠いと思ひます。だから、長多いことだが、上御一人の陛下におかせられても、かゝる孤的な單個なものでは、全幅のご満悦あらせられる筈はなく、よろしく一刻も速く陛下の御前を辭しつて、「家」と「家」の強靱無比な聯繫と一體化をはかり、その搖ぎない基盤の上に立ち、改めて參謁申しあげた方が、どれほど大

な御満悦か知れないと拜察します。眞の「赤子」とはかゝる赤子をこそ申すのだと思ひます。

だから、今までは、上御一人の廣大無邊な御稜威によつて、國家の外廓だけは保つてゐたのですけれど、その内質に至つては、全く空疎、そこに何等の國家的な國民組織がなかつたのです。むろん、行政組織はありましたけれど、それも法治一點ばりで「家」的な情がなく、人間的な血のかよつた生命體ではなかつたのです。前の近衛首相が「國民の再組織」を叫ばれ、大政翼賛會の誕生となつたのも、恐らくこの組織的空疎を充實さすべく計劃されたものと思ひます。

だが、唯一つここに、最も巨大な頼母しい存在だつたのは、「軍隊」の大家族的な精強無比の存在、これなのです。この軍隊あつたが故に、滿洲事變から支那事變、更に大東亞戦争にかけて、あのさん然たる大戦果をあげ得たのだと思ひます。今日の國民そのまゝを第一線におし出したのでは、全く四離滅裂、立ちどころに大敗北を喫したに違ひありません。それは今日の國民に有機的な一體化の組織と體制がないからです。

銃後といへども、軍隊とは別な意味において、いはゆる銃後的な意味において、軍隊と同様な組織と體制の整然たるものがなければいけないのです。それが出来てこそ、初めて高度國防國家の體制が基礎づいたといへるのです。

むろん今日とても、國民一人々々においては、應分以上の「國家」への忠誠は捧げてゐませうけれど、それは飽までも個々のもので、國民相互の一體的な組織において、身體的な相助と協力において、それ等の忠誠がなされてゐないのです。

だが、近衛前首相の提唱によつて、「大政翼賛會」なるものが誕生し、國民再組織の運動に乗り出してから、隣組の再起となり、町會・部落會の再興となり、翼賛少・青・壯年團の結成となり、各職能團體の整理統制となりして、矢つぎ早に、それ／＼横の連繫強化が行はれてゐますけれど、まだ／＼満足すべき域には達してゐません。

私に言はせれば、今日の國家行政區を「家」的に大家族制となすべきだと思ひます。今日の國家行政區としては、字・村(町)・郡(市)・府縣となつてゐるわけですが、それを一々「家」的に大家族制となすべきだと思ふのです。

今までの行政の仕方は、國家行政だつたといふよりも、むしろ國家を失つた社會行政だつたのです。だから、行政の目的が國家生活から出た必然的なものではなくて、多くは社會の生存意志によつて動かされたものなのです。行政が常に社會的だつたのです。それが冷たい法治の所以なのです。——（國家と社會の差は後で詳しく述べます）——

だが、日本では、近世・中世は別して、肇國初期の上古時代においては、「國家」が完全に「家」だつたのです。「社會」といふものがなかつたと思ひます。したがつて、西洋のやうな冷たい法治國でなく、温かい血縁化の道義國だつたのです。だから、生成發展してやまない生命體だつたと思ひます。その生命體に、今日の國家行政區を還せばいゝのです。

それにはまづ、「家」と「家」の血縁化的な聯繫一體化が行はれなければなりません。それがいはゆる「隣組」です。それもお役目的・お座なりのな實のないものでなく、上御一人に上通し奉る十分な見通しをもつた、國家的眞劍なものでなければならぬと思ひます。いはゆる今日の「家」が上位の統一的「家」——隣組へ、必然に生長發展したものでなければ

ばならぬと思ひます。無縁のものを血縁的に有縁化する思想と諦觀は、私だち日本種族として特質的に持ち合はせてるのですから、その思想的・諦觀的擴延をはかればいゝのだと思ひます。それにはむろん、相とう信念的な強いものが要せられると思ひますが、すでに過去に行はれた歴史的なことなので、その遣り方さへうまく軌道の上のれば、割あひ容易く行くのではないかと思ひます。相とううまく行つてゐる實例もあるほどですから。

で、「隣組」は「隣組長」を「家長」とし、「家」をその家族とする、「家」より一位上の「家」なのですから、「家」と「家」の道も、何ら「家」の道と違つてゐないのです。「家」と同じやうに、「家」と「家」が、血縁的に一體化し統一されれば、それで申分ない完璧の「隣組」——家なのです。

だが、たゞ問題となるのは、思想的・諦觀的には理窟が簡単に通りましても、事實において血縁が薄い、といふよりも無縁なのですから、理窟通りには簡単に行かぬといふ難點があるのです。だが、それを押しきつて、思想を饒かにし諦觀を大にして、血縁化し一體

化するところに、今までよりか上位の廣やかな世界が開け、感情が湧き、一段と高い人生の段階が踏めるのだと思はなければなりません。

私たちは、餘りに現實に即しすぎるから、物の考へ方・見方が狭くなるのだと思ひます。現實に立脚することはいゝが、物の見方・考へ方をもつと高所大所に立たせて、過去をおもひ眺め、將來に廣い見透しをつけて、ゆたかに大きく過現未の悠遠な世界に、「現實」を浮かせることだと思ひます。

さう他人を毛嫌ひすることは無いと思ひます。鉢に金魚でも泳がせるやうに、他人を自分の世界に浮かせて見ることも、決して悪い眺めではないと思ひます。金魚や小鳥や朝顔や菊は愛せられるが、他人を愛することが出来ないといふのでは、それだけ世界が狭いのだと思ひます。

他人だつて無下に危難あるものでなく、その骨や鱗さへよく呑みこめば、金魚や小鳥を飼ふと同じやうに、さう大した違ひがないものです。人間といへども持前の軌道を歩くより外ないので、或意味において可愛い親愛的なものなのです。それを餘りに重大に

恐怖的に考へるものですから、疎隔的に遠のくのだと思ひます。

また、自分の家族には血縁的なつながりがあるから、うまく行くのだと言はれるかも知れませんが、なるほどそれも事實には違ひありませんが、しかし「隣組」には血縁と同格の地縁といふものがあるのです。日本の多くの人たちは、「血縁々々」といつて非常にやかましく言ひますけれど、「地縁」の尊さをお知りでないやうです。この詳しいことは、「第四章、國家における女性的地位と責務、五郷土の神」のところでも述べたいと思ひますが、大略のところを申しあげますれば、

私たちは、蚯蚓と同じやうに土を食つて生きてるのです。かう直接法に露骨に言つてはお判りでなく吃驚なされるかも知れませんが、それは直接のか間接のかの別はあつても、土を食つて生きてることは事實なのです。米・大根・麥・魚・肉・一として土の變形でないものはないのです。

また、私たちの性格―人柄は血液的に決定されると同時に、土地的にも決定されるのです。南國の人は明るく、北國の人は暗い。それは土地がさう決定するのです。だから、私

だちの存在は、血液を放れてないと同じやうに、土地を放れてもないのです。だから、土地を愛しないものは、血液をも愛しないのです。

遠く外國に行つてゐて、「同じ日本だ」といへば、それは生れが遠く臺灣の果てだらうが、北海道の奥だらうがいゝのです。すぐ兄弟のやうに親愛感が持てます。それは土地のつながりがさうさせるのです。わけて同じ縣だ同じ村だ町だといへば、どれほど嬉しいか知れないのです。多くの人だちは、この尊さを知らない。まことに残念なことだと思ひます。

私だちは空氣の有難さについては、殆んど無感覺に打すぎてるやうですが、潜水艦に乗つてる兵員だちは、「空氣はあまい」といつて大變に有難がるさうですが、土地にゐては土地の有難さに無感覺になるのでせうけれど、血液の尊さを知つたら、同時に、土地の尊さも知らなければ嘘だと思ひます。自分の半分を知らないものだからです。

「血縁と地縁」この二つが私だちの生活に内包され統一されて、初めて眞實在的存在となるのです。眞の廣やかな悠遠な世界が開けるのです。血縁だけでも狭く、地縁だけでも

狭い。「血縁と地縁」絶対にこの二つが必要なのです。

この地縁ぶかいつながらのある「兩隣向三軒」が、朝起きて初の顔あはせても、「お早うございます」の挨拶もしない冷膽さでは、それは相互の生活的な壓迫感で、世界がそれだけ狭く窮屈に縮小されてゐます。それを押しきつての「お早うございます」の一言が、どれほど廣く世界を展開し、朝の清涼をどれほど爽かにするか知れないのです。それは自分だけではない、隣の人をもさうさせるのです。そこに隣人としての親愛の情が、いやが上に湧き交流されるのです。

「お宅の茶山花は立派に咲いてゐますこと、毎朝眺めさせて頂いて清々してゐますのよ。花は有難いものでございますわね」

「いゝえ、まだ今年の成績は悪いのでございますのよ。それよりもお宅の椿の方がいゝ色ですこと」

何も隣の茶山花までも自分の所有にする考はないのですが、しかし、それほどの廣やかな考で、隣の人を眺め生活を眺めることは、決して悪いことではないと思ひます。何もさう

窮屈に考へる必要はないと思ひます。

日々の生活なども、物資の少い當節のことですから、お蔭一つ、葱一本でも分け合ふことは、決して醜いものではないと思ひます。分けあふものゝ多寡ではない、その情に置はしいものが漂ふのです。

「今朝、田舎から持つて來ましたの、ほんの一つ」といつて顔出せば、贈られた品の多寡を超えた、いみぢき情に涙さそはれるのだと思ひます。さうした情を味ふ事の人さまよりも、自分の方が日に日に、生活が饒かになつて行きつゝあることを感ずると思ひます。

その他、吉凶慶弔の折々にも、よく顔出して眞身になつて祝ひ、弔して上げることだと思ひます。

防空訓練にも常會にも、出来るだけ眞面目に眞剣につとめて、隣組長さんの勞苦を積極的に低減して上げるやう、心掛くべきだと思ひます。何度もく／＼無駄足をふませたり、定時の時刻に遅れたり、届出の書類などを遅滞したり——などは、餘儀ない事情のない限り怠慢上からは絶対に爲すべきことでないと思ひます。

そして、土地を住みよくすることが肝要だと思ひます。更に「隣組」は發展して「町會」・「部落會」となるのですが、それは次項で述べます。——

10. 「國家」への道

普通の「家」では、第二次までの「家」を内包し、第三次の「家」が「隣組」となります。更に「隣組」が他の「隣組」と統一的に一體化し、更に上位の「家」を形成します。それが「町會」または「部落會」です。

今まで日本の「家」は、「町會」または「部落會」まで發展しましたけれど、それ以上は發展しなかつたことは既に述べた通りです。——（第一章、わが家族制度、七第三次：この「家」を参照していただきます）——

だが、徳川幕府は一の大家族制の家であり、各地方の藩の大名がまた一の大家族制の

「家」であつたことは、認めなければなりません。たゞその治下の私だち庶民が、幕政または藩政の施策方針から、藩と藩の統一的一體化が抑制され、部落と部落の統一的一體化が阻止されてゐました。

むしろ、藩と藩がお互に牽制しあひ畦みあひするやうな幕政がとられ、部落と部落がお互に勢力を殺ぎあひ削りあつて、或限度より大きくならないやうな藩政が施かされてゐた形跡がある位です。だから、一切の慣習道徳といつたものは、どうしても小乘的な狹隘なものにならざるを得ませんでした。

それが明治ご一新となつて、さうした幕政藩政の天蓋が除きさらされて、初めて天日を仰ぎ、上御一人に直隸申しあげるやうになつたのですが、それも「家」「部落」「家」的發展をとほして、眞の「國家」となり直隸申しあげたのではなく、何と申しませうか、私だち個人が個々に直隸申しあげるやうな形になつたのです。こゝに「家」は單なる住家となり、部落は單なる住み所となつたわけです。これも破壊から建設へ進む一の過程として、止むを得なかつたことと思ひます。

だが、日本の肇國當初の上古時代においては、國家は直即に「國家」であり、「家」は國家の身體的發展としての職能機關でありました。いはゆる國家の手であり足であり、口であり耳であり目であり、肺であり心臓であり胃であり腸でありました。——（これは第三章、「家」の基盤」で詳しく述べます）——

皆さまもご存じのやうに、明治ご一新當時は、國政が多事多端で繁忙だつた關係から、さうした組織と體制の確立に手が延びなかつたのだらうと思ひます。そこへ西歐の物質的個人文化が輸入されて來ましたので、日本古來の傳統が臺なしとなり、古い物は取こぼたれ賣拂はれて、新しいものゝと氣違ひじみるほどに追求されたのでした。そして大たい滿洲事變前ころまで來たわけです。

だが、こゝに有難いことには、私だちの體内に包藏する祖先傳來の血液だけは、どうすることも出來なかつたことです。日本古來のものといへば、唯それだけが残つたわけです。祖先傳來の血液といふものは、「どんなものであるか」は、本章八「祖先への道」で申し述べた通りです。一切のものを奪ひつくしても、血液だけは奪へないものと見えま

す、有難いことです。この點、祖先に對して深く感謝したいと思ひます。歴史的血液の尊さを思ふが故です。

今一つ奪はれなかつたものは、わが日本に恵まれた秀麗優雅・山水明媚の大自然でした。富士山は今もなほ嚴存してをり、梅・櫻・桃なども春が来れば必ず咲きます。鶯・雲雀なども囀ります。夏が来れば空気がまじく螢がとび、山色愈々濃く、海愈々碧い。秋が来れば金山紅葉となり、野には菊花にほひ七草亂れます。柿・あけびが實り、鈴蟲・松蟲が長夜を壽ぎます。冬が来れば満山銀世界となつて、人の心もいやが上に肅嚴です。――

(「土地」の如何に尊いものであるかは、後でまた述べます)――

この二つは、私だち日本人的性格を規定する血液的・或は自然的內容であり條件なので、この二つを奪ひ取らない以上、私たち日本人は久遠に嚴存します。またこの二つは、絶対に奪ひ得ないほど偉大な存在であるは、何人も認めなければならぬでせう。

だから、遂に目ざめるときが来たのです。滿洲事變をきっかけに、支那事變となり、更に發展して大東亞戦争となりました。これ外、米英支の強敵を居ると同時に、内、私たち

の血液的・自然的な性格内容と條件に自覺し、純正無垢な日本人たることを要請して止まないものなのです。むしろ強敵は内にあることを知らなければなりません。内なる米英的な思想・感情・意志をせん滅し、最も祖先的な性格の血液性・自然性に目ざめなければならぬのです。

この意味において、私たちはまづ、國家が直即ち「國家」だつた上古時の體制に還らなければならぬのです。上古と今日とは單復粗精の遠距離的な別はあるにしましても、その精神と情義においては一方のですから、その精神と情義に還らなければならぬのです。

だから、「家」が發展して「隣組」となり、「隣組」が發展して「町會」または「部落會」とならなければなりません。更に「町會」または「部落會」が發展して「區會」または「町村會」となり、それがまた發展して「市」または「郡」となり、それがまた發展して「府縣」とならなければなりません。「府縣」がまた發展して最後の、名實ともに備はつた「國家」とならなければならぬのです。

最低位の「家」から層々して上位の「家」へ、上位の「家」へ、有機的・相關的に發

展し、「國家」の身體的職能機關—手・足・耳・目・鼻・口・肺・心臓・胃・腸、等々とならなければならぬのです。——（眞の身體的發展はこの逆なのですが、理解に便するためかう説述しました。國家の眞の身體的發展は、第四章、一「國家の身體的發展と家」のところ述べてみます）——

上古時代の國家體制においては、職能が直即ち「家」だったので。今日では多大に離別してゐますから、前記の國家體制は「治安」的なものだとはいへませう。だから、別に「生産」職能機關の國家體制があり、「教育」職能機關の國家體制があると言はなければなりません。會社・銀行・工場なども單なる孤立的なものではなく、それ／＼に大家族制の「家」的な國家體制を採らなければならず、學校なども單なる孤立的なものではなくて、やはり大家族制の「家」的な國家體制を採らなければならぬと思ひます。

こゝに來て、私たちが「國家人の道として如何にあるべきか」の問題も、はつきりして來てると思ひます。もう私たちに、今までのやうな自分勝手の行意や行動は許されてゐないので。飽までも「國家」の身體的職能機關として、或はその細胞として行動し

役立たなければならぬのです。

昔の人は、一も二も祖先の名と靈心において、最も肅嚴に行動したと同じやうに、私たちもまた最も高き祖先の名と靈心において、最も肅嚴に行動しなければならぬのです。そこに一抹の恣意や雜念があつてはならぬのです。身體的にも精神的にも明純清透、鏡のやうな清徹な姿に切り切つてゐなければなりません。そして一も二も「國家々々」で明け暮れし始終しなければなりません。

だから、最も純正な「國家」の高き名において、「家」を治め、「隣組」に精勵し、「町會」または「部落會」に顔出し恪勤し、町村・郡市・府縣の上位的な「家」に對しても、恥しからぬ職能と責務と親愛を捧げなければなりません。それがやがて「國家」の大君に對し奉つて、忠誠無比の「赤子」たる資格となるのです。

絶対に、縦横の聯楔のない單個的・孤的な行動や生活では困るのです。必ずや戮心協力して一人でも多く一體的に包攝し、一力でも多く附加倍増して、所期の目的に結集せしめなければならぬのです。もうそこに、好き嫌ひや毛嫌ひ的な小兒病の感情を挿んではいけ

ないのです。須く大所高所に立つて、一切のものを包收し一體化となり、その總全力を結集して、大東亞戰の目的完遂に挺身し奉獻しなければならぬのです。「國家」の全を殺して、絶対にその部分がないのですから。

私だちはもう、「國家」をわれ自身として宗教し諦觀しなければなりません。畏れ多いことだが、上御一人におはす天皇陛下を、他人行儀的に外在しますものとお考申してはなりません。私だちの精神界の最高位に内在ましまして、一切の生活を照覽あらせ給ふものと宗教し、諦觀申しあげなければなりません。そして陛下と共に生き、陛下と共に死ななければならぬのです。

更に、「國家」をも私たちに内在するものとして、一億の同胞をも温かく内包し、眞の身内として孚み育てたいものだと思います。そして「國家」の隆昌と盛大を生み生みして、これを子孫に傳へなければなりません。

私たちは、「國家」として祖先から生れ、「國家」として生き、「國家」として子孫を生むのが、私たちに賦課された最も高き、運命的な責務でないかと思ひます。これが祖先

傳來の、私たち日本種族の遠く高き哲學觀——死生觀だと思ひます。